

〔表紙〕

義久公	慶長四年 自八月
義弘公	至九月
家久公	

後
編 舊記雜錄 卷四十六

830

〔義久公御階中〕

〔案文帳寫〕

爰元頃者一行と存候処、從内府様御使者被成下、下向候、就其先々下城之儀を可被理由候、到源二郎被仰越候、然者上方之御威光故ニ候哉、大方致領掌、和睦ニ可罷成様子ニ候、併自彼方申候事ハ、毎度變改之儀耳候之間、可致首尾事いかゝ候はん哉と存候、とかく近日可爲一着之条承窮、態以早打可申越候間、京儀弥可然様ニ御賢慮專一ニ候、仍而雖輕少^{〔本ノマ〕} 准覽候、補空翰計候、恐々、

〔朱力キ〕
〔慶長四年〕八月一日

831

〔案文帳寫〕

兵庫入殿

乍卒介、神道傳授依大望、爰元社家之者兩人指上せ候処、無吳儀被授下候事、謀爲國家満足不少候、就中貴院御入魂之由申來候、御懇之儀共ニ候、此等之爲御礼、先々用一書候、仍雖輕少候、到二位殿生糸三斤、左兵衛殿同色三斤令進上之候、宜預御取合事頼存候、又貴所へもしゆすニ端進覽之候、補空翰計候、恐々、

〔朱力キ〕
〔慶長四年〕八月二日

神龍院

832

〔案文帳寫〕

其後ハ無音ニ打過、非本意候、仍上方靜謐候之哉、新儀とも於有之承度候、將又於其地すぎ道具誂置候、定而頃者可出來かと存候、さも候ハ、様子可申付候条、始末之入魂頼存候、兼又乍輕少しゆすニ端進之候、顯寸志計候、恐々、

〔朱力キ〕
〔慶長四年〕八月二日

長悅

已上

内府様御使御下向ニ付、到庄内御人數被差出之由被仰聞候、此方へも内府様御書被成下候、然者御一左右次第可罷出之旨、得其意申候、何様以參陣可得貴意候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
「慶長四年」

八月二日

高橋右近太輔

元種(花押)

羽少將様參
貴報

猶々爰元相應之御用等被仰付候ハ、可忝存候、不可存疎意候、扱々打續御手柄共、爰元各々御かんし候、弥無御越度様ニ尤ニ存事候、以上、

幸便之条令啓上候、先日伊平左罷下申候刻、以書狀申上候ッ、相届候哉、其表茂敵出城其假乘被取、首七百計被打取候趣、爰元無其隠候、内府様へも我等申上候、非大形御かんし被成候、程近候ハ、我等式も御見舞申度候事候へ共、遠路之御事候へハ、乍存知不能其義候、將又從兵庫様きんさう仕候仁尋候てと承候間、此小兵へ下

申候、爰元無隠仁ニ候、小攝州家中ニもいたし、其元ニ

而御尋可被成候、京田舎ニて無隠仁ニ候、兵庫様も如何程之仕手と候て、きんさう御尋被成候處、別而心あるへく候て、御抱之義候、武邊ノ義數度覚在之仁ニ候、兩口之仁候ハ、被懸御目候て、そつニ成申ましく候、勘忍成候之様ニ候ハ、於我等忝可存候、猪介武邊之者候つる、いかゞ仕合承度候、く、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
「慶長四年」

八月二日

舟五郎右舟越也

(花押)

嶋津又八様
參人々御中

猶々此比者、奉公仕度と申來人日々在之事に候、此跡曾而無之事に候、何たる心持にて候哉と申計候、以上、

彼生田小兵衛尉と申候ハ、疵醫者にて候、舟越五郎右衛門尉殿ハ、貴所へ奉公させられ度との儀に候、連々旅人をかたらひ候儀者、遠慮可入事と存候間、我等前々狀共付可申儀者雖可致斟酌候、手醫者之事者大切ニ候、其上此人物語を承候分ニ功者ときこえ候、就中醫道之手筋も

よさうニ承得候間、舟五郎右儀ニまかせ指下候、手醫道之儀者不及申、一身もりちき者にて、何たる奉公も可仕仁にて候由、舟五郎右承候間、彼是先被食仕候て可有御覽候、知行なと不被宛行間へ、十三人扶持欵、十五人扶持欵、御分別次第被遣之候へと、舟五郎右承候、妻子などハ肥後ニ食置候間、薩へ堪忍仕候者めしよせへきと申候、又人のかもいなと有人にてハ無之由、舟五郎右承候、爲御心得候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長四年〕八月三日

〔義忍〕
維新(花押)

少將殿

836

〔御文庫二番箱家久八巻中〕「家久公御譜中ニ在リ」

御下向以來無沙汰仕候、仍伊集院御折檻之儀、今程如何と被仰付候之哉、尤罷渡可申上候之處、從小攝様以時分可被仰越之由、内と被仰付候之条、相待一左右無其儀候、餘油断之様候之間、爲可承飛脚申付候、此由可然様可預御披露候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長四年〕

八月五日

五嶋淡路守

玄雅(花押)

進上 河上四郎兵衛殿

837

『新納氏藏書』

猶と弥太右衛門尉事、無恙致奉公候、爰元も無人之儀候へハ、別而晝夜辛勞仕事にて候こそ候へ、

其後者無音之至心外候、仍其表無何事候之哉、京都之儀も弥以静謐ニ御座候、然者源二郎事于今楯籠被居ニ付、及御行、殊先度者山田之城被攻崩之由、玆重候、當時者少將殿在國之儀候間、別而可被御奉公申事肝要ニ候、猶重而可申候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長四年〕八月五日

〔忠元〕
維新(花押)

新納武藏入道殿

〔此御書、忠元譜中ニ在リ〕

838

〔御文庫二番箱義弘公巻中〕「家久公御譜中ニ在リ」

從 龍伯様早打被差上ニ付、傳言之通承届、令満足候、一國元無替儀候哉、尤玆重候、京都之儀も、弥以無事ニ御座候、

一 庄内之儀、于今相支申候由候、無心元存候、涯分無失儀様ニ、才覚肝要ニ候事、

一 庄内之儀ニ付、從 内府様別而被添御心、弥御懇之儀不大形候、然者寺澤志广守殿爲御使、又と其許へ可被

差下之由候、巨細之様子者、新納左右衛門入道可申入候事、

一帖佐置目之儀、弥以被仰付候て可預候、自是も堅申付候へ共、遠方ニ在之而申付候事者、諸篇不届事ニ候之間、切々可被入御念事頼存候事、

一宰相事、去月以來被相煩、散々式ニ候、併養生祈念等之儀無由断候之間、可爲快氣と存候、然者かミ様よりも別而被入御精、祈念等被仰付、節々御見舞被成、種々御懇之儀共ニ御座候事、

一帖佐藏入代官之人衆、今度庄内表へ罷立候而者、收納以下調間敷候、左様ニ候へハ、拙子在京も一圓ニ不罷成儀候間、彼代官之者共在陳不仕、收納一篇ニ仕候やうニ被仰付候て可預候、猶此使以覺書可申入候条、不能腐毫候、恐々謹言、

〔朱力半〕
〔慶長四年〕八月六日

維新(花押)

又八郎殿

〔本田助之丞藏書〕「義弘公御譜中ニ在リ」

猶々 内府様爲御使、寺沢志摩守殿可有下向之由候、

一段其内能々遠慮肝要候、以上、

其後者不慮之儀ニ付而不通相過候、併遠方故ニ候、

一六月廿七日之書狀、七月廿六日相届、令披見候事、

一幸侃事者、連々悪心歴然ニ付而、被加御成敗之条、不及是非候事、

一貴所進退之儀者可被食出之由、竜伯様・少將殿も度々雖被仰聞候、身躰之一着無之ニ付而、于今籠城之由、其上伊東豊後殿被喫候へ共、是も 竜伯様御前より身躰一着不被仰出事、早竟源二郎被申儀、 竜伯様不被聞食届欵之由承候、此段者貴所被申分も、又 竜伯様御返事之通も不存候間、いかやう共難申候、とにかくに君臣上下之例法、貴所一人ニ不限儀ニ候之条、勿論一着之儀無之候共、 竜伯様御詫次第、應其旨被罷出候而、縦被加御成敗候共、名字之耻辱ニ者成間敷候、相背御下知被果候者、且者臆病にて不被罷出にも相似、且者無道至極にて、天道ニはなされ、家之始末をしられさるよし、自他國之嘲哂無念之儀ニ而者あるまじく候哉、若輩之者共邪なる儀を申ニ隨ひ、家をくつされへき儀、さりとてハはいなき事にて候、當時一味ニ腹を可仕と申候者も、はて々ハ皆以令相違、貴所一人之迷惑ニ及はれへき事眼前ニ候、已近年も多人數被相

抱候大名衆も、腹之庭ニ至りてハ只一人ニなられ候儀、
貴所も存知之前ニ候、如此之儀者、愚老年ひさしく自
他國之上ニて多々おほえ在之事ニ候、能々思唯遠慮此
時候事、

一幸侃御成敗之刻、則小傳次を始兄弟中、無別儀可被食
出之旨、以神文少將殿ヲ被仰聞候、然者小傳次兄弟中、
其外家中者共一同ニ奉公別儀有間敷旨、神文血判を
以御請申上候、就中加治木・吉田事ハ各別之儀ニ候之
間、早々罷出、御奉公可仕之旨、愚老前ヲ堺之津ニ至
ても申きかせ候得者、親之火忌之うちハ如何候条、火
忌はれ候ハ、追付可罷出之由申補ひ、ふと加藤主計
頭を頼ミ罷出候て、弥逆心之企無其紛候間、不及是非
鞍馬之様ニ被遣置候、然処兄弟伏見へ相越、さか木原
式部少輔方を頼ミ、内府様へ御奉公可仕之由言上候
ニ付而、内府様一段不可然之由被仰出、式部少輔も
此儀取次申ニおいてハ可爲曲事之由、不淺被成、御説
候、又徳善院へも内之者ニ罷成度之由致訴訟候得共、
勿論徳善院も無御請付候、如此方々慮外之才覚以之外
候、剩貴所事も于今籠城候て企銚楯、然与御敵を申さ
れ候条、右兄弟之者共身躰もあやうきニ付而、又々関

東之様ニ可被遣之由相定候事、

一貴所を被食出候て、知行等いか程可被遣之も、此方ヲ
難計候、雖然被食出候程ならハ、堪忍ならぬ程にはあ
るましき欵と存候、此段者愚老在之事候条、隨分心を
添申へく候、萬事をさし捨罷出候て、此間企銚楯何欵
と延引慮外之由、御侘被申候者別儀有ましく候欵、返
々道を道ニ立られ候て肝要ニ候、貴所進退之儀、愚老
吳見次第と、今度之書面〔六月十八日ノ狀欵〕ニ相見得候間、不殘心服令書
載候、無吳儀候様ニ分別あるへく候事、

一貴所前ヲ預候書狀即写候て、竜伯様爲可懸御目指下、
様子申上候、於其元も愚老へ示給候通、少も無相違可
被申上候、恐々謹言、
〔慶長四年〕
八月六日
義弘〔花押〕

伊集院源次郎殿
〔忠實〕

〔此御案文、御文庫廿三番箱十四卷中ニあり、引合置也〕

840
〔義久公御譜中〕

〔案文帳寫〕

度々預使札、御懇之儀共無申計候、就中今度濃ニ御注進
之段、御眞実之至、于今雖不始、弥喜悅不訶候、於様子

者、委曲使節ニ申候条、不能一二候、恐々、

〔朱力キ〕
慶長四年八月六日

立花殿

〔義弘公御譜中〕

〔正文在卷本〕

草案

御下向以後、度々以書狀申入候、定届可申候、上方一段御無事ニ候、國元替儀も無御座候乎、庄内邊之儀無心元候、先札を以申入候様ニ、庄内へ貴所御家中の魚塩などを下と通し候由風聞候間、無実所儀ながら承付候通申入候き、さり共さやうの儀者有間敷と存候處ニ、庄内は落人多く在之而、右之風説事実之由、國元は追々到來候、此上にては正儀有間敷と存候処、石治少は去春庄内へ被指下候使者、貴所家中之様ニ罷通、則源二郎者令同心、此元へ罷上候、是者歴然之儀に候、如此之時者、貴所家中の庄内へ通用在之儀、無其紛候、於此元直申談候上御取置之段、さりとてハ無御心元候、大小名ニよらず、君臣上下之例法古今不殊儀に候、源二郎事者可食出之由、竜伯・少將前は度々申きかせ候処、于今令籠城、企鉾楯

候之儀曲事深重之由、内府様も被思召ニ付而、天下之見せしめ、御治世之上に候条、御人數をも被指下、急度可被仰付之由、切々雖被成御説候、竜伯・少將在國候間、其儀ニ及申間敷之由、先々申延候、如此内府様被人御念被添御心候て、其元爲可被聞食合、山口勘兵衛尉方被差下候条、貴所家中の庄内へ通用在之段、於事実ハ、早竟一揆御同意ニ可相當候欤、御爲不可然候、又直談ニ申合候筋も無篇罷成候之条、彼是御心中無御心元候、定御理も可在之候へ共、當時御手前は下々私曲にて、勿論貴所御存候之上にて、庄内へ御通用候へハ、萬々無曲次第候、高麗以來別而申談間之儀候条、心底之通申入候ハねハ、此跡申談辻、皆以爲ニ罷成候間申入候、竜伯・少將在國候条、諸事被仰談、可被添御心儀此節ニ候、萬々頼存候、右之様子誠正儀有間敷候へ共、承付候通有之候申入候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
慶長四年

八月六日

羽兵入

維新

伊東豊後守殿

御宿所

〔此御書、昔年之写ニ引合、文字之異同も有之事故、爲参照更ニ写置也〕

『旧記雜抄』

(本文書ハ八四一号文書ト同文ニツキテ省略ス)

『旧記雜抄』

起請文之事

御在伏見にて

一奉對 竜伯様 惟新様 忠恒様、毛頭不存別心、無二之御奉公可仕候、如何様之悪心之者爲何はかり事を仕候共、同心不申、則其旨可申上事、

一御前之出合、聊以もらし申間敷候、世上之物沙汰承付候ハ、無二儀可申上事、但無正儀候ハ被聞食捨奉頼候事、

一主人之御上かけ事申間敷事、付御陵之儀ひはひ仕間敷事、

一或者御親子之御間、或御夫婦之御間、悪きやうニ申成間敷事、

一朝夕御食物之儀不及申、少く御食物ニ付而も、聊尔仕間敷候、萬一いかなる人とたくミを以和談けうかひの儀被頼候という共、其案ニ不入、悪人之心中之通具可申上事、

一御代々御きらひの儀候条、一向宗ニ曾以罷成間敷事、

一當時幸侃妻子背御下知之構逆心候間、雖不申儀候、曾

以通用申間敷候、勿論此跡も不通仕候事、付若彼仁へ入魂之者於有之ハ、至其輩も聊申承間敷事、右條々若於令違犯者、

慶長四年

八月七日

衆中連判

「御文庫二番箱家久公八卷中」「家久公御譜中ニ在之」

御書忝令頂戴候、仍於高麗一戦之刻、大護摩御立願被成候、依之被得大理御名譽、天下無其隠候、大護摩老座、

小護摩式座被仰付候、銀子貳貫八百八十目請取申候、即

吉日以良辰執行被申候、札巻數進上候、并爲私札巻數御

守矢違令進覽候、弥御武運長久、息災延命、諸願御成就、

抽丹精御祈念申計候、猶般若院可有御申候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長四年」八月八日

良惠(花押)

進上

嶋津少將殿様
參人々御中尊報

進上

嶋津少將殿様
參人々御中尊報

三輪大宿

良惠

「案文帳寫」

使札祝着之至候、如承從 内府様御使節被差下、庄内表へも雖被仰越儀候、未無替儀候、其方へも御書御給ニ付、爰元及行者可被成出馬之由、懇切之儀共候、併當分無指事候条、御心遣入ましく候、猶委細使者可爲演說候、恐

と、

「慶長四年」
八月八日

伊東殿

猶々さらし十端送預候、畏入候、

遮而預使書、御懇之至ニ候、如承從 内府様御使被成下着、源二郎へ被仰理子細共候、併未新事無之候、兼又於上方兵庫入・少將へ被仰談儀共候哉、至拙子も承候、御懇之儀共候、彼是使者人申候条、不及濃筆候、恐々、

「朱力キ」

「慶長四年」八月九日

高橋殿

度々預懇使、令喜悅候、先々御下國之儀珍重ニ存候、將

又如御書面、從 内府様御使被差下、満足之至候、就其庄内表へも下城之儀共被仰越候、定急度一途可相聞候間、可御心安候、幸瀧七右衛門來着之儀候条、於様子者可達口上候、恐々、

「朱力キ」

「慶長四年」八月九日

小西殿

(本文書ハ八四九号文書ト同文ニシテ省略ス)

猶々さいしやうとのへ御心へ候て、おほせられへく候、たのミ存候、

追而令申候、拙者息女か事、當家人しちとして十三ヶ年在京いたし候、此程我等申付候間ハ三清夫婦、其後ハ存松夫婦つけ置申候、さして用ニハたゞぬやう候つれ共、見かけハよく候キ、今程ハ平田豊入如此ニ候、いちゞ駿河なとも下候、川東善さへもん・猿渡九郎左衛門尉までにてハ、外聞実儀しかるへからず候、又八郎殿御置目頼

母敷からす存候、本六なとニさへしかく／＼とハ不被仰置候哉、殊ニかの者モ此比ハ罷下候やうニ承及候、いかゝ候哉、こゝよりハ何と被仰付候らん、無心元存候、又八郎殿ヘモ此理り同前ニ申候、さてハこゝよりハしちヲハ別ニ御分別なされ候て、むもしか事ハ下向させられ、なか／＼ニめしをき候へかすと存候、我らか世ノ時こそしちにて候へ、今程ハ公儀ニモのくましき欵と存候、又八郎殿ヘ御談合尤ニ候、兼又又八郎殿何事モ神妙ニ見え申候、目出度候、酒過候ハぬやうニ細々可被仰候、又たゝれさうニモなき座ヲたゝれ候事、なをし度候、然共我／＼むかしかたぎハ當世不合候条、不及是非候、恐々謹言、

〔カタクカキ入也〕
〔慶長四年〕八月拾日
 竜伯〔義心〕

〔上書〕
 武庫入道殿
 義弘公御譜中ニ在リ

〔義久公御譜中〕

〔案文帳之寫〕

長々從高麗打續被遂御在京、頃被成歸國之段、千秋万歳

ニ候、多年之御辛勞無申計候、然者源次郎就楯籠、度々預御音問候、殊瀧七右衛門兩度迄被指越、種々御懇志之儀、外聞旁難謝候、就其此節ハ可催一行と存候処、從内府様御使被成下着、先一往下城候儀を可被仰越由候而、御理共候へハ、上方之恐惶を存候哉、宜申出候、當分之躰ニ候ハ、爰元之儀聊御心遣入ましく候、恐々、

猶々我等息女之事、長々其地へ令堪忍候処、色々御入魂之由忝候、殊頃ハ致歸國満足不過之候、此等之御禮等所々未申入、無音之至所存之外ニ候、仍太刀一腰・馬代并別而馬壹疋進覽候、祝儀迄候、

〔朱カキ〕
〔慶長四年〕八月十日
 小西殿

〔案文帳之寫〕

從 御家門様御書致拜領、忝令存候、然者京都弥静謐候哉、目出候、就中御姫宮御無事之由、千秋万歳、愚老一人之満足不可過之候、將又又八郎玄与所へ之御書、慥相届申候、仍雖輕少候、生糸二斤致進上度候、於不苦者、宜預御取成事所仰候、恐々、

八月十日

進藤大藏入道殿

852

『本田氏藏書』

就惟新所用之儀借用申銀子之事

合式貫目者

右者利平老貫目ニ付一ヶ月四拾匁ツ、本利共ニ當年中ニ可致返弁候、至此銀子者、天下一統之徳政有之共、不混他ニ可令弁濟、縱此三人之内老人雖有之、返弁之儀堅可相濟者也、仍後日狀如件、

慶長四年己亥

八月十日

本田源右衛門尉

河上四郎兵衛

新納旅庵(長住)

材木屋

与兵衛殿

まいる

853

『朱ニテ』
『右之藏書』

慶長四年八月借用

右本銀貳貫目

慶長四年八月より同五年三月まで

利平六百八拾八匁

本利合貳貫六百八拾八匁

内本銀老貫目、但慶長五年三月渡申候、

殘而本利共合老貫六百八拾八匁

慶長五年卯月分

利平五十六匁

本利合一貫七百四拾四匁也、

右之外

老貫目者

慶長四年拾月御借用ニテ、米百五十石可被相渡兼約候、然処五十石旧冬受取申候、殘而五十石五分、銀ヲノ七百目之懸り也、

二口

合式貫四百四拾三匁九分

九百四拾三匁九分、但慶長五卯月ニ濟也、

殘而老貫五百目又借用 慶長五年五月より

右之利平之事、老貫目ニ付一ヶ月ニ三十目ツ、の利平

也、

慶長五庚子卯月十九日

(新納長住)
旅庵

材木屋

与兵衛殿

まいる

「御文庫二番箱家久公三卷中」
「家久公御譜中ニ在リ」
以上

歸國仕候付て聞召被届、早々御使札致拜見候、自是も使を以申上候、定而參着可仕と存候、庄内表之儀付て、從内府様御使者下着之由被仰聞候、於伏見拙者罷下刻も、依様子爲御加勢、我等式も罷立儀可有之旨、内々御意候、左様之儀も爲可得貴意、使者を以申上候、何之道も可被任御存分儀程有間敷与存候、將亦爲御音信、縮式拾端被懸御意、御懇意忝存候、猶御使者へ申上候、恐惶謹言、

「朱力半」
「慶長四年」
八月十五日
小攝津守
行長(花押)

羽薩少將様
まいる御報

慶長四年己亥三月、慈眼公手誅伊集院忠棟於伏見邸、子源次郎忠貞在邑聞訃、乃據都城置十二堡、分兵叛公、特實明公老於富隈、乃使平田狩野介宗應帥兵、往戌渡瀬以備財部、於是實相及新納四郎右衛門忠陸・平田三五郎宗次・吉田大藏清家・市成隼人武重・弟藤助武明・中

「兒玉氏筑後利昌譜中」

村彌七・弟彦三郎等亦與戌之、五月、慈眼公反自伏見、親將討之、時安樂大炊介從在別屯、八月十七日、來訪渡瀬、十八日、實相及忠陸・清家・宗次等飛檄謝之、

「國分主安樂氏藏」
「渡瀬也」
昨日者態々爰元へ御越候、誠ニ御心実之儀忝存候、さりながら御急之故、然々不申承候事、いまに口惜候、其地何たる新儀とも候するや、左様なるときはちと御注進頼入候、將又爰元へさむく候てめいわく候、いま分にて、かつゑしに可申候、何れ共以御面上可申入候、恐惶謹言、

「慶長四年」
「本マ、二」
八月十八
兒玉四郎兵衛尉
実相(花押)

新納四郎右衛門尉
忠陸(花押)

吉田大藏允

清家(花押)

平田三五郎

宗次(花押)

わたせろ

安樂大炊助殿

吉大くら

前原平兵衛殿

參人、御中

ひら三五

兒玉四郎兵衛

新納四郎右衛門尉

857 「義久公御譜中」

「案文帳之寫」

預芳訊畏入候、如承於京都者遂對談、于今本望之儀候、

仍源次郎事柄籠候付、從 内府様御使被差下、噫之最中

ニ候、定而事能成行候ハん哉、とかく此元之儀、聊御心

遣入ましく候、猶使者可爲演說候、恐々、

「朱カキ」
「慶長四年」八月十九日

ちくし主水正殿

858 『嶋津氏藏書』

ハハん海賊之儀、從先年被成御停止候処、當年猥之輩有

之付而、加成敗候、向後之儀者、先年如御置目、其領主

共ニ可爲御成敗条被得其意、出船歸朝被入念、堅可被相

改候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長四年」八月廿日

(前田) 利長
(上杉) 景勝

羽柴薩广少將殿

「家久公御譜中ニ在之」

859 「雜抄」

先書申入候、伊集院源二郎于今不致下城之由、不屈儀共

ニ候、依之志志方差下申候、爲自今以後候之間、志广

被相談之、自身有出陣被誅伐尤候、委細彼口上申渡候、

恐々謹言、

「慶長四年」

八月廿日

家康御直判

伊東民部太夫とのへ

860 「御文庫ニ番箱九卷中」「家久公御譜中ニ在之」

態申入候、仍大佛本尊之御用候間、からかね式万貫目御

買調候て被差上、木食上人ニ被相渡、請取を可被取置候、

代物之事者從 公儀可有御下行候間、可有其御心得候、

恐惶謹言、

長束大藏

(毛利) 輝元(花押)
(宇喜多) 秀家(花押)
(蒲川) 家康(花押)

〔朱かき〕
慶長四年八月廿日

正家(花押)

増田右衛門尉

長盛(花押)

淺野彈正

長政(花押)

徳善院

玄以(花押)

嶋津又八郎殿

人々御中

861 「家久公御譜中」

慶長四年八月廿日、恒吉城撤焉逃去、故入我手裏也、

862 「御文庫二番箱家久公九卷中」「家久公御譜中ニ在之」

態申入候、ははん海賊之儀、從先年被成御停止候處、當年狼之族有之付而、被加御成敗候、向後之儀者其領主も可爲越度候条、出船之刻与歸着之時、堅可被成御改候、爲御届申入候、恐惶謹言、

〔朱力平〕
慶長四年

八月廿日

長束大藏

正家(花押)

増田右衛門尉

長盛(花押)

淺野彈正

863

「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在之」

長政(花押)

徳善院

玄以(花押)

羽柴薩广少將殿

人々御中

態令啓入候、

一 庄内表之儀、如何相濟候哉、其後とかく注進無之、千萬無心元存計候、

一 從 内府様爲御使者、寺澤志广守殿其方へ被成下向ニ付、今日爰許打立にて候、然者立花左近太夫殿・小西攝津守殿可有同心にて、軍衆者召列あるましきと、志殿被仰候、内府様御意之通懇ニ承届、下向在之儀候間、乍不申其許能く御熟談專一ニ候事、

一 此方へ注進之儀者、貴所寺澤殿以連判可被仰上之由、於爰元儀定候之間、其分別可在之事、

一 字相煩之儀、日ニ増おもく罷成、笑止之躰候、祈念等も相應ニ致誠精候、同養生之儀も雖無、由断候、更不得驗候、餘之事ニ下國候而養生候者、若能候ハんと存、御暇之儀 内府様へ申上候へ共、可被下やうニ無之候、

何とも心遣ニ存事ニ候、

一帖佐之儀、諸式かこしま同前ニ被仰付候て可預候、弥
頼存候、余者小野郷右衛門尉へ相含候間、不能一二候、

恐々謹言、

〔朱カキ〕

「慶長四年」八月廿一日

維新(花押)

又八郎殿

〔御文庫四拾八番箱公義弘卷中〕「家久公御諱中ニ在之」

猶々愚老事、いまのやうを見候へハ、永在京たるへ
きと存候間、いよ／＼國元調ニ可相究候、弓箭方ニ
はせまハリ候ても、金銀米錢の取まハしハならぬと
見え候、又算用方以下達者にても、心のまことすく
なき者ハ、物の首尾をしらす候間、役人にはなりか
たく候、此二三年か間ニ、過分之損失きこしめし及
はれへく候、早竟御家の爲にこそ致在京事ニ候条、
被添御心候て可給候、愚老手前可仕様も無之候間、
さて申事ニ候、右ニ如申候、此元にて誰人へも不申
聞候、勿論本六右へもしらせ不申候、貴所於無御分
別者、不入儀と存不申候、於御得心者、貴所前より
思食寄被仰付たるやうにもてなされ候て、可預候、

帖佐方役人も當時無之通御存知之前ニ候間、從貴所

前おほせ付候へハ、実儀一段之仕合、愚老満足此上

あるましく候、ひとへに／＼頼存候、かならず／＼

御返事待入候、以上、

思食よられまじき儀ニ候へ共、如御存今程我等役人ニな
るへき者無之候、其身もちぎニ候ても、當世者算用方な
と無案内にてハならず候、又算用方才勘ニ目口かわきだ
て仕候者ハ、上井神五郎などのやうニ、ほしいまゝニ氣
まかせ仕、我等をある者之やうニもいたさず、君臣上下
之道をも令忘却、手前之利潤を題目ニ仕候間、公私之爲
ニならず候て、早竟ハ目ふかくニ罷成、外聞をうしなひ
候、然者役人なしニ可調事にてハ無之候、愚老今少のよ
わゐたるへく候間、外聞実儀大方補ひ候やうニ有度候、
あはれ／＼本田六右衛門尉を、一節我等へやといかし候
へかし、かこ嶋の事一段御事しけるへく候間、申にく
き儀にて候へ共、貴所事者六右衛門尉通りの者五人も三
人もめしつかはるゝ儀に候間、本六右儀ハ此方へやとい
申度候、誠ニ／＼心なき申事ニ候へ共、右ニ如申候、愚
老今少之よわゐたるへく候間、被添御心候て可預候、此
元にて誰人へも此等之旨しらせ不申候、先爲御内談内狀

「案文帳之寫」

去春任御約束之儀、乍少分らん・しゆろ竹進覽候、并そ

にて申候、於御納得者、從其本六右へ直被仰付候て可給
候、恐々謹言、

〔朱カキ〕

「慶長四年」八月廿六日

少將殿

維新(花押)

「義久公御譜中」

「案文帳之寫」

猶々庄内へ往來なきやうに、弥入魂所希候、

從庄内表到其地申分共候哉、就其預使札、祝着之至候、

殊自源次郎貴所へ進覽之狀、封之儘被差越候、近比肝要

之儀無申計候、於爰許披見之儀いかゞ存候へ共、持せ

預候上及辞退ハ、等閑ニ相似候へんかと存披覽候、兼而

身をしらざる申事、沙汰之限ニ候、兼又福嶋之衆椀山權

左衛門迄、毎事無疎意之誓紙神妙之企ニ候、向後亦可申

談候条、可御心安候、恐々、

〔朱カキ〕

「慶長四年」八月廿六日

〔朱カキ〕

「アテカキナン」

「御文庫四拾八番箱義弘卷中」「家久公御譜中ニ在之」

猶々庄内表之儀、及御着陳之御行候ハ、肥筑之雜

説も事実ニ罷成、指寄可申坎と存候、自然左様ニ成

立候ハ、双方に分別之入事ニ候間、其時之覚悟專

一ニ存候、寔老のね覚にも存出、心遣のミ候、不及

申候へ共、能々思唯此時候、右ニ申候愛宕へ大百味

之儀者、本田与左衛門尉へも申付、三方より相調候、

是又爲御心得候、隨而去去年五嶋へ着船之唐人、同十

月ニ伏見へ罷上、竜伯様へ罷出之由候、其時御は

た并鎗等被下候、爲其御礼大明福建道之金軍門より

去春三月使者船をさつまへ被差渡候、乗衆二百五拾

人、惣荷物之值銀子七百目程乗たる由申候、然處於

海上日本人・唐人合而百五十人計にて海賊仕候、唐

人四拾人程者討殺、其余者ろそんの外嶋ニ下捨置た

てつ一本、是者雖非兼約、やうすおもしろく候之条、相
添候、於御自愛者可爲本悦候、猶御用等御坐候ハ、可
被仰越候、恐々、

〔朱カキ〕

「慶長四年」八月廿六日

安國寺

る由候、其中は二人ろそん商買船ニ便仕候而罷渡、

一人者 竜伯様へ參上仕、様子申上之由申候、今一

人ハ爰元へ罷上候、申分ハ、最前海賊ニ被取候船者、

天草之内牛深之湊ニ着岸候唐船にて候、彼船并海賊

之頭領を被下度候、左様候ハ、大明ニ歸朝申、日

本之御法度稱被仰付之由、金軍門へ申候ハ、來年

はハ無吳儀商買之通用可在之由申候、此由 内府様

へ申上候、凡御合點之様ニ聞え申候、先は此通爲御

心得申候、

去月七日之御書狀、同廿八日ニ上着、遂被見祝着之至

候、

一從 内府様其許爲御見廻、御使者被差下候、無吳儀被

成下着之由、目出度存候、然者 内府様へ爲御礼、先

々早打を以被申上候、書狀即伊那圖書頭殿迄相届申候、

彼御返事出申候間、差下申候、

一庄内御行之儀、七月者鹿兒嶋御祭礼ニ付而被相留、今

月初より被相催之由尤存候、然者從 上使御暖可被成

之由、庄内へ被仰越候哉、左様ニ候て相濟申候へハ幸

之儀候、兎角御暖之外ハ有間敷存候、若暖之儀も不罷

成及御行、又ハ着陳なと候て長々敷候ハ、諸事何と

可致首尾候之哉、心遣千万ニ候、于今不入申事ニ候へ

共、去春於大坂も我等存分之通具申候は、殊項者肥筑

表も種々風説在之事に候間、乍重言庄内表御行長々敷

候てハ、心遣迄ニ候、ケ様ニ申候ても、何篇可被止事

にもあらず候、能々賢慮肝要ニ存候、

一其元之様、餘心遣ニ存候ニ付而、本田六右衛門尉へも

申付、双方以談合愛宕へ大百味拜進申候、其外立願祈

念之儀、聊非由断候、其方も涯分信心此時候、

一新納至右衛門入道中原坊を以、兩度ニ占之儀具申越候、

定而演説たるべく候、

一今度注進ニ付而、庄内表之儀占仕候、凡最前之様ニ申

候間、不及口能候、乍去其中ニ、今月者從敵方火を付

可申からくり在之由申候間、左様成用心專一候、

一帖佐諸置目等之儀、伊勢平左衛門尉を以申越候、慥ニ

被聞届之由、満足仕候、弥以諸事被仰付候而可預候、

頼存候、

一ハはん船暖之儀、無緩被仰付之由尤存候、

一阿久根へ引申候ろそん商買船ニ乗來候眞壺札明之儀、

弥稱被仰付、彼眞壺之分者早々被差上候而可然候、

一上井神五郎暖之儀被聞届之由、是又祝着申候、何共追

869

而可申通候、恐々謹言、
〔朱カキ〕
慶長四年九月朔日

維新(花押)

又八郎殿

868

『雜抄』

日州眞幸院知行目錄

吉田村之内

高五拾石但三宿九拾六石内

右知行之事、先年爲令立願驗、今度先奉寄進者也、仍

狀如件、

慶長二年九月二日

忠恒(花押)

〔上書有之〕
霧島

〔上包有之〕
眞幸吉田窪田之村御寄進狀

〔家久公御譜中、正文在曾於郡花林寺トアリ〕

〔家久公御譜中〕

〔正文在卷本〕

先度差下候使者參着之由、被入御念被仰越候段、祝着之
至候、伊集院儀、先日寺澤志摩守申遣候間、不能具候、
〔廣高〕

恐々謹言、

〔朱カキ〕
慶長四年九月二日

家康(花押)

薩摩少將殿

〔右ノ正文、舊御番所御文書二番箱中國統新龜鑑中ニアリ〕

870

〔御文庫四拾八番箱義弘公卷中〕〔家久公御譜中ニ在之〕

以上

其元御客來、彼是可爲御用と存知候て、愛宕へ被上置候
つほ式ツ之内ひとつ、本田与左衛門尉・新納孫右衛門尉
罷下候条、持せ進之候間、兩人へ相合候間、不能一二候、

恐々謹言、

〔朱カキ〕
慶長四年九月三日

維新(花押)

少將殿

871

〔御文庫拾七番箱十四卷中〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

已上

去二日ニ康永口々敵少々罷出候処ニ、我等者共敵合仕候
段、早々被及聞召、尊書忝奉存候、次者戦死之者御座候、
左様之儀まで御心付不及申上候、何様近日中御出馬候ハ
んや、其節萬々可申上候、此等之趣可然様御披露所仰候、

恐々謹言、

〔朱力半〕
〔慶長四年〕

九月六日

伊勢兵部少輔殿
（眞色）

中務太輔

忠豊（花押）

872

〔全上〕「家久公御譜中ニ在之」

已上

御書謹而令拜受候、仍庄内之儀、從 上使無事之御調達被仰遣候処ニ、不相調候旨被仰聞、奉得其意候、就其拙者事も山田表へ罷越候、此地之様子、顯娃主水正被見及候之間、具不及申上候、何様委儀者、老名衆可被申上候条、不能細碎候、此等之趣可然様ニ御披露所希候、恐々謹言、

〔朱力半〕
〔慶長四年〕

九月六日

伊勢兵部少輔殿

中務太輔

忠豊（花押）

873

〔御文庫二番箱家久公三卷中〕「家久公御譜中ニ在之」

以上

遠路御使札忝存候、殊ニ近日庄内へ御出勢之由承候ニ付而、我等も可罷出覺悟ニ候之間、時分柄之儀御尋申候処

ニ、今程御延引之由被仰越候条、得其意候、何時成共於御働者、可預御注進候、到來次第無緩可罷出候、猶於様子者、委細御使者へ申達候、恐惶謹言、

九月六日

伊豊後守

祐兵（花押）

羽少將様

御報

874

〔御文庫拾七番箱十四卷中〕「家久公御譜中ニ在之」

已上

御書謹而令頂戴候、殊ニ御樽着種々被送下、忝奉存候、然者昨日打廻候之処ニ、敵餘多被討捕御勝利之段、我々式まで満足仕候、定可爲御満足候、様子者御使者御覽之前ニ候間、巨細不及申上候、此等之趣可然様ニ御披露所希候、恐々謹言、

〔朱力半〕
〔慶長四年〕

九月十一日

伊勢兵部少輔殿

中務太輔

忠豊（花押）

875

『旧記抄』

已上

此表之様子爲可被聞芳墨拜領、細々遂披閱候、仍兩日相働候、輒當毛刃、乍去昨日都之城一里此方迄惣刃差通候之間、敵指出、鉄砲取分稠候而無何事、其後野々谷・高城、志和地右之三ヶ所之者共續合候て、のゞミ谷迄□垂三重取破、敵二三十人討捕候、味方も六七人戰死候、其外無何事候、さてハ頃福嶋迄御越山にて、御一左右御待候哉、定御參陣之時分ハ、從富隈可被仰談候、被任其儀、可目出度候、心事、恐惶謹言、

〔慶長四年〕

九月十一日

新納武藏入道

爲舟判

秋月長州老

尊報

876 『本田氏文書』

其許江永々在京辛勞之儀、不及是非候、乍不申奥方之儀、彌無油断可入精事肝要候、將又庄内之儀、于今無相替儀心遣之段、可被察候、併人數差出相働候間、近日中ニ落居程有間敷候、從是追々可申越候、隨而ハ急度存松可差上候間、相替可爲下向候、謹言、

〔慶四款〕

九月十一日

忠恒御判

本田（正親）六右衛門尉殿

同八月十五日、長千代丸之兵從東霧島到楠牟禮、志和池之内城兵出向放鉄炮、佐藤彌五右衛門尉家信・田中久右衛門尉義利當之死、其外有戰死者、分我兵自丸谷村横襲之、敵不怵而退城内、追之至志和池城羽田口、東霧島住僧豪澄法印策汗馬防戰、藤井十左衛門尉氏順討之、財部與右衛門尉後號・與小岩屋備中互名謁欲合鑓、時被疵鉄炮引退、時重信源兵衛尉家張馳來與備中合鑓、越我兵討敵十三人、同九月十日、作左衛門尉三久從長千代丸兵、欲攻都城備兵大根田、横市之内先使敢死兵山内作右衛門尉助次・坂下兎角介宗豊・兒玉軍八・黒田次助・蓬原甚左衛門尉・久保新八秀定・平川勝左衛門家次放火紫尾田德益、宮丸之内忠貞從都城出兵戰小松个尾、家臣戰死者多之、時敵一騎進來、華房早兵衛尉鉄炮射之、又敵數多競進我兵甚危、會北郷喜左衛門尉久陸率三百騎援來、各無恙去小松个尾、設備於鶴島、安永之内時上井仲五・長壽院・肝屬伴兵衛尉・敷根仲兵衛尉・川田大膳亮向野之三谷城、城兵並梶山・勝岡之兵助來戰于小谷頭、野之三谷之内上井仲五戰死、長千代丸兵見之横擊破之、敵敗亡分散去、高城敵將比志島彦太郎率多勢雖登釋迦堂原、野之三谷之内逢城兵之敗北失利如高城退、

我兵乘勝經撰立寺馬場、攻入野之三谷城搦手口、小杉丹

後守重頼與城主古垣與兵衛尉忠興、互名謁一番合鍵、財

部壽福坊湛賢亦於城戸口、與古垣與兵衛合鍵、或說與東条
休右衛門合

鍵、高松三郎右衛門尉正隆・伊地知諸右衛門尉相續合鍵、

知覽兵太久縁・神田橋又兵衛尉助康・同姓筑後・清水飛

彈・松葉佐孫兵衛尉・平川市右衛門尉・同傳三郎・徳丸

三之丞儀眞・谷口右近・手束休右衛門尉光次戰死、且被

疵者多、此日我兵所獲首級八十餘、北郷源左衛門尉唱凱

歌、須田藤七兵衛尉利基先登得首級、其外得敵首者、伊

地知彌右衛門尉・内藤仲左衛門尉・長井孫兵衛尉・小瀨

主殿・竹下渡兵衛尉・黒木佐左衛門尉・萩原平左衛門尉

・厚地左近兵衛尉・池田與三・友重戸左衛門尉・櫻木志

摩・松个野九郎右衛門尉・黒木後藤・中間二人共十五人

也、忠恒公感之不斜、且達 龍伯公高聽、忠恒公賜

感贖於長千代丸、有正文、左記之、

878

去十日、於野々三谷其方手之衆致合戰得勝利、首數討捕、

注文到來、珎重候、各令粉骨、或討死或被疵由、尤神妙、

感悅無極候、弥可抽軍節候、恐々謹言、

忠恒(花押)

慶長四年九月十三日

北郷長千代殿

879

『雜抄』

(本文書ハ八八二号文書ト同文ニツキ省略ス)

880

〔家久公御譜中〕

〔正文在留主右衛門〕

薩州郡内知行目錄

吉田佐多之浦村之内

高五拾石但三千四百五十二石之内

右知行之事、先年爲令立願驗、今度先奉寄進候、然者

從前々爲當家之祈願人之故、到貴所相付早、十月十五

日大放生會・中節供如舊規、堅於 神前奉備、無怠慢

可被抽精祈者也、

慶長四年九月十四日

忠恒(花押)

留主次郎三郎殿

881

〔御文庫四拾九番箱二卷中〕

猶以山勘兵衛尉殿上洛之儀御急候へ共、庄内無事之

882

〔御文庫拾七番箱十四卷中〕「家久公御譜中ニ在之」

從 忠恒様被成下尊書候、謹而致拜領候、抑今度於野、
三谷致軍勞候通被仰下候、外聞実忝奉存候、到向後茂可
勵勢力事、不可有疎意候、右之旨宜預御披露候、誠惶誠

噉種々申儀有之付而、于今押留申候、爲御心得候、

就伊集院楯籠 御使書被差下、殊隣國衆加勢之儀被仰付
候、誠以外聞実忝次第ニ候、尤早々御人數可申請之処、

私之討討故、到 公儀衆不慮之儀共出來候而ハ如何ハ与

存、此節者先以令用捨候、然者山口勘兵衛尉殿へ致相談、

源二郎下城之儀被仰聞候處、容易領掌仕、和睦可相濟之

刻ニ、何方々之到來候之哉、頓ニ相違仕無事破候、さり

とてハ無念至極ニ候間、可相果心底深重候、併勘兵衛尉

殿今度御噉之筋ニ和平仕儀候者、于今も別儀有ましく存

事候、縱若手之衆無同心候共、可申調内意ニ候、此等之

旨具勘兵衛尉殿へ申達候間、被聞召届候而御取合頼存候、

恐々謹言、

九月十四日

嶋修入

龍伯(花押)

伊那(附)書頭殿

884

〔御文庫四拾八番箱義弘公卷中〕「家久公御譜中ニ在之」

尚以帖佐・山田・蒲生・吉田之人衆出水表へ可被召
移之由、度々御談合申定候キ、然処庄内堺へ御城取
ニ付、右四ヶ所之人數被召移之由相聞候、無心元存
候、當時之地頭ニ内談いたし、移望申儀も可有之候、

恐謹言、

〔朱力キ〕
一慶長四年九月十五日

進上 圖書頭殿
(忠長)

作左衛門尉三久(花押)

883

〔御文庫二番箱家久公九卷中〕「家久公御譜中ニ在之」

以上

去七日之御狀拜見申候、如御書中 内府様其元之様子、

御見廻をも申入候様ニと被成 御意候、御兩使具被仰合

旨承、得其意存候、小躰・立左使者被遣候由、是又尤存

候、立左上洛被仕、於室參會申候、猶兩使可被仰候条、

不能具候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
一慶長四年秋

九月廿日

寺志广

正成(花押)

羽薩广少將様

御報

併庄内事ハ一節の儀ニ候、いつミの儀ハ肥筑表之一の城戸にて候間、彼表之儀手かたく御かくこ候へてハ、貴所御爲ニ罷成ましく候、其御心得專一候、我等事ハ老躰にて候間、後年貴所御手前可然様ニ可被仰付候、はや肥筑表きざし候之由申來候、就夫もいつミ表之儀於不番ハ、庄内口の御行も急ニ難濟候之条、さて申入候、以上、
態令啓達候、

一今度於大坂 内府様天下之御仕置被仰定候ニ付、いかやうの子細候之哉、羽柴肥前守殿當時賀州へ在國候ヲ、無上洛様にと被仰下候、自然強而於上洛者、越前表にて可被相留之由候て、刑少殿の養子大谷大学殿・石治少之内衆一千餘、越前へ被下置候事、

一加藤主事も無上洛様にと被仰付候、其上ニ罷上ニおひてハ、淡路表にて可被相支之由候て、菅平右衛門尉殿・有馬中書兩人ニ被仰付彼表へ被指越候、如斯必定承付候間、爲心持申入候、乍不申諸人不承様に、校量肝心候、其故ハ京都之出合、國元へ申通候と露顯候へは、爰元之仕合も難計候之事、

一出水表之儀心遣候之条、 竜伯様江被遂御熟談、彼境

之番尔ニ可被仰付事、頼入候之事、

一加主事ハ連々氣任之仁候之間、無思慮弓箭をも被取出儀も可有之候之欵、左様なる時、出水表於不番ニ者、油断ニ可罷成候、殊佐敷表之儀も、小攝・相良など被乗取躰ニ候てハ、後年御爲如何敷候、又加主方ハ手色不見処ニ、從御方角佐敷表へ楚忽なる儀をも仕出候へは、一揆の手初に可罷成候間、いかにも丈夫なる仁を被召置、其仁忝人迄ニ内證被仰聞、油断をも不仕、又楚忽なる儀をも不申出様ニ能々被仰付、彼表之様子被聞届、賢慮頼入候事、

一庄内表之儀いまた於無落去ハ、右之出合承付候ハ、弥下城之御佗も手六ヶ敷可申欵と存候、從有方の内證ハ、先此節ハ下城仕候様ニ被仰調候ハ、後日ハいかやうにも御喫可有之と被思食候間、時分からと申、分別可入由被仰候、定而加主方ハ庄内へ山くゞりをも被指越、様子可被申談と推量申候、能々才覚此時候、

恐々謹言、

〔朱力半〕

〔慶長四年〕九月廿一日

維新〔花押〕

少將殿

「全上」家久公御譜中ニ在之

猶々奥よりの御文相そへ下し申候、爲御心得候、以上、

急度用使札候、

一上方一段御無事ニ候、内府様御懇切之儀不相替、種々被添尊慮候事、

一今度於大坂六ヶ敷儀共出来候つれ共、當分者吳儀無之候事、

一内府様御事者、在大坂なされ候へき由相定候、左様之始末共、在伏見之諸侍衆ニ可被仰出候由きこえ候へ共、

一また不承候、承候者追々様子可申下候事、
一庄内之儀何程に相究候哉、去月十八日之到来以後者、
とかく共御左右不承、無心元存計候、内府様も被聞食度之旨、切々被成 御意候事、

一宰相煩之儀以之外ニ候つれ共、中性院を始其外山伏來祈念、藥以下種々加養性候て、此比者少得快驗躰ニ候、於今分者、急度可致快氣と存候条、御氣遣有間敷候、兼又帖佐留守之儀、諸事心遣千萬ニ候、不及申候へ共、亦被添御心、可然候様被仰付候て可給候間、此使口上ニ相含候間、可被聞食候、恐々謹言、

「朱力半」
「慶長四年」九月廿一日 維新(花押)

少將殿

「御文庫四拾八番箱義弘公卷中」家久公御譜中ニ在之

態令啓候、今程上方替儀も無之候、仍御用所之儀候条、相良甚兵衛尉指下候、於様子者、口上ニ相含候間、可被

聞食候、恐々謹言、

「朱力半」
「慶長四年」九月廿二日

少將殿

維新(花押)

「全上」家久公御譜中ニ在之

以上

遮而令啓候、仍其元々急用之儀可在之時者、高橋右近殿へ令入魂、中川修理殿、大田飛彈殿之間まで送付候て、それが熊谷内藏允殿・垣泉州御間へ參候者、京都へ早速可被指上之由、此方にて令熟談答を取候間、不及斟酌、如此可有通用儀尤候、細嶋舟にて罷上候も、はやく可爲上着之由候、其上ほそ嶋のなだつたへ、一段あやうき儀にて候間、右之分に申談候、爲御心得候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
「慶長四年」九月廿二日

維新(花押)

少將殿

888 「御文庫二番箱家久公九卷中」家久公御譜中ニ在之

到柳川侍從御使被下候、先度如申上候、風説共御座候ニ付而、不圖上洛仕候、御使御口上之趣、拙者具承知仕候、其元爲御見舞寺澤志・廣守・小西攝津守無人にて罷下、其元様子見及、其上を以近方之衆江申觸、出陣可仕之由内府様被仰出候、左近事茂右兩人同前ニ可罷下之由被仰出候へ共、伏見江罷居候間、無其儀候、拙者事可罷下由存候へ共、寺志先參候て、其地様子見及次第一左右可申候間、爰元近方之衆申談支度仕様可申由候条、遂其節候、御一左右奉待候、於様子者御使江申入候間、可有御披露候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
「慶長四年」
九月廿二日

高橋主膳正
重種(花押)

羽少將様

人々御中

889 「御文庫二番箱義久公二卷中」義久公御譜中在正文トアリ

猶以爰元仕置等、御心安可被思召候、以上、

一書啓上仕候、仍而 内府十七日ニ大坂江被罷下、重陽

之御祝儀被申上、其上於爰元 秀頼様御爲惡事申ニ付て、

大藏卿局・大野修理退出被申候、菟角伏見ハ手遠ニ御座

候之条、大坂ニ居住被申、諸事仕置等可被申付分候、萬

端相良甚兵衛尉方口上申含候間、不顯紙面候、其元庄内

之儀如何無御心元之由被申候間、節々御注進候而御尤存

候、猶期後音之時候条、令省略候、恐惶謹言、

〔御譜ノ朱カキ〕
「慶長四年」
九月廿三日

伊那圖書頭
令成(花押)

龍伯様

羽少將様
人々御中

〔上書〕
龍伯様

羽少將様

參人々御中

伊那圖書頭

〔ウラニ〕
大坂へ

890 「御文庫二番箱家久公九卷中」家久公御譜中ニ在之

尚以我等儀ハ最前々下國仕、寺志此間下着之儀候条、

公儀いかゞ被仰含候哉、寺志ニ未あひ不申候間、様

子承、其上にて可得貴意候、猶御兩使へ申入候、以

上、

去七日之御札、今日廿四日到来、致拜見候、并御兩使へ口上之通得其意申、寺志近日此表迄可相越之由候間、寺志次第ニ可仕覚悟ニ候、此間之御使僧、自是昨日から津へ送申候、定而近日可被罷歸之条、其節尚又可得貴意候、恐惶謹言、

〔朱力半〕
〔慶長四年〕

九月廿四日

小攝津

行長(花押)

羽少將様

御報

『雜抄』

『庄内江御出馬之刻仰出ト云』

掟

一於軍場下知衆兼日定置候、又其時々の下知衆可有之候条、相背下知、いかやうの高名手柄を仕候共、一向不付手、曲事之曖甚深可申付候、若右之旨違背之仁於有之ハ、下知衆前より可遂言上候、令用捨、不致披露候ハ、縦雖經數日候、到下知衆可有其科事、
一弓鉄炮射とをしの事、付分捕ハゆミ鉄炮可付事、
一喧嘩口論之儀、連々の法度候間不新、別而今度働之間

在所可打立時より存定、縦及恥辱儀雖有之、不遂其意趣、追而可致言上候、於然者依理非可有其沙汰候、若相背此旨、當座ニ相果候者、左右方共ニ可處嚴科事、
一於軍中、一身之高名を差置、可勝行を專ニ可存事、
一あひ言葉・あひしるし可爲如舊例、付御方討能く可相糺事、

一從在所へらまき可致着用事、

一蓑笠持、小荷駄、其外夫丸等、軍衆ニ不可交事、付へんたう以下ことくしく持せ間敷事、

一所好くの衆いひくミ不隨下知、我假之振舞仕者於有之者、聞とをり次第深く敷可申付事、

一於戰場未練之輩者、立合たる衆互糺置、可遂披露候、令糺明證據於分明者、可有其曖事、

一從軍場人衆可打入時者、可爲練除之間、縦他之備ニ雖有敵合、相定たる備さしはせ、軍場をミたましき事、
右条々、各へ申聞、不可有緩候、應働之趣、其時之下知衆可相定候、何たる雖爲仁、下知衆之可申儀を於相背輩ハ、可處嚴科候条、若氣任之仁於有之ハ、下知衆ハ圖書頭・平田（繪悉）太郎左衛門尉迄可申理候、若兩人於手前用捨候て、於無披露者、到圖書頭・太郎左衛門尉可

有其沙汰者也、

慶長四年九月廿四日

右庄内へ御弓箭之刻 仰出

〔此御案文、御文庫三番箱四卷中ニ在リ、糺合ス〕

〔家久公御譜中ニモ有之〕

〔御文庫二番箱義久公二卷中〕「義久公御譜中在正文トアリ」

猶以様々御懇之儀共過當至極、書中ニ難申謝奉存候、
猶京都都可得御意候、以上、

今度者永々逗留仕、様々御懇之儀忝次第共、紙面難申立
奉存候、然者今夜大窪ニ滞留仕、早天罷立申候、天氣能
御座候而罷通候間、御心安可被思召候、將亦休心御上洛
之御事候間、伏見にて尚以得御意、内府へ様子可申聞
候条、是又御心安可被思召候、猶相良吉右へ申入候条、
可被申上候、恐惶謹言、

〔御譜朱カキ〕
〔慶長四年〕九月廿五日 直友(花押)

〔上書〕
竜龍様
人々御中
山口勘兵衛
直友

〔家久公御譜中〕

山口勘兵衛尉殿爲成和親、已往庄内勸降參、而不可、勘
兵衛殿空手歸富隈來、九月廿四日、赴歸京矣、稅所越前
入道・竹内織部佑從焉、

〔御文庫二番箱家久公九卷中〕「家久公御譜中ニ在之」

尚以種々御懇切之段、忝次第共ニ候、猶京都都可得
御意候、以上、

今度者長々逗留仕候處ニ、様々御懇之儀共、殊昨日者路
次迄被成御座候事、過當至極奉存候、今夜者大窪ニ逗留
仕候、今朝天氣能御座候而罷立候条、御心安可思召候、
將又御兩使御上洛之事候間、於伏見弥申談、御意之通
内府へ可申聞候、是又御心安可被思召候、猶相良吉右へ
申入候条、可被申上候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長四年〕九月廿五日 直友(花押)

少將様
人々御中
山口勘兵衛
直友

「御文庫二番箱家久公九卷中」家久公御譜中ニ在之

尚以御使者から津へ御越候ニ、我等も飛脚相添、寺志返事を承候、必來二日ニ出船可申候由、被申越候、以上、

追々貴札致拜見候、先書ニも如申入、拙者其許へ致伺候儀、寺志次第にて御座候間、不任所存候、來二日ニから津を罷立、此地へ可相越之旨被申越候条、内府様御内存之通寺志被申様承、拙者致參上ニも不及候者、任意參間敷候、菟角寺志致參會様子承、自是も可得貴意候、猶御使僧可被仰達之条、不具候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長四年〕
九月廿七日 小攝 行長(花押)

羽少將様
御報

「御文庫四拾八番箱義弘公卷中」家久公御譜中ニ在之

猶々宰相煩之事、先書ニ申候やうニ、六月十日より一圓ニ不食ニ候て、煩散々式に候、乍去此三日以前少得驗申候、於今分者可爲快氣と存候、御心遣有ましく候、就夫態早打被差上候、宰相別而満足之由候、將亦かミさま此比御煩氣にて候、是も起覚在之

「御文庫二番箱家久公九卷中」家久公御譜中ニ在之

御煩にて候、本覺坊へ被仰付、げんしやなとさせられ候、定而可被成快氣と存事候、可御心安候、替儀候者自是可申通候、

追而示預候通具承届候、然者ろそんへ船を被渡ニ付而、寺澤殿へ墨付を取候て可進之由候、雖然我等もろそんへ舟を渡申度由、於爰元寺澤殿へ度々申理候へ共、當年者從寺澤殿 内府様へ被得 御意、使者船を被差渡候間、惣別從余方ろそんへ船を渡候儀者、被成停止之由被仰事ニ候、御法度之儀候条、不及是非候、然間我等船もかう地へ可渡之由申候、貴所在京之爲与言、彼是以肝要之儀ニ候へ共、右ニ申候様ニ、御法度之儀候間、先余方へ被渡候而可然存候、なを追々可申通候、恐々謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長四年秋〕九月廿八日 維新(花押)
又八郎殿

態以書狀申入候、先度者爲御見舞以使者申入候間、定參着可申候、其後御左右承不申候、其元様子無御心元存候事、

一昨日從上方申越候、内府様羽肥前殿へ御間之儀少被

仰分御座候て、雜説雖御座候、先々無相替儀之由候、

乍去近日中村式部少將・堀尾帯生將(マツ)かたを以、羽肥前

殿へ御使を被立由候、か様之儀候て如何成行可申哉と
存候間、爲御心得懇申入候、定從兵庫殿可被仰遣候へ

とも、海上不自由時分候間、自然をそく候へんかと存
申入候、御仕置等之御心得にも可罷成かと存候て申入

候、亦無御由断可被仰付候、慥成儀ハ無之候、風聞ニ

ハ右之衆羽肥前殿へ御使ニ被遣候上ニて、いかゞ可成
行哉と申候間、其御心得候て萬御心遣尤候、

一豊前之儀彦山之座主職之儀付、黒田甲斐守・毛利尙岐
守申分出來候、是又いかゞ成行可申哉と存候、もうは

や互ニいろたち候て在之由候、乍去于今人數なと出候
とハ不相聞候、是も爲御心得申入候間、此書狀をちち

り不申候様ニ可被成候、不申及候へ共、庄内之儀何と
そ被成御才覚、相究候様ニ御分別肝要候、猶々其元様

子無御心元存候、御返事委待入候、將亦 内府様・兵
庫殿別而御入魂之由候間、是又可御心安候、

一上方之雜説付、我等も可罷上と存候処、彦山之儀當國
と境目候間、か様之儀付而、罷上候儀も無用と從上方

も申越候間、不罷上候間、何ニても御用之儀可被仰越

候、猶追々可申入候、恐惶謹言、

「朱力キ」
「慶長四年」
九月廿八日 太田飛騨守 一吉(花押)

薩广少將様
人々御中

898

「御文庫二番箱義弘公卷中」「家久公御譜中ニ在之」

八月廿九日之芳札慥令披見、珍重候、仍山口勤兵衛尉

殿使も無何事上着候、然者財部傳内を以被仰上候 御
意趣、くわしく承届候、

一庄内之儀無事之調法相果候て、弓箭一方ニ儀定候由、
尤ニ候、就夫 内府様御意分又々被仰下候之間、能様

ニ御校量此時候事、
一知行之多少ニ付、無事之儀不相濟候ても、始末いかゞ
可相調候哉、たとひすぎ分におほされ候とも、先々知

行被遣候て成共、和睦可然かと存候、其故ハ來春ハ大
坂御普請たるへき由下々申候、其上肥後表之儀も種々

出入有之事に候、書中にてハ具ニ難申候、自然隣國ニ
御手間共可入刻、庄内ニ御とり相候て、人數をも無御

馳走候へ、公儀も相闕、御外聞も不可然候、左様成
刻、一稜被抽御奉公候へ、向後御爲も可然候へんと、

爰元へ罷居候ものとも申候、菟角庄内之儀時分からに

て候間、一着候様ニ有度念望候、老のね覚ニかやうな

る儀存寄候まゝ、令啓入候、源二郎事先下城仕候ハ、

次第ニ御喫の御談合も可有之由、伊圖書殿も内證被仰

事候、旁賢慮不可有油断候之事、

一今度山口勘兵殿庄内之儀条々被申上候ニ付、内府様

殊外被成 御腹立、幸侃妻子ニ被仰聞候様子ハ、勘兵

殿被仰候筋目のことく、源二郎早々下城仕候様被申候

へ、もし承引不申候ハ、可被打果 御内證にて、増

田右衛門尉殿へ被仰出候之間、即増右くらまへ被仰候

へは、源二郎母承候て、下城之儀可申執と申候て、野

邊五郎右衛門指下候、其地へ可參候間、くハしく可被

聞食候事、

一爰元雜説之儀、先書ニ雖申下候、いよ／＼無事ニ候、

可御心安候、自然替儀候ハ、追々可申入候之事、

一内府様御事しかと在大坂に相定申候、就夫 北政所様

京都のことく一昨日 御移にて候、其御跡二の丸ニ

内府様ハ被成 御移候、御存知のため申候事、

右条々、被見届候て、万端能様ニ御談合有へく候、恐

く謹言、

〔朱カ〕
「慶長四年」九月廿八日

少將殿

維新(花押)

899 「家久公御譜中」

慶長四年九月廿九日、往莊内在陣于山田城、而所以諸所

之爲指揮也、

900 「御文庫四拾八番箱義弘公卷中」家久公御譜中ニ在之

財部典内今月廿三日伏見へ上着、國元之様躰具承候、

一内府様を給候刀物ききれにて候哉、一廉と被思食候て給

候物者、左様に可在之と存候、誠大切之至候、此方へ

可被上欵之由承候へ共、先其方へ被食置、さゝせられ

候て肝要存候事、

一我等借用申候景光ハ、たのもしく存候て、しかと側ニ

食置候事、

一帖佐へ立置候頼娃のくくり毛・友賢栗毛二疋被食寄、

就中頼娃野者犬の下地ニもなるへき様ニ候哉、珍重存

候、友賢くり毛も一段無事ニ心よく候間、出陳などに

は嘉例よき馬と申、旁可然存候、いづれも如此無隔心

被食寄之段、令満足候事、

一かうらい茶碗此方へ上せられ可給之由、近比御念比之至、悦存候事、

一毛利勘兵衛事、我等ニ見參も無之、惣別無案内之人にて候、然処其方へ下向以後、増田右衛門尉殿にての物沙汰を旅庵承候として申候、一段可然人にて候由候、收納方なども物よく可申付人ときこえ候、又余人も右之様ニ被申候を承候間、有之佩先札にて申下候き、能人者大切ニ候へ共、其元知行などの見合難成段者不及是非候、さやうの始末者、勿論貴所分別次第候事、

一山本仲三郎方堪忍難成之由承届候、彼人者從 御家門様一兩年と候て、御誂之人にて候、定可爲歸京候条、其間之儀見續候へと、度々申下候、今度も伊勢平左へ申付候事、

一上床吉右衛門儀、くせ事深重に候、如此之者者其科をも申付候へて不叶儀に候処、遂戦死候段、よき仕合と存候事、

一いつミ表へ番衆被仰付之由、肝要存候、如此被入念被仰付候て給候段、誠本望此事候、就中いつミ表之百姓共足うき候ニ付て、大田吉兵衛へ白坂与竹へも、諸事あるへきやうニ申付候へと被仰聞之由、尤存候、當所

務收納之儀者、寺澤志广守殿近年被仰付候ことく、可致收納之旨申きかせ候間、定可爲其分と存候、自然大

田吉兵衛尉・白坂与竹私曲之儀も於在之者、くせ事之段被仰付、萬々可然之様ニ被添御心候て可給候、遠方之儀候条、何を存候ても不届候、いよ／＼たのミ存候、

恐々謹言、

〔朱カキ〕
慶長四年九月廿九日

維新(花押)

少將殿

901

〔家久公御譜中〕

〔正文在島津安藝守久雄〕

八月廿九日之芳札昨日相達、披閱本望至極候、抑其表之様躰具承候、誠欣然之至候、然者伊集院源次郎事、從内府被任御使之旨、下城之儀御同心候由、尤环重候、但其後又違變之趣候哉、何篇頼可属御本意候間、期後喜計候、將又當月祈念之卷數・守進之候、於丹誠者、聊以不存由断候、六賢々々、

〔朱カキ〕
慶長四年九月廿九日

〔附書院如也〕
(花押)

羽柴少將殿

〔上包〕
羽柴少將殿

如雪

902 〔義久公御譜中〕

慶長四年九月廿九日、少將忠恒主人莊内山田城、而在陣也、是已下委曲記忠恒譜中、故略于此矣、

903 〔案文帳ニ有之〕

以外申候間、不依実否御一人者被成在國候へてへと存事ニ候、能く被遂御談合尤候、於様子へ委少將前より可申入之条、愚老不能細筆候、爲御存知候、恐く、

〔朱力キ〕
〔慶長四年〕九月卅日

寺澤志广守殿

904 内大臣家康卿使山口勘兵衛尉直友、遠下當地致和諧之媒、

然而源次郎偽言有餘信情不足、是以和睦未成、告其故於

家康卿、卿賜返書、記左、

905 〔在正文〕

御折紙披見申候、仍源二郎噉之儀表裏之由、曲言候、委

細從兵庫頭殿可被仰候之間、令省略候、恐く謹言、

〔慶長四年〕
九月晦日 家康〔花押〕

薩摩少將殿

906 〔御文庫二番箱家久公九卷中〕「家久公御譜中ニ在之」

〔右御折紙云々、正文旧御番所御文書二番箱中國統新龜鑑中ニ在リ〕

九月朔日御狀參着、具拜見申候、則 内府様へ御披見ニ

入候処ニ、其程迄相澄候事を違篇仕候儀、沙汰限之仕合

之由被 仰、伊集院儀菟角可被成御成敗ニ相究候キ、然

共鞍馬居候兄弟母共方へ、右衛門尉殿を以理り被仰遣候

處ニ、無吳儀貴所御噉之手筋を以、宮古城相渡無事可仕

由、右從兄弟衆野邊五郎右衛門尉を指下申候、定而吳儀

有間敷与推量申候、能様ニ被成御才覚、尤ニ存候、頓而

彼使、同從兵庫頭殿之御使者參候間、何事も期其節候間、

先如此候、將亦竜伯御父子へも以書狀を可申上候へ共、

右使ニ可申上候間、無其儀候、此等之趣御心得被成可被

下候、恐く、

〔朱力キ〕
〔慶長四年〕九月晦日

伊那圖書頭

猶以先書如申入候、内府様大坂西丸へ被成御移候、

諸事御仕置等被 仰付候条、可御心易候、寺澤志广

守殿其許御下被成候間、御談合候て尤^ニ候、以書狀
を可申候へ共、急候間無其儀候、御直談候者、御意
得候て可給候、以上、

(表紙)

義久公
義弘公
家久公
慶長四年 自十月
至十二月

後編
舊記雜錄
卷四十七

907 「義久公御譜中」

伊集院源次郎懷偽心眞實寡矣、由是山口勘兵衛尉直友不
得和諧之爲媒、所以歸京也、丁此時使稅所越前入道休心
・市來織部佑家政爲海陸之警衛、且復遠所下直友之謝禮
詞者也、

908 「案文帳之寫」

度々預使書御懇之至無申計候、然者 内府様大坂へ被成
御下、御法度被仰出ニ付、上方雜説共申候つる哉、雖然
頓而靜謐之通、御注進畏入存候、仍庄内表之事、上使雖

909 「案文帳之寫」

御暖候、不事濟候条、急度可催行分別ニ候、就其貴所事
も可有出陳之由、少將事も昨日如山田表致出馬候間、彼
方へ被仰越候ハ、御返詞可申入候条、隨其旨、御校量
尤ニ存候、恐々、

高橋右近殿

昨日被成打立候処、天氣好候て目出候、然者被召列候衆、
無人之由承候、惣別人衆之儀者如山田表罷立候様にと下
知候故、此方へ參着候者、致御供候衆無之事覚悟之前ニ
候、勿論さきニ而へ在陳之衆可致御供事不及申候、將又
明日御陳取無矣儀調候ハ、中途迄成とも早打を被差越、
明後日三日ニ者當地へ到來候やうに、御分別頼入候、又
江戸中納言殿より御使者、此ころ下着可有之由聞え候つ
るが、未無其儀候、自然如其表來儀候ハ、是又早々注
進待入候、猶期後喜候、恐々、

「朱力半」
「慶長四年」十月一日
「家久」
又八郎殿

上使山口直友所勸降參於伊集院源次郎、已諾而又變之、直友不合心而赴上都、先已被達其故於京都、内府公勲然不悅、使増田右衛門尉長盛源次郎第三輩及母達迄死罪、各聞此言震懼、如直友言速下居城保身命全親族、馳一价於領土、依之長盛寄一輪於我、記左方、

追而小袖五進入候、誠御音信之驗迄候、以上、其表爲御見廻態令啓候、尤早之可申入候處、爰元何角不得隙延引、所存之外候、就其源次郎方手前事、内府公御使者吳見被申、既領掌之由候處、相滯儀無是非候、然、此方兄弟衆・幸侃足弱可被及迷惑間、何様ニも内府公御使如口入、可被相濟由被申越候、只今迄相滯候儀、定而御存分可在之候へ共、此節源二郎下城候者、御赦免尤存候、猶使者可得貴意候、恐惶謹言、

〔朱力書上〕
一慶長四年上

十月朔日

増石

長盛(花押)

羽柴薩(家久)少將殿

人、御中

追而是式候へ共、御持筒拾挺進候、聊御音信之驗迄ニ候、已上、態企使札候、其後者遙久得御意儀も無御座、無沙汰背本意存候、併近年病中故、何方へも無音之条、非疎意候、

一秀頼様日之御成人、御息災之御事、諸人大慶不過之候、於様子者可御心安候事、

一内府様大坂然と被成御在城、爰元御仕置被仰付儀ニ候、因茲弥上方静謐之儀候間、御氣遣被成間敷候事、

一其表相替儀も無御座候哉、伊集院源二郎事、于今不致還任楯籠在之由、不及是非御事ニ候、内府様御内存も、何様ニも貴所様如御存分被仰付候様ニ、可被成御

沙汰之旨候間、是又可御心安候、則御使者被付置之由候条、萬事被成御相談、可被属御存分事尤ニ存候、

一武庫前篇之被懸御目ニ付て、於爰元萬事得御意候儀、自然此方相應之御用之儀も御座候者、無御隔心可被仰

越候、不可存疎意候事、

一上方之様牀、定而武庫之懸可被仰越候、別条雖無御座候、永々御在國之処、餘久敷無沙汰之条、爲御見廻如

此候、猶追々可得御意候間、不能巨細候、恐惶謹言、
〔朱力キ〕
〔慶長四年〕十月二日 吉繼(墨印)

嶋又八郎様
人々御中

嶋津又八郎様

まいる人々御中

吉繼

大谷刑部少入

〔義久公御譜中〕
〔案文帳之寫〕

節々預使書、懇切之段畏入候、仍庄内之儀、當分無新子
細候、併先月晦日少將如山田表致出馬候、定而一途可申
付かと存候、將又江戸中納言殿御使者、頃者可來着之
由致風聞候、未無其儀候、彼是使者可爲演說候条、不及
書載候、恐々、

〔朱力キ〕
〔慶長四年〕十月三日

秋月殿

〔義久公御譜中〕

〔案文帳之寫〕

態令啓候、

一 一昨日御陳被召乗候由、千秋万勢目出存候事、

一 此境よりも其表からミとして、たからへ口へ人衆少々

指出候処、不慮ニ芳戦共候而、各粉骨候、併此方之人

衆到而無越度候条、先以神妙ニ存候事、

一 來七日ニ伏見へ早打可差上覚悟候、御用之儀共候者、

書狀を被認可被指越事、可爲肝要候事、

一 江戸中納言殿御使者未下着候、自然如其表被相越候へ

、御注進待可申候事、

一 志和知口へ近陳被相付候へ、水之手不通ニ候はんや、

承度候事、猶追々可申候、恐々、

〔朱力キ〕
〔慶長四年〕十月四日

又八郎殿

〔北郷忠能譜中〕

同年十月五日、太守忠恒公移陣于森田、野之三、諸將挾

於志和池城構陣、長千代丸亦陣于茶園之尾、志和池

和池城與諸陣間互放鉄炮、之内、時志

同月、被舉勢棲於志和池城西柵之邊、

同月十六日、高城兵到高木村之川齧、向森田御陣放鐵炮、

御陣之勢並長千代丸之兵追之合戰于高木、敵逃走退高城、時敵兵二人相返戰、北郷家臣高橋武藏與白坂式部同討一人、同家臣財部武藏斬一人、味方勢追到高城大樂、時起所置安和井个塚伏兵急攻撃、中原中將坊戰死、其外死者多、此時北郷家臣友重十郎右衛門尉討足輕將、

同十一月八日、從志和池城薪樵者出、長千代丸之兵伏柳川原口討之、城兵發出戰、我兵小杉太郎左衛門尉賴氏・有田神祇光規・宇都宮加兵衛尉戰死、且有分捕者、時平民部左衛門尉來加、與小川伴助合鏖、

同十八日、長千代丸之兵伏荒瀬、水流、名内、自高城敵發出戰、我兵乘勝追入敵於城、時家臣大久保善右衛門尉秀次組伏有村三郎兵衛尉後爲北郷家臣、號平山乘賀、欲搔首處、有村郎從馳來討善右衛門尉、

「家久公御譜中」
「正文在卷本」
御書之写

從薩摩上下之者、嶋津殿被申次第、無吳儀可被送通候、猶期後音候、恐々謹言、

九月廿四日
家康

中川修理大夫殿
(秀成)
太田飛驒守殿
(一吉)

右之通ニ候間、爲御心得写進之候、此兩人所へ御使被參候由候、其も私方へおくり可被申候間、はや船を以可差上所存ニ候、以上、
(朱力キ)
慶長四年か十月四日
熊谷内藏允(花押)
(直盛)

羽少將様
人々御中

917 「御文庫二番箱家久公九卷中」「家久公御譜中」
以上

去廿九日細嶋罷着候、乍去順風無御座候而、今日四日迄細嶋在之事候、一兩日中出船無御座候者、陸地を成共可罷上覚悟ニ御座候、將亦京都も御左右御座候間、上方之様子慥ニ可聞召と存事候、弥 内府大坂之仕置をも被申付之由候之間、貴殿様も御満足、乍恐奉察存候、尚上方も重而可得御意候、恐惶謹言、

山口勘兵衛尉
直友(花押)
十月四日
(朱力キ)
慶長四年

少將様
人々御中

「御文庫二番箱家久公三卷中」家久公御譜中ニ在之

私事去月廿六日大坂迄罷出候而、當月朔日下着仕候、
京都一段静御座候、已上、

先日者爲御返事責書拜見忝候、伊集院源十郎事、爲可被
加御成敗御出馬之催、得其意尤至極令存候、然ハ小西攝
津守・寺澤志广守・羽左近、庄内江可被相動旨候、私以
下も可罷立所存候、將又京都江御注進飛脚、私与垣見和
泉兩人かたへ參候へと於被仰付者、早舟を以伏見江送可
届候、若御斟酌かなざれ候てハ專なき事と存、兵庫殿御
狀被進候、從薩州注進者送迎いたされ候へと、中川修理
・大田飛彈至兩人、内府公御書被遣候間、其御心得有へ
く候、兵庫殿御氣遣候間、此使者具被仰聞、早返し可被
下候、則兵庫殿可進上ためニ候、御吉左右奉待候、恐惶
謹言、

「朱力キ」
「慶長四年」十月四日

直盛(花押)

熊谷内藏允

羽少將様

人々御中

直盛

「家久公御譜中」

志和池城邊有稱森田要地、十月二日、進築陣營、彼城西
北漸築衆陣無寸土之有間隙、東南亦塞通路絶粮道、僅盛
粮米於糧箱、待暗夜任川流、然而悉以不得通達、宛如籠
鳥、

「御文庫四拾八番箱義久公三卷中」家久公御譜中ニ在之

態令啓候、

一去二日御陳被召乘候由預注進候、千勝万勢目出令存候
事、

一從此表も、一昨日其元之からミとして寶部口へ人衆少
々差出候之處、不慮之芳戰共御座候而、各致粉骨候、

併此方之人衆到而無越度候間、神妙ニ存候事、
一其界近陳被相付候者、水之手不通ニ候ハん哉、様子委
承度候事、

一來七日ニ、伏見へ早打可指上覚悟候、御用之儀於有之
者、書狀を被認、早々可被差越事可爲肝要候事、

一江戸中納言殿御使者、此元へハ未無下着候、自然如其
表被相越候者、御左右待入候事、猶万々期後喜之節候、

恐々謹言、

〔朱カキ〕
「慶長四年」十月四日

龍伯(花押)

又八郎殿

921 「義久公御譜中」

〔正文有之〕

貴札令披見候、仍 内府様到大坂御置目等被仰出候哉、就夫遮而被仰知候事、御懇切難申謝候、定而從兵庫入道茂可申下候へ共、未相聞候、兼又先日者預御使節、令祝着候、尤此等之御礼、早速可申入之處、手前取紛延引、背本意候、次者庄内表之儀ニ付、内府様之御使下國候て、雖被成噉候、源二郎致違變候之故、無事之儀相破、彼御使上洛にて候、就其ニ行ヲもよすへき覺語ニ候、自然上方出合之刻者、能ニ御取成所希候、猶期後喜候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
「慶長四年」

拾月四日

嶋修入

〔毛利輝元〕
安藝中納言殿

參御報

922 「御文庫四拾八番箱義久卷中」
「義久公御譜中正文有之トアリ」

從輝元預貴札并御傳書、具令披見候、當者 内府様大坂

へ被成御下着、御置目等被仰出候哉、就夫様子段々御注進、細碎遂披覽候、御懇意無申計候、弥珍事共於在之者、可被仰知事大望ニ候、次者源二郎進退之儀ニ付、内府様御使被成下國、吳見候つれ共、若輩故不致承引、彼御使上洛候心遣ニ候、然者志和知・野ノ見谷と申城へ押寄、致着陳候之間、急度可得勝利候、猶重而可申入候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
「慶長四年」

拾月四日

嶋修入

〔御名モナン〕

安國寺

御返報

923 「御文庫四拾八番箱義久卷中」
「家久公御譜中ニ在之」

猶々此堺無何事候、ちか陳とられ候て、敵之城内い、かやうに候らん、承度候、

其堺着陣ニ付、志和知之事程あるまじきやうニ申候、さやうニ候ハ、定可免甲欵と存候、さ候とて、此方へ一人もめしをかれましく候、ミナノミヤこの城ノことく追やられ候て可然候する、不及申ニ儀ニ候へ共、爲御分別之候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
「慶長四年」十月六日

龍伯〔御判ナシ〕

又八郎殿

『嶋津氏文書』

猶々庄内之様子委可申候へ、彼飛脚急ニ申付候間、先々大方ニ候、追々可申候、將亦内府様大坂江御下なされ、國家之置目等被仰付候通、從毛利殿注進候、いかやうの始末ニ候や、承度候、又山口勘兵衛殿へ書狀御届候て可給候、已上、

急度令啓候、仍内府様之御使者無何事被成上國、満足之至ニ候、早々着船候哉、承度存候、

一庄内表之儀、上使雖御變候、源次郎和平之始末依致違變破候間、去二日しわち境江着陣候て、少將如彼表被差越候、我々事ハ此元堺目多々依有之、しかと罷居候、爲御心得候事、

一右陣取之からミとして、財部口へ人衆少々從爰元指出候処、敵催行ニ付、猛芳戰候而各致粉骨、敵四五人討捕候、手負なとも多々有之由候、此方ニハ平田三五郎朝ハ分捕仕、其後遂戰死候、并宮内式部左衛門同前ニ候、吉田大藏事ハ手負ニ而越度申候、謔稱軍ニて候つれ共、右之外人衆無何事候間、玆重ニ存候事、

一寺澤殿下着候事、今月十日比たるへき由聞え候間、相待候、爲御存候事、

一江戸中納言殿御使下向之由雖到來候、未無其儀候、定而可爲近日と存候事、

一宰相殿不例之由聞候、無御心元存候、無油斷療治專一ニ候、猶追々可申候、恐々、

〔朱カキ〕
慶長四年十月六日
〔御名ナン〕

兵庫入道殿

〔義久公御譜中、案文帳之写トアリ〕

一龍伯様が、惟新公江御狀之内

財部口合戰甚手きひしく儀ニ而、平田三五郎朝ハ分捕、夕方戰死をとけ候、吉田大藏蒙深手落度申候、其外何事もなく候、玆重存候、

右日付ハ慶長四年十月六日と有之由、全文無之、略写之□也、

〔義久公御譜中〕

〔案文帳之寫〕

追而申候、

一肥後如通道之事、頃ハ一圓無之候、取分當國之者、加藤殿領内を通候事不罷成候、於其地急用之儀候共、自陸路早打なと進候ハん事難成候、漸豊後表より海上を社可參候条、毎々遅進候する事咲止迄候、上方之以御下知、輒往反候へんと存候、爲御存知申候、

一幸侃妻子其方へ令堪忍、種々依致方便、庄内事も行末を頼、當分さしこへる由聞候、於其元能々被入御念を内府様御前可然之様、才覚肝要ニ存候事、

一從京都當國爲見廻可致下向衆御座候共、此節へ先々かたく可被指留候、此元不如意之砌にて候之間、御用捨頼入候、猶重疊可申越候、恐々、

〔朱カキ〕
一慶長四年十月六日

羽兵庫入道殿

927
〔義久公御譜中〕
〔案文帳之寫〕

此中被成下向、御辛勞之段難尺紙上候、殊庄内和平之調儀、色々雖御入魂候、不致成就候事貽多候、とかく今躰ニ而者難閑候条、しハち・のゝみ谷兩城之近邊陳を取出候、彼表之様子、尤今度委可申候へ共、依急便不能書載

候、猶追々可申候、内府様御前之儀、弥可然候様御取合頼入候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
一正文ニ當書日付無之

〔朱カキ〕
一慶長四年十月

928
〔御文庫四拾九番箱四卷中〕

毎度之御使書恐悅無極候、然者森田陣所之儀、一段無事ニ取固候間、可御心安候、從今日者北郷作左衛門尉陣取にて御座候、しハちの儀も從今明日しより可申付候間、近日可相極候模様、細々今日村田雅樂助進上申候条、委可申含候、將又江戸之中納言殿御使之儀相違之由候、何も村雅を以可申上候、誠惶誠恐敬白、

又八郎
忠恒(花押)

十月六日
進上 竜伯様

929
〔御文庫拾七番箱十四卷中〕家久公御譜中ニ在之正文在卷本トアリ

猶々御用心被成候様ニ可被仰候、此一儀拙僧かたゝ申入候由、他言有間敷候、少將様御たのミ被成候故如此候、以上、

態申入候、抑此間伊集院女方衆并子息、方々へ怨敵消散之祈念を被頼候間、少將様御身上御用心被成候様ニ可被仰事候、大事之儀共候、かやうの儀於存、必々可告進之由、少將様かたへ被仰置候条、如此候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長四年〕
十月六日
普賢院
眞昭(花押)

本田六様
人々中

たかを
普賢院

〔上書〕
嶋少將 内(親正)
本□六右衛門尉殿
御宿所
眞昭

〔御文庫四拾八番箱義弘公卷中〕「家久公御譜中ニ在之」

尚以尾崎坊々の注進之儀、誠眞実之儀候間、後日之爲と申、他洩候へぬやうニ分別專一たるへく候、

態申入候、
一 貴所簾中御氣相、先月廿日比々出合申候之条、心遣ニ候て、色々祈念之儀申付候間、此比ハはや快氣之躰候、乍去今にも少ッ、わるく御座候由候へ共、つよくハ不

被煩候、可御心安候、

一 内府様大坂へ被成御移候ニ付、諸大名皆以被遂參上候之間、我等事も今月三日ニ彼地へ罷下御礼申入候之処、乍早晚御仕合よく候て、一昨日歸宅仕候、世上にハ被致心遣候大名衆も雖有之儀候、拙者へハ伊与鶴致拜領、播外聞候、其上頓而若弟鷹可被下之由、御約束にて候、寔種々忝之段難尽書面候、

一 爰元之儀、當分ハいかにも静謐ニ候之間、可心易候、就夫條々申度儀共雖多々候、此使心底をも不知候之間、口上ニハ不罷成、又書中にハ難顯、先々令省略候、

一 高雄尾崎坊々本六右所迄書狀被遣候之間、早々其狀御國元へ進上可仕候由申付候、定而可致言上候、如此之類此方へも粗有之事に候、其元萬端御用心專一候、此等之段圖書頭・比紀・伊兵へ被仰聞、能々念を入候て肝心候、

一 庄内之儀、曖相終候て、既到彼地出帳之由相聞、朝暮承度存計候、定而頃ハ輒被屬安利候之覽、早速吉左右待入候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長四年〕十月七日
維新(花押)

少將殿

931 「御文庫四拾八番箱義久卷中」「家久公御譜中ニ在之」

寺澤殿先舟出水表へ着岸之由到來候、定而自身も近日可爲來儀候、自然如此方被成越着候而へ、可爲無調法而已候、今程利安事火急ニ相煩候て、昨日なとへ度々失氣駄ニ候間、時宜難成存候、殊當分配膳可仕者共無之候、とかく貴所參会候へてハ不叶事ニ候条、直ニ如其方被指越候やうニ、大口迄一人被指遣御理尤ニ候、我等事も近日中ニ可致出陳候条、於其表可申談候、將又ばはん仁之事并糧運送之儀承候、是ハ圖書頭ニ可被仰付儀ニ候處、至此方承候事無心ニ元存候、隨而妻霧嶋へ居住候□□每事庄内表へ折々注進候ト内々漏聞候処、又々此度落人申來候、早々なにと欵御分別專一ニ候、爲存知候、恐々謹言、

「朱カキ」
慶長四年十月拾日 龍伯(花押)

又八郎殿

932 『嶋津氏文書』

(本文書ハ九三三号文書ト同文ニツキ省略ス)

933 「古御文書三番箱中」

十月亥之日愛敬祝之事

先五こくのもり物とて、おりニすハリ候て、三ツなをり候、其前ニあかのいひ、是モ(子脱カ)おりニハリ候て、おなじくなをり候、又其前ニうす一ツ、きねニツなをり候、是モおりニすハリ候、其あかのいひヲはしにてうすの中ニ御入候て、

一うん、二みやう、三ぎやう、四とく、五愛敬トとなへ、歌ニ曰、

神無月難波の面のあしのかず

我がおもふ事かなへとぞつく ト

三度となへ候て、三度きねヲふたつ共ニ御手ニめし、御つき有べく候、猶口傳アルベシ、

慶長四年拾月十一日 龍伯

又八郎殿

934 「御文庫二番箱家久公九卷中」「家久公御譜中ニ在之」

去十二日御狀、今日於入來院ニ拜見申、龍伯二三日之内其元被成御越、一所ニ御相談可在之候条、御陣所へ可參候由、得其意存候、爰元々路次順道、何方も同前之由候条、則明朝罷立帖佐通參、何も委細可申入候、小攝事拙者同前ニ可參候へ共、先今度之儀者、拙者一人參候様ニ

度々御書中ニ付、最前以使者被申、其跡先令遠慮候、猶追々可申入候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長四年〕

十月十五日

寺志

正成(花押)

羽少將様

御報

935

〔御文庫二番箱家久公三卷中〕「義久公御譜中正文有之トアリ」

〔御譜中ニ〕

〔直友歸洛之路、自豊後州賜書簡、記左〕

猶々自是罷下、可得御意かと存候へ共、源二郎方母儀之理迄にてへ、相濟申間敷と存候間罷下、又不相調候とて罷上候へへ、弥事相延候間、御兩人談合仕罷上候、今度之於様子者、具可申上候間、御心安可被思召候、併右衛門尉殿・兵庫頭殿もの、此度被仰下様子不存候間、被聞召届、可相濟儀にて候へへ、勿論御すまし被成、御尤ニ存候、若又不相調候者、上方を猶以可得御意候、已上、

急度令啓上候、仍去十三日ニさかの関着津仕候、然者上方を我等迄ニ、如此伊那圖書方を書狀到來候、此書中之通にて、我等自是罷下候ても、無事之儀相調間敷と存候間先罷上、今度申噺候筋目始中終之儀、内府へ申上候

936

〔家久公御譜中〕

〔正文在平松圓明院〕

御願文之夏

- 一可奉修一字金輪法一千坐之事
- 一霧嶋六所權現
- 一正八幡大菩薩
- 一加久藤諏方大明神
- 一大汝八幡大菩薩
- 一稻荷大明神
- 一金峯山藏王權現
- 一白鳥六所權現
- 一新田八幡宮
- 一二之宮現王
- 一鹿兒嶋諏方大明神
- 一新正八幡大菩薩
- 一彦山三所權現

者、拙者被成御下候欤、又誰々にても内府思召寄通被仰聞、可被成御下と存事候、但右衛門尉殿よりも使者被指下之由候之間、其筋目を以、無事ニ罷成様ニ候へへ尤存候間、彼使者下着候者、御相談専一ニ存候、猶休心・織部殿を可被仰上候間、不能具候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長四年〕

十月十六日

山口勘兵衛尉

直友(花押)

龍伯様

少將様

人々御中

一諸神等

右十三社奉勸請大弊十三本ニテ御神舞之夏、

以上

右意趣者、藤原 忠恒公今度庄内就御在陳、御勝利多幸、御武運長久、作障難者皆悉消滅、万民快樂、諸願成就、故抽精誠狀如件、

慶長四年
十月吉日

伊勢平左衛門尉貞林

937

「家久公御譜中」

「正文」

追而伊集院御成敗付て、源二郎殿龍城之由候、〔本マ、レ〕自京

都も御和平之候様与承候条、何与そ早々被召鎮尤候、

程近候者、數ニ立不申候共、罷立御奉公可仕候處、

遠路故乍存候、眞々輕微候へ共、鷹之羽一鳥令進上

候、御札計候、以上、

御書 畏而令頂戴候早、抑爲私連々御無音申上候之處、

今度同名玄蕃父子、從高橋殿被成御成敗候、様子被聞召

付候之哉、御尊書一入忝奉存候、當山おい而も、自高橋

家何与哉覽申來候条、於中途名字同前ニ罷出候へ共、至

山何与そ手仕無之候条如此候、自然於山ニ從羽方非道之

儀於有之者、於京都可然様ニ被仰上奉頼候、先年至紀州

表御供仕候事、于今無忘却候、節々不申上候事茂、拙者

於薩厂家御奉公無別儀者と、方角大名被思召候条、乍存

罷居候、我々心中之儀者 忠平様御存知之者候之条、新

敷不及申上候、猶彼之御使令口達候条、可被申上候、恐

惶敬白、

〔朱カキ〕
慶長四年
十月十五日

謹上
伊勢兵部少輔殿

奈須彈正忠
祐実(花押)

938

「御文庫二番箱家久公九卷中」家久公御譜中ニ在之

夜前至濱市ニ罷着、則龍伯急向候、先濱市まで有御越、

被成御相談候様にと龍伯被仰付者、爰元逗留仕候、依御

報其元致參上、旁以面可得御意候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
慶長四年

十月十八日

寺志

正成(花押)

羽少將様

人々御中

939

「御文庫四拾八番箱義弘卷中」家久公御譜中ニ在之

「御文庫四拾八番箱義久公巻中」「家久公御譜中ニ在之」

先度以内狀ヲ申候処、被成御得心之由、今度書中相見え候、先々令満足候、先書ニ如申候、愚老手前何共々あまし申候、其身才勘ニ取まへし候て、其身も随分と存候者者、口と心相違候て、利潤かましき事をのミ仕候間、たのまれす候、又上井神五郎ごときの者者、世上をもはゝからず、其身のはて口をもしらざる躰ニ候之条、中々手の付所も無之候、又其身りちきニ見え候者者、たらぬ事のミにて不成候、彼は見合候ても、愚老手前事をかき申候、如御存知隠遁の躰にても、當分のことく在京仕候へハ、なり々にと存候ても、外聞を失ひ候事にて候間、近比々無心なる申事ニ候へ共、被添御心 竜伯様へ御内談被申上、急度被仰付候て預度候、此上をもて茂難成事候者、其通此方へ可承候、先札ニも申候、此儀惣而此元にて口外不申候間、可被仰付時分までは御馳走有間敷候、勿論貴所手前落着させられ候ての上者不及口能、乍重言頼申候、恐々謹言、

「朱力半」
慶長四年十月廿四日

又八郎殿

維新(花押)

『嶋津氏文書』

尚々敵方草臥候とて、油断候てハ可爲越度候、油断

「家久公御譜中」

猶々昨日野邊五郎右衛門尉、西郷如庄内差越候、定明日明後之間ニ、彼一到来可有之候間、其刻までハ圖書頭・比紀事相留候、爲御心得候、其表鉄炮之薬々火事出合、麓之陳屋共焼払候之哉、笑止之至候、併本陳無別儀候之哉、寄特ニ候、惣別焼火邊にて、ゑんしう取扱之儀者停止尤ニ候、無餘儀夜中ニ入用之刻者、油火之もとにて可然存候、然者薬之儀承候、不調なから有合次第令進入候、圖書殿前もかこしまへ薬之儀申越候間、追々ニ可持せ由候、爲御心得候、恐々謹言、

「朱力半」
慶長四年十月廿四日

龍伯(花押)

又八郎殿

莊内山田之本丸與二丸之間、十月廿一日夜鹽焔入火、其邊陣屋數多焼失、此時兵器奉行川上藤右衛門・伊地知彦八郎焼死、惜矣乎、

無之様ニ氣遣尤候、折々又八郎殿へも此由可被申候、以上、

新納左右衛門尉入道差下候刻、以書狀申遣候処、其返札加披見候、然へ庄内表江着陳之由、如何無心元候、此時之儀候間、別而奉公肝要候、將又鎌田出雲守・比志島紀伊守・柁山權左衛門、以別紙可申候得共、右之通相意得可被申候、謹言、

〔慶長四年〕

十月廿四日

維新御判

伊勢兵部少輔殿

943 「御文庫四拾八番箱中」家久公御譜中ニ在之

尚以 竜伯様々御内狀被指上候、然者此趣貴所へも被仰渡候よし、御書面ニ見え申候へとも、爲一覽くたし申候、

一寺澤殿・小西殿其地へ下向にて候間、寔稀の儀と申、能く被入念候て、馳走專一たるへく候、さてハ國の置目、其外したく氣任共無之様ニ、かたく可被仰付候、さやうなる儀ニ付、其家中の様子あひひるゝ事にて候之間、聊御油断有ましく候、

先月十一日之芳札、今月十三日ニ令披見、珍重候、

一宰相煩之儀、笑止之躰ニ候つる間、其段度く申下候処、先日弥兵衛尉被指上候、其返事ニはやく快氣之由申候喜、然処又く市八左衛門尉就此儀被指登候、祝着此事に候、殊於其地も、精誠無御油断之由承候、誠く頼母敷事共に候、此方にて種々祈念仕候条、弥快氣たるへく候、可御心安候、

一かミ様比比御氣わるく御座候間、色々祈念之儀申付候、其故候之坎、餘々つよくハ不被煩候、無御心元有間敷候、將又去十八日中性院申請候て、大威徳之護摩并聖天供、何も一七日成就仕候、此内證ハ呪咀之かへしとして頼存候、然者庄内へ被居候天長寺とおりの、何と調伏申候とも、中性院被成御祈念候上者當方へハ少も及間敷由、中性院も被仰候、日出候事、

一庄内之儀、山口勘兵衛事果候て、防戦ニ及申候よし、先使ニ具承候、源二郎仕立条々曲事迄にて候、涯分龍伯様へ被得尊意、万端御才覚此時候、乍重言 内府様御下知をも承引不申仁ニ候之条、源二郎運命相極たると存事候、不及是非候事、

一山田口庄内へ被相働候之処、都城を始諸城より相懸、既及一戦、數百人討捕被得勝利候之段、満足不少候、

弥吉左右待入計候、勝利のわき油断候てハ不可然儀候
 条、諸勢用心之儀、無緩可被仰付候、隨而右働之刻、
 北郷作左衛門尉手柄之由、神妙之至候事、

一源次郎母、種々申下儀共候之哉、必定其分たるへし、
 連々のくせにて候条、笑止迄にて候、于今不入申事ニ
 候へ共、最前のごとく関東へ流罪させられ候ハ、さ
 のミかやうにハ有ましき物をと存計候、東へ罷下候之
 事類ニ御佗申上候儀も、ぬし一人の分別にてハ有間敷
 候之歎、定而力草可有之と存事候、何とも始末共ニ當
 家之御爲ニハ妨に罷成候儀、不可勝計候事、
 一新納奎入を以くたし申候源二郎への書狀、庄内へ被遣
 候由、書中ニ見え申候へ共、其狀比度此方へ被指上候
 間、不審ニ存候処、市八左衛門尉口上承候て令合點、
 はし書をなをし指下申候、返書之儀候条、被相届候て
 可然候へん哉、其元御談合次第たるへき事、
 一新納助右衛門尉・小野郷右衛門尉にて申下候条々、被
 聞食届候よし喜悅候、隨而飛脚之儀申候処、度々被指
 上候由被仰分候、承届候、然者 内府様を節々御使を
 以、國元之到來被成御尋候之処、一月も二月も到來無
 之躰ニ候、然間智音衆も少苦勞にて候とも、つぎ飛

脚にて可被仰上時分柄ニ候之処、御延引不可然候由、
 内證被仰候ニ付、爲御心得申候事、

一從肥州庄内へ差籠候玉藥つミ申候船、被成糺明候へ者、
 無実所にて、先々肥前のごとく御返し之由、并從加藤
 殿如庄内罷通候て、歸宅の飛脚からめさせられ、其者
 の口から山勘兵殿被聞候て、依爲歴然成敗なされ候段、
 くわしく承置候事、

一上井神五郎諸人へ恣ニ遣申候物敷糺明候て、少々相究
 候分、谷口宮内左衛門尉・中山主殿助を以承候歎、當
 日迄ハ無參着候、參次第様子承候て、追而御返事可申
 候事、

一いつミの儀、油断無之様ニ可申付之由承候、尤存事候、
 併從爰元ハ遠方ニ候之条、不及才覚候、万々可被添御
 心事頼入候、仍彼地へ可召置もの思案申候へ共無之候、
 其故者或さいかんニ候へ者、上井ごときのものにて候、
 或古躰ニ候へ者、入目過候て物毎ニ公界かけ申候、何
 とも仕悪候て未申定候、就夫帖佐・蒲生の衆、當時者
 庄内表へ在番之由其聞候、勿論左様ニモ候へてハにて
 候、雖然出水之儀も相調候へてハ、國家のためニ罷
 成儀候之間、双方可然様ニ何とそ校量所希候、

一其元客來しけく候て、何篇ニ付難調候之覽、察存計候、併かやうなる儀、毎々無之儀候間、涯分被入念可被仰付事肝心候、餘者含口上候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
「慶長四年」十月廿五日 維新(花押)

少將殿

「此一書、左ニ写載置ト云ヘトモ、御正文を以更ニ写載候間、引合再考あるへし」

944 「御文庫拾七番箱十四卷中」

〔本文書ハ九三七号文書ト同文ニツキ省略ス、但シ日付ハ十月廿五日トアリ〕

945 『嶋津氏文書』

〔本文書ハ九四三号文書ト同文ニツキ省略ス〕

「此一書、御正文を以前ニ写載タリ、重複トナレリ」

946 「御文庫四拾八番箱義弘公巻中」
「家久公御譜中ニ在之」

尚々任現來、鷹考進之候、以上、

今月二日庄内へ着陳之由、中務方より使札を以被申上候、千勝萬勢候、様子爲可承、坂井助左衛門尉指下候、此者下着次第、其元様子被仰調、即時ニ可被差上候、恐々謹

言、

〔朱カキ〕
「慶長四年」十月廿六日 維新(花押)

又八郎殿

急度令啓候、仍今月云々、「寺志」守殿宛同巻中ニ有之」

947 『嶋津氏文書』

已上

急度令啓候、仍今月二日御在所被成御打立、薩へ御下向之由、先札度々相届候、寒中と申、旁御辛勞之至無申事候、小攝被成御同心候哉、然者今月二日庄内江又八郎着陳仕候由到來候、先以珍重ニ存候、時分柄と申、貴所御下向幸ニ存候間、何之道にても、又八郎爲可然候様ニ御才覚頼存候、其元様子無御心元存候儘、爲可承飛脚申付候、様躰可示給候、恐々謹言、

羽兵入

十月廿六日 維新(花押)

寺志 广守殿

御宿所

〔此御案文 御文庫四拾八番箱中ニあり〕

〔義弘公御譜中ニ在リ〕

「家久公御譜中」

「正文在執印休左衛門」

薩州郡之内知行目錄

隈城

西手村之内屋敷一ヶ所

高五拾石但七拾石壹斗六升八合五夕之内

右知行之事、先年以京儀雖勘落候、爲當家繁栄、武運長

久奉寄進候、於神前可有祈禱者也、

慶長四年拾月廿八日 忠恒(花押)

執印吉左衛門尉殿

「御文庫二番箱家久公三卷中」「家久公御譜中ニ在之」

以上

寺志被越候以後、御左右不承候之間、飛札を以申上候、

庄内表へ御働之由其聞候、定而可被任御存分ニ奉察候、

不及申上候へ共、寺志被成御入魂、何之道にも相濟申

様ニ可被成御分別事、專ニ奉存候、猶追々可得貴意候、

恐惶謹言、

「朱力半」

「慶長四年」

十月晦日

小攝津

行長(花押)

羽少將様

人々御中

「御文庫拾六番箱九卷中」「義弘公御譜中ニ在リ」

以上

今度幸侃罪科無糺明成敗被仕候儀、一々迷惑之次第候、

就其我等進退も、去三月以來被取籠、誠重々非道之喫共

候、或表裏之儀、或竜伯・兵庫頭申文相違之儀、中々難

申盡候、其段条數別紙ニ相添候、彼是所存之趣、無腹藏

御兩所へ申入候間、御取成所仰候、菟角我等事嶋津代々

者候条、一篇ニ薩州へ雖奉公仕度候、如右何事も非正儀

候へ者、自今以後之儀、毛頭頼無之候、勿論竜伯・少將

對我等、此中之心底可相殘儀覺悟之前候、然時者拙子を

無等閑可被召仕儀在之間數候条、志广守殿以御分別、何

方へ成共被召出候様ニ奉頼候、自然此旨 内府様へ被仰

上、曲事候段被仰出、雖被加御成敗候、不及是非候、其

時拙者一人罷出、如何様にも可任御喫候、右之趣可然様

御披露奉頼候、恐惶謹言、

十一月六日

伊集院源次郎

忠眞(花押)

平野源右衛門尉殿

高島新藏殿

「末ニ別紙」

「庄内喫之刻、伊源二郎寺志广守殿へ進覽候證文也、然者爲後證、於

伏見志「守殿・維新此封目ニ在判、

(惟新)

(花押)

(寺沢正成)

(花押)

伊集院源次郎忠貞狀卷通

951

「家久公御譜中」

「正文在幡津安藝守久雄」

猶々其元之儀、無別儀与朝暮無御心元承度候、具可示給候、自然又於京都相應之御用候へ、無御隔心可承候、委申度候へ共、以外急便候条、令省略候、以上、

下國被申候以來、不申承候、然者好便之由、武庫入より被申越候之間令啓候、弥其元之儀無吳儀候由承届、尤目出度存候、武庫入參會申、雜談共申承事候、大坂之様子無別義靜謐之躰候条、可御心安候、定而從武庫入具可被申候間、令省略候、雖無差事候、向後節々可及書信候、御入魂可爲本望候、恐々謹言、

〔朱カキ〕

「慶長四年」十一月八日

(前欠)

(花押)

少將殿

〔上包〕

薩州にて

少將殿

まいる

東山

ぶ

952

「御文庫二番箱家公三卷中」家久公御譜中ニ在之正文在卷本トアリ

尚以庄内之儀、精被仰知本望存候、以上、

尊翰致拜見候、仍此中しへち城被召詰候様子被仰聞候、被付御心御細書、誠忝次第候、弥此脇稠敷可被仰付之由候条、彼一城之儀者不及申、庄内悉落去可爲必定候、殊内府様依 御意、寺澤志摩守殿御下之由候、如此被入御念儀候条、菟角一着不可有程候、度々如申上候、某事可罷出覚悟候へ共、御左右可相待之通、切々被仰越候条、應其旨候、如何様不斗御見舞可申上之条、期其節候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

「慶長四年」

十一月十三日

高橋右近大輔

元種(花押)

羽少將様まいる

貴報

953

「御文庫二番箱中 義弘公」

〔本文書ハ一二八六号文書ト同文ニシキ省略ス〕

「御文庫二番箱家久公三卷中」家久公御譜中正文在卷本トアリ

猶以遠路故每事罷過、御心底迷惑仕候、此表無易儀候条、可御心安候、以上、

其以後者不得責意候、其表弥御無事候哉、被仰聞度存候、上方無相易儀之由候、仍伊集院儀付而、從内府様寺澤志广被進之候、如何相澄申事候哉、其表依様子、此表之者共可致出陳之由候間、御左右相待申候、無御隔心御用等可被仰付候、猶重々可申入候、恐惶謹言、

「朱力キ」
「慶長四年」

十一月十六日

羽柴内記

秀直(花押)

薩广少將様

人々御中

「家久公御譜中」

「正文在加治木衆平田覺右衛門」

去比於 大峯御祈禱之卷數相達候哉、猶事々、追而可申述候、猶從友枕齋可有演説候、

九月廿四日之芳札、當月十九日具令披閱、每度御懇意感悅無極候、抑伊集院手前之事、菟角御本意勿論之儀候間、少々遲速者不入儀と、諸人取沙汰申候、殊今度從内府一人被差下候使者申扱候處、表裏之趣其聞無隠候間、不届

「嶋津家文書」

之儀別而内府御腹立候様承及候、朝鮮國之御手柄故、貴國之儀者不混自余御荷擔之条、定弥可被添芳意候与、尤

珍重候、大坂・伏見弥無事之姿候間、可御心易候、於巨細者、從武庫切々可有御注進候間、不及申候、將又金襴一卷送給之候、毎々芳情之段難申述候、仍御祈禱之儀、日々更無懈怠候、猶以不可存由断候、穴賢々々、

「朱力キ」
「慶長四年」十一月廿日

(花押)

羽柴少將殿

如雪

「旧記抄」

其許江長々被成滞留、辛勞之儀共察入存候、然ハ繩瀬江御番之儀雖大儀候、此節今少被相閉目候て可然候、其外諸下知、堅固ニ可被仰付事肝心候、爲御存知候、恐々謹言、

「慶長四年」

十一月廿二日

(大田親増)
増二齋

御陳所

圖書頭

忠長(花押)

猶々条々本田助允へ相含候、可被聞食候、

去月十一日之書狀、今月廿日相届令披見候、

一相良甚兵衛尉・大脇弥五右衛門尉無吳儀下着之由、玆重存候、

一去月二日庄内しわち・野々谷之間ニ被成着陣、則圖書頭を始め〳〵在陣させられ候由、目出令存候、しわち籠城之躰、こま〳〵書載之趣、さこそと存計候、しわち落去不可有程候間、追々御吉左右まち存候、

一諸口無御由断被仰付候之由尤候、いよ〳〵不可有由断候、先札をもて申候様ニ、得勝利候刻之御遠慮かんよりの事候、

一寺志事、先月十七日はまの市へ下着之由、竜伯様も御書拜領、然処垣泉州へ先月廿三日之御傳札、只今相届披見本望之至候、肥後目之通道なり候へぬよし、竜伯様よりも被仰聞候、然々證跡共御座候者、内府様へ可申上候間、肥後目通道相塞候様子、重而可承候、

一宰相煩之事、今度者以之外にて令氣遣候処、きとくニ令本腹、大慶之至候、時分柄之儀と申、貴所御満足察存候事、

一中務殿、從八月以來于今自賄にて在陣之由、誠以懇情

之至、可申様無之候、貴所〳〵注進之趣、今度も以狀御札申候、

一椎葉山〳〵申來儀、中書調達之由案中ニ候、定中書〳〵可被申上候間、其節隨分馳走可申候、

一山口勘兵衛尉殿、從内府様重而被仰付、爲御使又々下向候、其元諸法度・御置目以下、無猥之様ニ被仰付尤候、此元之儀者、税所休心・竹織部佑可申達候間、不能書載候、

一貴所御乘馬事、かきなされ由候間、内府様〳〵拜領之栗毛、市來八左衛門尉下向之刻乗せ候き、定此比者可爲下着と存候、

一御家之御馬之乗様、竜伯様へ被得御意候由、さて〳〵めてたき事にて候、別而愚老満足此事候、不及申候へ

共、相應之御用等可被仰上候、恐々謹言、

〔カキ入〕
慶長四年十一月廿四日 維新(花押)

又八郎殿

〔家久公御譜中ニ在之〕

〔此正文、御文庫四十八番箱中ニ在リ、引合置也〕

〔家久公御譜中〕

「正文御自筆」

いつもの悪筆を染申入候、仍本六事、竹織罷上候刻失念候間、存松上洛之刻可被仰付之旨、御書中ニ相見え候、愚老満足此事に候、先札にも大方申候様ニ、我等不存事にも失外聞、又者諸人之述懐のミおほく候、条々段々御面談ならては難申分候、彼仁之事存松上洛候者可罷下なと、内々申候由きこえ候、さやうニ候ハぬやうニ、此佩直ニ食留候て、愚老手前之用所をも申付候様ニ、被入御念被仰付候て可預候、落着之儀まぢかね申計候、恐々謹言、

〔朱力キ〕
「慶長四年」十一月廿四日

維新(花押)

少相殿

／＼

6

維新

959

「權山氏文書」

猶々於高麗辛勞共、聊雖無忘却候、何かと取紛、書中にてさへ不申候、萬々疎意之様ニ候、併非心底候、

已上、

庄内表江在陳之由、寒中之苦勞察存計候、然者其元御置

目・諸法度已下、無緩於被仰付候、御勝利之儀者案中候、

雖不及申候、諸事不可有油断候、就中山口勘兵衛殿爲

上使重而御下向候付、其許彌無猥之様被申付専用候、上

方之儀者、一段御無事候、猶追々可申候、謹言、

〔慶長四年款〕

十一月廿五日

維新判

桃山權左衛門殿

960

「伊集院氏文書」

已上

庄内表江在陣之由、寒中之苦勞察存計候、然者其元御置目・諸法度已下、無緩於被仰付者、御勝利之儀者案中候、雖不及申候、諸事油断有間敷候、就中山口勘兵衛丞殿爲上使御下向候間、其元弥無猥之様被申付専用候、上方一段御無事候、猶追々可申候、謹言、

〔朱力キ〕

「慶長四年」十一月廿五日

維新(花押)

(伊集院久造)

抱節

「此御書、抱節譜中ニ在リ」

961

「御文庫拾七番箱十三卷中」(家久公御譜中ニ在之)

猶々其表之儀、御報可預成候、委者彼鍋倉作右衛門

尉へ申合候間、不能詳候、已上、

其表爲御働被成御越御辛勞段、尤以參上可申上候へ共、先く用飛札候、定可爲御勝利与存候、今程於御滞留者、必く遂參謁可申上候、此等之趣、可然様御披露所仰候、恐く謹言、

〔朱力キ〕

〔慶長四年〕

十一月廿六日

又七

忠豊(花押)

伊勢弥九郎殿

962 「家久公御譜中」

内大臣家康卿使山口勘兵衛尉直友再下當國、責伊集院源次郎之不應卿旨、時於忠恒賜衣服十領、高書記左、

963 「嶋津氏文書」

猶以小袖十進之候、已上、

御使札并爲御音信鉄炮・甘葛送給、祝着之至候、將又庄内之儀、龍伯・維新へ申候之間、何様ニも被任吳見尤候、猶山口勘兵衛尉口上申合候間、不能具候、恐く謹言、

〔朱力キ〕

〔慶長四年〕十一月廿七日

家康(花押)

薩摩少將殿

〔右ノ正文、旧御番所御文書ニ番箱中國統新龜鑑中ニ在リ〕

964 「御文庫拾七番箱十四卷中」家久公御譜中ニ在之

以上

其後自是可申上処ニ被成下 尊札、忝令拜受候、

一志和地堀川の儀被仰付、兩日ニ事成候由、是又志之儀候、次者從高城表敵少く出合候哉、被追入首數多被御討捕、殊ニ籠まで致放火、御勝利目出度奉存候事、

一天神山御陣取御普請もはや相調、目出度奉存候、近日あひの垣まで被仰付由ニ候哉、右之分ニ候者、志和地無程御手ニ可入儀案中ニ存候事、

一上方之儀、相易事無御座候、隨而者加主さしきへ被相越候哉、爰元へ一切其沙汰不相聞候間、御注進不申上候事、

一山田之儀、其後無事ニ在之儀候哉、菟角子細不申來候事、

一源七郎煩之儀ニ付而、御在陣中ニ罷歸候事慮外千万ニ候処ニ、結句被加御意忝存候、如御存知大事煩候故、當時遮而吳見も難成候条、萬く咲止ニ存候、何も能様ニ御取成頼存候事、

一在陣仕候御礼と候哉、却而難申謝候、其表へ人數少く

召置候間、御用之時者、彼者共まで被仰聞候者可申來候条、不限夜中參上可仕候、此等之趣、可然様ニ御披露所希候、恐々謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長四年〕

雪月朔日

中務太輔

忠豊(花押)

伊勢兵部少輔殿

〔猪俣氏家藏〕

猶々書立之外ニ人衆猶有へく候哉、先帖佐かたニ者有之ましき由承候条、不及是非候、さて者諸所へ御坐候する坎、涯分其元にて御談合有へく候、彼是爰元之儀、被添御心候様頼存候、

先度伊宮内少輔を以、おく方へ可被召仕者共之儀申候キ、爲御返事拙者可爲分別よし承候、得心不申候、先かこしまへ被召置候人衆之内を被仰付、其上ニ不相達処を濱之市より申付候へとも、又何かしとも承候ハ、何と様ニも談合申候する、そなたへ參せ候ものを、何迄も我等かくこの小女ごとく、拙者分別次第と計承候者、心得不申候、家をも彼もの續候かと存候ニ、然々と人をも御添候てこ

そ可然存候候スルニ、やうく平豊・伊駿・河善此者迄にて候、

小者としてハ吉次・才七、さては權右衛門尉など計はせ廻候へとも、公界はつれノ事闕のミとみえ申候、誰とも妻子なと上せ被置方ハ、似合くくに其分別ありくくと被成候由聞え候、爰元之躰者、外聞はつれ之儀多候て迷惑候、餘之事ニ人かす十人はかり書立候而進候、此内を五六人も被仰付、今之衆ニ被相加、二番替ニ被仰付候而坎とそんし候、此上ニも濱之市方角より御望之もの共御坐候者、無異儀御談合可申候、又小者なともかこしまへ召置候者、十人計書立、先度進候へ共、とかく手を被仰返事無之候、然共其内を三人も四人も被送候て、被仰付候へかしと存候、まことに指向御軍勞之刻、心なき申様と可思召候へとも、餘々在伏見外聞惡躰ニ候之間、如斯候、恐々謹言、

〔慶四比坎〕

十二月二日

龍伯(花押)

又八郎殿

〔御文庫四拾八番箱義弘公卷中〕「家久公御譜中ニ在之」

尚々庄内堺諸所主取之人衆、銘々承届候、尤肝要之儀に候、

以先札申候様、此飛脚先月廿五日上着候、仍此元之様

子者山口勘兵衛殿致御供、休心・竹織部佑・本田助丞
罷下候刻申下候間、今更不及書載候、其後替儀も無之
候、

一奥之御煩ニ付て、態飛脚を被上候、尤肝要存候、然者
すぎと御本腹にて御座候間、可御心安候、

一宰相煩之儀も、此比者すぎと本腹候、是又御氣つかい
あるましく候、

一先書ニモ申候庄内之儀、いつれの返事も無事之儀者な
るまじきと申候由候哉、雖不及申候、種々内通共申候
者多く可在之候之条、すこしの御行も被入御念、諸堺
目無緩之様可被仰付候、不可有御由断候、尚追々可申
候、恐々謹言、

〔朱力キ〕
慶長四年十二月四日

維新(花押)

又八郎殿

967 「家久公御譜中」

慶長四年十二月四日、設間垣於志和池城、敵兵莫可通一

線之徑路、宛如籠鳥、

968 『新納氏文書』

態用一書候、仍莊内御行之儀に付而、晝夜相詰在番之由、
寒中と申、極老之出陳誠前代未聞共可申様無之候、不及
申候へ共、いよ／＼賢慮此時候、兼又弥太右衛門尉奉公
之儀、少も無油断躰と見え候、然共切々痔病出合、乗馬
などにての供以下不自由候、更以私曲とは見えず候間、

不及是非候、早竟此始末者貴所若衆數寄ニ付而、いか程
の人に無心をいひかけ仕かけ、めいわくさせられたる其
むくひ、忽弥太右衛門尉身上ニあたりたる状と申す事
にて候、ものゝむくひは、一代二代にも見えぬ物にて候由
申候へ共、なにとしたる首尾に候哉、弥太右衛門尉へハ
はやくむくひたる事にて候、貴所若輩時分之仕立、定於
于今者可爲後悔と存計候、尚期來信之時候、謹言、

〔朱力キ〕
慶長四年十二月四日

維新(花押)

(忠元)
新納武藏入道殿

「此御書、忠元譜中ニ在リ」

969 「家久公御譜中」

十二月八日、敵方設伏兵於安永口率寡兵、進近地偽引于
山田軍、雖禁之若輩等已進相對鬪戰、漸追退去入伏兵中、

我兵敗損失殆百人許、所不嫌我之心也、

970 「新納勘解由久宣譜中」

慶長四年己亥十二月八日、進莊内高江大手口、與黒田友右衛門尉俱合鎚於敵兵北村友仙、世以無不美談也、

971 「御文庫四拾八番箱義久公卷中」「家久公御譜中ニ在之」

其表敵案ニ入、慮外之仕合出來候由到來候、外聞不可然儀ニ候、無心元存、様子爲可承飛脚申付候、

一此中若衆氣任之由、其沙汰候間、下知相背、如此不慮之儀出合候覽与存事候、

一前々ニ相替、外聞なと深々不出之由、其聞得候、不可然之段此間申盡候、今度も無其儀故と存候事、

一昨日於未吉表ニ福山衆敵四人討取候、其外とり人五人、馬五十疋取候、彼とり人申候者、其表にて打取候頸百餘かゝり候由申候、いかゞ無御心元令存候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長四年〕十二月十日 龍伯(花押)

少將殿

參

972 「御文庫四拾八番箱義久卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々霧嶋ノ御神慮いかゝ候らん、無御心元存事ニ候、御立願とも候て可目出度候、自是モ涯分析念可

申候、又何時モノ敵はたらき候する時ハ、人衆ヲ出しなきやうニ御下知干要ニ候、さてこなたよりた

くミ候てハ、いく度モノ御させ候て可然候する、万吉々々、

其境之儀承候て笑止ニ存候、たゞ若キ者共下知ニつかさる故にて欵候らんと推量申候、但御下知にて如此之

儀出合候てハ、一段笑止ニ候、一みゝ聞ヲふかノと被出候ハてハと申候キ事、此時之

儀ニ候、猛勢伏こミ候ハ、一段聞つけ安ク候するものをと口惜候、こゝより成共見ノ聞之事、涯分可被仰付

候、一かこしまの諏方大明神之御はた、七月之御祭礼之時

二本、庄内ノやうニぬすミ取候と申候か、まことにて候哉、いかゞ候らん、

一いつの比にて候哉、鹿兒嶋諏方御前又稻荷ノ御前ニきもし死候て候事由、此ニヶ条この比承付候、いつれも

まことにて候や、無心元存候、自然事实ニ候ハ、け

ちにて候する、御祈念とも入へき事かと存候、糺シ候て御らん可有之候、

一御下知之儀、當座計ノ事ハならぬ物にて候、平生ノ御置目肝要ニ候、後日ニハ如此之儀出合候する、かやう

ニ仕れと仰せをかれへき事干要候、御弓断有間敷候、

一利安ヲハ御返し候て給候へかし、爰元へモさせ度事共

候、利安參候へ、申付へく候、

〔朱カキ〕
〔慶長四年〕十二月拾一日

龍伯(花押)

又八郎殿

973 「御文庫二番箱家久公九卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

態令啓上候、去十一日大坂罷着、兵庫殿申談、内府様

御前罷出、庄内之様子申上候、拙者上着以前、山口勘兵

衛方被遣候条、其元も重而一左右次第可罷下旨付、令遠

慮候、内府様御意之旨、兵庫殿も委可被仰候、恐惶謹

言、

〔朱カキ〕
〔慶長四年〕

十二月十五日

寺志厂

正成(花押)

羽少將様

人々御中

974 「御文庫二番箱義弘公卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

態令啓入候、

一寺澤殿致御供、比紀伊守無吳儀去十一日ニ上着候て、

其元之様子具承届、祝着此事候、然者庄内事未相濟之

由、無心元存候事、

一寺澤殿就上國、拙者事モ追付十一日ニ大坂へ罷越、寺

志广守殿へ遂相談、同十三日ニ内府様へ罷出候之處、

乍早晚御仕合よく、以御直談別而到當家御入魂之儀、

難盡紙面候之事、

一源二郎山口勘兵殿へ申候意趣と、此度寺澤殿へ申入候

趣、致各別候之条、庄内之御曖いかゝ可事濟候哉と、

心遣候事、

一勘兵殿定而頃へ被成下着、庄内之御曖共可有之かと存

候、就夫源二郎御返事、何程ニ申上候哉、其様子不移

時日可被申上事、御油断有ましく候事、

一内府様御奥意之儀共御座候条、先近日中比紀を以巨細

之段可申候、寺志御事ハ其元より之到來迄ハ、此地へ

可被相待之由被仰出候、爲御存知候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長四年〕雪月十五日

維新(花押)

少將殿

參

975

「御文庫二番箱義弘公卷中」「家久公御譜中正文在卷本トアリ」

態令啓入候、仍山口勘兵衛尉殿定而此比者被成下着、庄内之御嘜可有之候、然者源二郎下城事、一着之日迄ハ互矢之口相留られ候ハぬやうニ有度候、其故者嘜と候て、たかひに矢を留候へは、堺目緩ニ罷成事眼前候之条、此段山口殿へ被申分、賢慮肝要たるへく候、此等之段、寺澤殿へ令相談如此候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長四年」 雪月十五日

維新(花押)

少將殿
參

976

「家久公御譜中」

去年十月、於朝鮮國獲大勝利之後、大明裨將茅國器弟茅渭濱爲質來于我父子營、受之而後附屬于寺澤志摩守、今也不可羈于日本、受渠於薩摩、纒乘船乘警固之士卒、明春解纜可令歸于中華、有内大臣家康卿之令、義弘公達之以細書、記左、

977

「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在之」

於高麗泗川被請取候人質ういひん事、最前内府様被仰

出候様ニ、弥薩へ被食下、薩々渡唐仕候て可然之由被仰

出候間、近々其表之様ニ可罷下候、且者貴所請取之質人と申、且者大明・日本へ外聞にて候間、薩にて宿以下被入御念、可被仰付候、今程者國元繁多時分ニ候之条、貴所御念入候ハすハ、諸事可爲不如意候、巨細之儀者追而可申候、先其元爲御心得申候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長四年」 極月十六日

維新(花押)

又八郎殿

978

「御文庫二番箱家久公九卷中」「家久公御譜中ニ在之」

已上

態以飛脚令申候、仍昨日十五日大坂へ便船御座候、然者内府様御使山口勘兵衛方、去五日ニ大坂を出船之由風聞候、然共到今天、當所佐賀関へも參着無之候、自然其表へ直ニ被罷通候哉、最前飛彈守ニ御内存之通、拙子ニ被申置候、山勘兵其地へ未被相越候て、只今ニも爰元へ着船候者、飛彈如被申置候、拙子先申留可申候、若直ニ其表へ被相越候へハ、拙子不念之様ニ御座候之間、先爲御案内以飛脚申上候、山勘兵江之御使も、昨日迄佐賀関ニ被相待候へ共、自然山勘兵其地へ被通候かと被存、今日

細嶋まで運船被仕候、又勘兵爰元へ着岸之御左右候へ、

重而御使二渡次兵衛へ飛脚被遣、勘兵直談候様ニ仕合申

候、飛彈守へ去十三日ニ爲越年上國ニ候、拙子爰元ニ在

之儀ニ御座候間、御用等候へ、不寄何時可被仰越候、

寺志广も去十日ニ大坂へ着船之由候、恐惶謹言、

〔朱力半〕
〔慶長四年〕十二月十六日 友一(花押)

薩广少將様

人々御中

太美作守

薩广少將様

人々御中

友

〔御文庫拾六番箱九卷中〕〔義弘公御譜中正文在加治木
衆新納仲左衛門忠雄トアリ〕

覚

一留守居衆へ年始之祝言之事、付諸寺へ祝言之事、

一出水城普請之事、

一江南馬之事、

一ばはん船荷物之事、付ろそん船壺改之事、

一武器兵具可被上之事、

一在京衆盛之事、

一甌嶋ニ唐船遠見、四月より然与可被召置事、

一うのひん賄之事、

一御番所之茶四拾斤可被指上事、

一御藏へ在之御物、早々可被差上事、

一於上方御請取之八木式千四百石之内、上四百石程未進

可在之様ニ聞得申候事、

一夫丸替之事、

一魚塩之事、

一出水のとぎ可罷上事、

一うき土貢之事、

一仕上米の事、

〔朱力半〕
〔慶長四年十二月十六日〕

〔朱力半〕
〔此類書家久譜有之〕

『雜抄』

先日御息孫右衛門殿被相越承候、繩瀬御番手之儀、尤之

御事候、則入来院殿江老中使を被付候、其後いかく相濟

候やうをも不承候、猶以不審候哉咲止候、入来院殿先日

何程にか御申つらん、無御心元候、仍玉藥先三百放進之

候、てつほうの儀者鹿兒島より追而可參候間、御尋候へ

候、恐々謹言、

〔慶長四年〕

十二月十七日

〔入田親増〕
入左馬入様

御報

伊兵

貞(花押)

981

〔雜抄〕

如仰候、先年於豊州御忠貞無其紛子細候、殊更御息東市
正殿到高麗御戰死候御奉公、寔不淺儀ニ候、条々次第老
中迄可遂披露候、就中平地之繩瀬御勤番、我々始終爲存
儀候之間、隨分取合可申候、可御心易候、猶巨細圓教房
可有御演說候、恐惶謹言、

〔同四年〕

雪月十七日

新納武藏入道

爲舟(花押)

相良新右衛門尉

長泰(花押)

入田左馬入道殿

參御報

982

〔御文庫ニ番箱家久公三卷中〕「家久公御譜中ニ在之」

猶以遂參上、様子可得御意候、以上、

急度申入候、内府爲使罷下、夜前日向なぬき村に參着

候、則御陳所へ參、可得御意儀候へ共、竜伯様へ參候間、
自濱市以參可申上候、上方弥御靜謐候之条、御心安可被
思召候、内府者拙者罷下時分、攝州へ鷹野ニ被參、於
彼地得御意罷下候、委曲參拜之節可申上候条、令省略候、
恐惶謹言、

〔朱力平〕

〔慶長四年〕十二月十八日

直友(花押)

薩厂少將様

人々御中

山口勘兵衛尉

直友

983

〔御文庫ニ番箱家久公三卷中〕「家久公御譜中正文在卷本トアリ」

先書如申入候、源二郎事、山口勘兵衛方被遣候条、定御
請可申候、若相滞儀も於有之者、早速可有御注進候、隨
其可被仰遣旨候、拙者事、立歸ニ可罷下致覚悟雖罷上候
と、右之通ニ付、兵庫殿申談逗留仕事候、委細比志嶋紀
伊可被申入候間、不能具候、恐惶謹言、

〔朱力平〕

〔慶長四年〕

十二月十八日

寺志厂

正成(花押)

羽少將様

人々御中

(本文書ハ一九七六号文書ト同文ニツキ省略ス)

柏原村之内

高四石四斗七升八合

合式拾石

右之地、爲加増令配當者也、

985 「御文庫ニ番箱義弘公卷中」「家久公御譜中ニ在之」

寺澤志广守殿・比志嶋紀伊守、今月十一日ニ上着、則大

坂へ罷下遂參會候、然者庄内之儀不相濟之由、不及是非

候、就夫比紀へ被仰合候御存分之通、念比に承届候、健

軍猪石衛門尉・桑幡城介も比紀同日ニ上着、御意趣之通

是も具承届候、何も尤令存候間、寺志申談、内府様へ

致言上候、於様子者比紀口上ニ相合候間、不及書載候、

山口勘兵衛尉殿も此比者可爲御下着と存候、其元御仕合

之様子、急度可被仰上候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長四年」極月十九日 維新(花押)

少將殿

986 『安樂氏文書』

日州諸縣郡大崎之内

岡別村内

高拾五石五斗弍舛二合

隅州肝付郡

987 「御文庫ニ番箱家久公九卷中」「家久公御譜中ニ在之」

猶以懇可申上候へとも、急々申上候、兵庫様も昨

晚桑畑城介被相越候、此書狀者其内に相調申候、以

上、又申上候、貴所様も山口殿へ被遣候御狀へ、其

まゝ兵庫様へ相渡申候、其分御心得可被成候、以上、

懸申入候、我等も昨日廿日ニ内府様へ御目見え仕候処、

其もと御見舞をも仕候とて、事外御懇之御詫共候間、是

又可御心安候、就其勘兵衛殿路次にても懸御目、右之被

成御意候様子をも御物語申度候へ共、船中にて相送不懸

御目候、何れの道にも山口殿其元へ御下候て、右之御詫

共被仰候へてハ不被叶様に相聞候間、山口殿と御入魂被

成、可然様に可被仰談候、寺志^一へも、兵庫様へも未懸御目候、志^一守殿内新藏ニあい申候へハ、何れの道にも

勘兵衛殿御越候間、いそき右之様子とも、源二郎ニ内

府様被仰遣儀候、とかく山口殿被仰届候へてハ相聞え

間敷候間、早々そこ元被仰談候て、其御返事を山口殿と

御談合候て、被仰上候て御尤候、就其いか様之儀も被仰

上候ハ、美作ニ申置候間、白杵迄可被仰下候、早船に

て可相届候、少も無沙汰仕間敷候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長四年〕

極月廿一日

太田飛彈守

吉〔花押〕

羽少將様

人々御中

988

〔義久公譜中〕

〔本文ハ九〇七号記事ト同文ニシテ省略ス〕

989

『嶋津家文書』

寺澤志摩守被上付而、御使札令披見候、庄内之儀得其意

候、重而山口勘兵衛差下候間、様子具可承候、人數等其

元一左右次第可申付候、恐々謹言、

〔カキ入也〕〔朱カキ〕

〔慶長四年〕十二月廿四日

家康〔花押〕

竜伯
薩摩少將殿

〔張紙〕
〔此正文、旧御番所御文書ニ番箱中國統新龜鑑中ニ在リ〕

990

『嶋津氏文書』

今度庄内表人數等被入精、加勢之由尤候、彌油断有間敷

候、委細寺沢志摩守可被申候条、不能具候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長四年〕十二月廿四日

家康〔花押〕

嶋津中務太輔殿
〔疊久〕

991

『永吉邑主嶋津氏文書』

急度申入候、各到山田表被遣加勢候儀、内府様申上候、

寒天之刻、兵粮以下被届儀も不可成時分候条、過分ニ被

遣候儀ハ御無用、弥最前申候通、上下百都合可然候、自

身御出陣之儀者、猶以重而自是可申入候、則以御直書被

仰候、恐々謹言、

〔慶長四年〕

十二月廿四日

寺志^一^一

正成〔花押〕

嶋津中務太輔殿

人々御中

〔此二通、家康ノ書ハ豊久ノ譜中ニ在リ、寺澤ノ書ハ豊久ノ譜中ニ相

992 「御文庫四拾八番箱幾久卷中」「家久公御譜中ニ在之」

扱者志和知之事、近日可致落去様ニみえ申候哉、就其被仰越之旨、委細得其意候、恐々謹言、

「朱力キ」
「慶長四年」十二月廿六日 龍伯(花押)

又八郎殿

993 「御文庫ニ番箱家久九卷中」「家久公御譜中ニ在之」

先日吉弘へ被進候兩使、則早船を以差上、今月十一日午刻到大坂着岸、其日兵庫殿從伏見大坂へ御下向候而、折節能被懸御目之通ニ候、上方之様子吉弘も可被仰入候間、使者則刻臼杵迄送申候、其元之御仕置相替事候者、御知せ奉憑候、御一到來次第可罷立と存、不致上洛在所ニ有之儀ニ候、兼亦京都へ之御使者、何時も此方迄被參候様ニ可被仰付候、可差上候、恐惶謹言、

「朱力キ」
「慶長四年」十二月廿八日 熊内藏允 直盛(花押)

羽少將様

人々御中

994 「御文庫拾七番箱十五卷中」「家久公御譜中ニ在之」

猶々此使、いつ方にても無相違、富隈迄可有御通候、以上、

態令啓上候、仍山口勘兵様重而被成御下向、庄内之御嘯可在之由候、然者源次郎殿若輩故、楚勿成御返事被申上候者、源次郎ために罷成間敷候之条、一人指下様子申度由、鞍馬之母儀の方より、伊那圖書様迄被申入候、就夫山口殿・貴老御兩所へ御狀被相付候、雖然拙子よりも貴所迄可申入段、從伊那圖書様被仰聞候之間申入候、尤從維新様可被仰下候へ共、ふと彼使下向仕候、拙子事當時大坂へ在之事候条、用愚札候、其御心得尤ニ候、恐惶謹言、

「朱力キ」
「慶長四年」極月晦日 休閑齋 旅庵(花押)

伊勢兵部少様 參人々御中

995 「義久公御譜中」

覚

一内府様御意趣條々在之事、付竹内大方可申候事、
一山口殿機嫌惡候事、

一爰元之儀申分候て、ちと色なをるやうに候事、
一勘兵衛尉殿其元へ越山之事、

一貴所此方へ御越之事、付山口殿意分有やうニ聞え候、
竹内へ御尋有へき事、

右之條々、竹内へくへしく御尋候て、可然存候事、

〔朱カキ〕
〔慶長四年十二月欵〕

『嶋津家藏書』

庄内軍戰場改日記

十一月十八日、於高城口分捕、

加久藤衆 小川藤七兵衛尉

川邊衆 垂三重之内ニ面分取仕候
岩下弓右衛門尉

垂越合戦衆

隈城衆 指宿十右衛門尉

蒲生衆 税所新三郎

同 蓑田源次

同 野村仲藏

同 黒田七兵衛尉

市來衆 垂取之衆
山田与一兵衛尉

同 川添四郎右衛門尉

蒲生衆 同 大井五兵衛尉

同 山下新次郎

拙齋者 宮竹久兵衛尉

同 圖書頭者肝付利作

同 酒瀬川弥藤兵衛尉

手負衆

市來衆 飯牟礼三吉

同 富永早太左衛門尉

隈城衆 山下源十郎

帖佐 野村中藏

同 宇治野五郎兵衛

同 竹内了介

肝付半兵衛 新保帯刀長

戦死

同 河俣平右衛門尉

同 窪左市

同 卯木弥平

同 肥後恵介

同 加久藤衆高橋監物允

同 帖佐衆 曾木源左衛門尉

同 川口孫次郎

同 圖書頭者山下久作

同 村山源介

同 鉄放疵 抱節倅者

同 鉄放

同 鉄放疵

同 川邊衆 大塚助三郎

同 濱之市來寺岐治部左衛門

飯野衆 一番二番之垂合戦仕候
久木山二兵衛尉

入来院之者

今日手負之覺之事

池田六郎三郎

田村曲介

同 南条利右衛門尉

拾月十六日

抱節組

分捕申候竹之内喜兵衛尉曾木衆

蒙疵候衆

黒葛原左京進くろな衆

同 蘭田六兵衛尉

同 丹生備前守同

蒙疵

抱節倅者二人

同 肝付伴兵衛尉

蒙疵候伊作衆 松田利右衛門尉

同 徳重源太左衛門尉

分取申候頭一 木原甚右衛門尉

已上

平田太郎左衛門尉組

戦死 鹿嶋助三郎

平田太郎左衛門尉倅者一人

手負 以上

十月十六日

須木衆手負

松下茂介

堀添平二郎

白尾弥兵衛尉

戦死人衆

山口外記

帖佐山田ノ者

飯野 山本吉左衛門尉

玉琳房

分捕之注文

須木衆類一 宗方大炊左衛門尉

加久藤衆類一 小河与三

同 類一 郡山二右衛門尉

同 類一 池雲吉六左衛門尉

高山衆 飯野 巖野吉右衛門尉

中原勝右衛門尉

以上頭數十一

拙齋一組之高名衆

高名之人數

帖佐 今村小監物允

逆瀬川勘允

眞方源六

笑柄小者 上野平八郎

鑓

濟藤甚介

戦死 小者

戦死 小者

戦死 小者

笑柄小者類一 平八

同 松本八郎

同 類一 帖佐山田衆類一

同 類一 松下西市丞

同 類一 長井助太郎

高山衆類一 牧瀬宮内左衛門尉

同 曾木源左衛門

湯田平次郎

手負之人數

坂本越後介

東次介

蓑田弥吉

酒生七郎

十月十七日

新八郎手守田口手負之事

馬場九七

百次衆 原口主水佑

數祢三拾郎者 手負候 蘭田助八郎

河邊衆

分捕 木原甚右衛門尉

守田口圖書頭内分捕手負之注文

頸一 圖師孫左衛門尉

手負 相良次郎左衛門尉

相次郎左衛門尉者志广介

鎌田拾兵衛尉

兒玉右介

出水三之允

岩切神介

同者 小吉

同者 小次郎

同者 新六

同者 右手負十七人

戰死 法元右近

頸一 毛利覺右衛門尉者

穆佐衆手負

二見平右衛門尉

以上

高城麓破別而辛勞仕候衆

萩原治左衛門尉

馬渡仲兵衛尉

二見喜六

野村甚右衛門尉

此外帖佐・蒲生・隈城・綾衆中も被立合候、

垂越之刻弓鉄放射通之人數

手火矢 河畑彦次郎

同者 染川才介

同者 山口久八郎

新納弥平太者助左衛門尉

宮路新允者 兵部左衛門尉

出水正介者 千六

分捕頸一 日高喜介

黒木覚介

鉄炮

二見平右衛門尉

大山十兵衛尉

平良早作

堀内賀兵衛尉

兒嶋新兵衛尉

伊集院肥前入道披官

垂三重取申候、二番目之垂より垣を越、つめ木をは

つし諸人入せ、

新原藤兵衛尉

弓 伊地知新九郎

池田新吉

霜月十九日

御供衆

三拾人 藤次郎

廿人 河上助七

拾人 川上源三郎

同 伊集院主右衛門尉

廿人 村田藤五郎

廿人 本田内藏允

廿五人 白濱次郎左衛門尉

六人 野添太郎右衛門尉

式人 窪平内左衛門尉

五人 同名与四郎

五人 上原源右衛門尉

七人 有馬次右衛門尉

五人 森喜右衛門尉

垂懸仕候

松下巳介

手火矢 大山久兵衛尉

同 寺師八郎

六拾人 敷祢三十郎

七人 鎌田孫太郎

同 桂藤五郎

拾五人 伊勢弥次郎

拾五人 別府大舍人助

三人 菱川源兵衛尉

式人 山下甚藏

三人 福嶋清右衛門尉

廿人 野村喜介

六人 伊地知治十郎

二人 有川源五郎

二人 築瀬弥介

五人 甕將右衛門尉

六人 小野四兵衛尉

百人 鎌田出雲守

田中老兵衛尉

霜月三日

懸手之人衆

三人 本田兵右衛門尉

二人 築瀬兵部少輔

二人 澁江九右衛門尉

二人 橋口勘左衛門尉

同 柏木茂介

三人 古後七郎右衛門尉

同 久富半五郎

同 谷山彦五郎

同 平田作介

壹人 藥丸老岐守

同 有川藏右衛門尉

壹人 福崎權介

二人 西原次介

壹人 上原八左衛門尉

合五十式人

七人 宗秋

飯牟礼權右衛門尉

築瀬七郎五郎

案内者二人

親子五人 赤崎丹後守

三人 曾木甚右衛門尉

二人 築瀬内藏助

壹人 弁官新右衛門尉

同 奈良原喜左衛門尉

壹人 田畑李兵衛尉

壹人 尾上平藏

二人 久永与三

二人 黒田賀兵衛尉

同 本田兵介

三人 有馬吉右衛門尉

同 宇都利兵衛尉

同 平田次右衛門尉

三人 窪七兵衛尉

富限衆

二人 永利典左衛門尉

同 木通志广丞

同 野村狩野介

二人 有川惣左衛門尉

三人 浦川勝八

二人 河村銀兵衛尉

同 鎌田弥藏

二人 篠原甚左衛門尉

宍人 岩切与兵衛尉

同 徳田少左衛門尉

同 奈良原狩野介

同 同名源十郎

栗村衆 五人 供二人

かせ田衆 十人 同三人

同 坂本次郎兵衛尉

同 染河李左衛門尉

田布せ衆十五人 同五人

伊集院衆 五人 同二人

同 竹下彦八郎

三人 有川仲右衛門

かのや衆 十人 同五人

日置衆 五人 同二人

二人 同名中次郎

二人 野村安右衛門尉

串良衆 五人 同二人

佐土原衆 十人 同十人

同 永吉賀右衛門

三人 肥後主税助

合百七人

霜月三日

(霜月カ)
熊牛之中取衆

山田殿

二人 有川助兵衛尉

拾人 前田豊前守

主取 伊勢兵部少輔

山田殿

主取 伊集院半右衛門

六人 三原彦次郎

主取 本田助左衛門

谷山殿

主取 白濱平次郎

二人 阿多才兵衛尉

主取 村尾源左入道

八人 野村市右衛門

同 山田弥藏

三人 税所弥右衛門尉

五人 新納勘解由次官

八人 野村市右衛門

同 河上七郎次郎

二人 川崎善七

五人 二渡次兵衛尉

同 藺田清左衛門

同 師子目監介

主取 山内市兵衛尉

三人 長谷場越前守

三人 鈴木猪介

宍人 外山五郎右衛門尉

一人 篠原勝右衛門尉

五人 連長坊

三人 関壯右衛門尉

二人 前原隠岐守

宍人 上原太郎次郎

同 市成佐介

三人 堀四郎左衛門尉

主取 鮫嶋与五郎

二十人 種子嶋殿

三人 八木民部左衛門尉

三人 肥後内膳正

五人 桃山太郎三郎

人衆二人 山内孫七郎

御留守御番衆

二人 岡村次兵衛尉

市來石見入道

長野六兵衛尉

二十人 日置衆

三拾五人 佐多殿人衆

本番衆

伊集院衆

野村宮内少輔

市成左介

長田源左衛門尉

伊集院藏人

川上五郎兵衛尉

手負衆

大窪源左衛門尉

古後七郎右衛門尉

志和知 栗野助太郎

同 大迫五郎左衛門尉

貴嶋采女正

大村与左衛門尉

同 吐師助太郎

同 上原長介

小番衆

伊地知四郎兵衛尉

同 赤崎助次郎

高城 三石勝七

御使番衆

尾上式左衛門尉

城 鯨嶋四右衛門尉

高城 大迫助三郎

伊尻太郎五郎

上村三七

志和知 折田孫四郎

志和知 車田弥介

外廻見廻衆

梁瀬二左衛門尉

右之手負の遺衆

比志島宮内少輔者

詰衆

柏木茂介

和野村久介

大迫弥兵衛尉

菱刈源兵衛尉

拔水吉右衛門尉

市來主殿助

吉加江助次郎

梁瀬兵右衛門尉

本田少五郎

中山三郎四郎

長田主殿助

正月三日夜

小林衆

正月十八日

黒江喜右衛門尉

去拾六日、於高城口弓鉄放被仕候人數、

鉄放 脇本五兵衛尉

同 押川内藏拯

同 征矢射通

同 税所平右衛門尉

同 町衆 谷村舎人助

同 上村後藤兵衛尉

同 榎崎九郎三郎

同 黒葛原左京

同 同弥九郎

同 別府藤内左

同 大川平助右衛門尉

同 税所弥平次

同 池山助右衛門尉

同 藏岡彦左衛門尉

同 溝谷早右衛門尉

同 平田采女正

弓 富満源太左

弓 加藤掃部助

藏岡衆

弓 瀬戸口三郎二郎

手負衆

合拾老人

税所平右衛門尉

同 同弥平次

慶長五

正月拾九日

中尔物介(花押)

同 池山助右衛門尉

同 緒方伊右衛門尉

正月十六日於志和地口合戦弓鉄放射通人數之事

伊集院肥前入道披官

同 石塚藤太左衛門尉

同 佐武勝左衛門尉

合戦 牧仲左衛門尉

同 松下久介

同 有馬勝兵衛尉

同 松本与右衛門尉

同 鉄放被ニケ所 老岐作内

弓射通 伊地知新九郎

同 東郷雅樂助

同 田中南右衛門尉

鉄放射通高城口ニテ 池田新吉

通高城口ニテ 折田長吉

竹内織部佐小者手負候、主殿

丹生備前守小者手負候、金六

同射通矢疵 胡广賀野新三郎

同射通高城口ニテ 小牟田甚五左衛門尉

伊作衆同射通高城口ニテ 関河甚右衛門尉

源次郎殿衆

同 小野六兵衛尉

以上

同 細江權左衛門尉

同 八代万左衛門尉

藏岡衆

同 戦死 河野孫兵衛尉

手負 東八郎兵衛尉

篠原兵部左衛門尉

鑓衆 久富木宮内左衛門尉

同 長崎次兵衛尉

同 左右七

椋山内藏丞内七藏

藏岡あしかる

手負 又次郎

同 三郎五郎

同 眞堯

有田兼手負 源介

戦死 千右衛門

同 三右衛門

同 斧淵拾兵衛尉

戦死 萩原彦八郎

戦死 溝口惣右衛門尉

同 齋藤与五郎

同 高原衆

高城口にて 高名 馬渡右近

同所 高名 横山助六

志和知にて 志和知 鉄炮症 大牟田五左衛門尉

慶五

正月十六日

浦生

野のミ谷合戦衆

手負 富山勘解由次官

分取 窪田弥左衛門尉

刀 中嶋清太郎

射通の弓衆

有川權右衛門尉

麻生与吉

牧山賀兵衛尉

射通の鉄炮衆

敷祢市左衛門尉

十二月八日

綾衆中

手負衆

しわちロにて鉄炮疵一ヶ所 四位六右衛門尉

同口にて刀疵一ヶ所 安藤權之允

しわちロニ而刀打被申候 精松作介

池袋勘右衛門尉

有馬源四郎

かたなうち切くそく 大井五兵衛尉

刀 構口源四郎

牧瀬源左衛門尉

海田源介

しわちロにてやり被仕候刀疵一ヶ所 二方主水介

右同 終山善兵衛尉

高城口にて鉄放疵一ヶ所 貳方与左衛門尉

岩本弥吉

右之拾耆人者、高城口にてたれ二重とり破、板城戸ニ

相付別而辛勞被仕候、

以上

慶五

正月十七日

吉利左右衛門尉者

手負衆

しわらひにて刀疵三ヶ所
松本金介

衆中

高城口にて矢疵一ヶ所
實吉清介

川上助七者

手負衆

渡邊丹波介

正月拾六日すく志和知口にて、

以上

志和地口にて合戦

右馬頭者

初之鐘 海老原源右衛門尉

鐘 川上六郎兵衛

鐘合三人 桃山清右衛門尉

鐘 肝付喜左衛門

刀討鐘 調所八兵衛

同分捕仕候刀疵一ヶ所

川崎善兵衛尉

刀討 伊作四郎兵衛

小川伴介 中村九兵衛

うち申候 追つめ 本田甚兵衛

手負

刀疵 肝付平右衛門尉

鐘疵 加世田仲兵衛

鉄炮疵 添田長介

町田助兵衛者 鉄炮疵二ヶ所 助作

戦死

桑波田藤太兵衛

海老原源右衛門者 佐介

正月十九日

□

刀討 上田才之允

高城口ニ重田七允

て分捕 追つめにて 松本權兵衛

きりすて

刀疵 高野領兵衛

藤井談五左衛門

鉄炮疵 立山二介

三ヶ所 竹迫与兵衛者 仲介

997 「新納忠元勲功記」

一慶長四亥三月、此前 松齡様 琴月様御歸朝不被遊、

御留守中御勝利之爲御祈禱、看淳和尚と申僧へ法華千

部奉眞讀候様被仰付、加久藤御城下一本杉之本ニ本傳

庵と申菴を被相立、文祿三年より同五年迄ニ成就仕候
処、右通古今無比類被爲得御勝利、御歸朝被遊候ニ付、

此月爲御願成就供養塚御建立有之、御名代忠元相勳、其節爲法樂爲詠和歌ニ御座候、

はるかなる鶯の高ねの雲ならん御法の庭の花のけしきハ

返歌

君ならて心もつけし鶯の山雲を御法の花の色とは

同九日、於伏見御屋敷 琴月様伊集院幸侃を御茶室に被爲召、御手討被遊候、然処石田治部少輔三成立腹ニ而、太閤御直ニ御朱印迄爲被下者を、御届も不被爲在被爲誅候事を申立、高雄長谷寺ニ御動座爲被遊事御元ニ相聞得候節、閏三月初日、忠元并鎌田出雲守政近・比志嶋紀伊守國貞・山田越前守理安・平田太郎左衛門増宗・種子嶋左近將監久時・新納休閑齋旅庵・伊集院下野守抱節・町田出羽入道存松・樺山權左衛門久高・桂太郎兵衛忠防連判を以、伊勢兵部少輔貞昌迄右之御左右奉承知、皆共驚入仕合、乍去幸侃罪科之事ハ、治部少輔連々御存ニ候間、定而被聞召分々、御都合能可被爲成与、早々御吉左右奉待罷在候間、此段宜預御披露旨、爲奉捧一翰由、又同三日、忠元并比志嶋紀伊守國貞・喜入大炊助久正・休閑旅庵・伊集院下野入道

抱節・町田出羽入道存松・北郷左衛門尉三久・相良新右衛門長辰・鎌田出雲守政近・山田越前守入道理安・平田太郎左衛門尉増宗・樺山權左衛門久高・桂太郎兵衛尉忠詮・上井甚五郎里兼連判を以、此度幸侃御成敗ニ付、御談合等於御隱蜜事者毛頭洩申間敷、況彼子伊集院源次郎を始として、右縁者親類雖有之、曾以庄内江通用仕間敷旨、起請文書調、田代神介・阿多甚左衛門宛ニして、貫明様御方江奉拜呈之、左候処都城ニも右之左右相聞得、源次郎忠貞拾貳之外壘を取構、其身ハ都城ニ楯籠、同廿日比より庄内・福山之通路を差塞キ、致謀叛聞得有之、此夏 貫明様より忠元并山田越前入道理安江被仰聞、各人衆召列、庄内境諸所警固之手配等仕置、早打を以伏見江被爲及御注進、本より伏見江者幸侃妻并次男小傳次・三男三郎五郎・四男千次等爲人質罷在候間、川田大膳亮國鏡・吉利左右衛門を以、幸侃逆心ニ付被爲誅伐、妻子無御構旨被仰渡、屍之儀者伊地知甚左衛門重辰幸領ニて被爲届候処、幸侃妻大ニ立腹、泪も不流、皆々嶋津屋形ニ可切入と致下知、子共召列鞍馬山ニ走入、其後加藤清正ニ訴企謀叛事相聞得、則本田助允親貞・平田五兵衛・宇都藤左

衛門宗昌・細田覚右衛門・大井七右衛門等ニ見聞被仰付、何れも新納旅庵相付誓文差上、左候折柄庄内籠城之事相達、琴月様 松齡様と被仰談、權現様江被仰上候処、同五月、琴月様御暇被爲賜、早々御下國、此頃ニ候哉、忠元人質も蒙御免、嫡孫忠光爲罷下由、御供之事ハ分明相知不申候、同六月、忠元等人衆召列出陣、須木地頭村尾源左衛門重候入道笑栖人衆召列、同廿一日、須木を打立、酉刻高崎ニ相着、諸侍と談合いたし、其夜直ニ出立、廿二日、早朝皆々庄内に打入、酉刻東霧嶋に參着、佐土原城主嶋津中務太輔忠豊も來着、何れも此に陣屋取立、忠元等諸侍と評定仕、同廿三日寅刻より打立、忠豊ハ北郷家衆本田弥左衛門・関屋豊前・岩滿利右衛門を案内者ニ被召列、須木地頭村尾笑栖者筑地内藏介乙守・筑前釘村源左衛門を案内ニ召列、高原地頭入來院又六重時、紙屋地頭相良新右衛門長泰、倉岡地頭丹生備前守信房等、諸縣之將士と山田之新城ニ押寄せ、皆々城中ニ攻入、敵方ニ有名中條右近將監・井畔平左衛門等を討捕爲申由、忠元も北郷衆森淡路・多田伊賀・塚田式部を案内ニ召列、薩州之諸侍と相共ニ、山田之本城野頭に當る荒神か尾より攻

登り、城中ニ打入碎手相戰、其時忠元七十四歳之老武者ニて、塵取ニ打乘、先一番ニ昇進せ、諸卒ニ加下知、何れも盡粉骨、城之守將長崎休兵衛尉・同加番中村與左衛門等を初として、於大手口討取之、彼是合而數百人討捕、其日巳刻計ニ者遂爲乘取由、同廿二日、恒吉城ニも串良地頭嶋津圖書頭忠長、志布志地頭樺山權左衛門尉久高、松山地頭栢原將監等押寄、爲相攻由御座候、左候処同七月三日、琴月様より忠元江御書被成下、今度其表江罷立、別而之軍勞御祝着被思召上候、老躰之在陣大儀ニ者乍思召、御氣遣之御時節ニて、近日御出馬可被遊、今少之事情ニ付、其間相詰罷在、各無越度様可申付事肝要ニ御頼思召趣被仰下、此時分從權現様 貫明様江御使者被成下、何分ニも庄内之儀、御存慮次第御談合可被成旨爲被仰下由ニて、同廿八日、貫明様より忠元并入來院又六重時・平田太郎左衛門増宗江御書被成下、其地在番辛勞無申計、此間より御無音御所存之前ニ候、御使者下着ニて右之向ニ被仰下候間、即時勝利之儀弥廻賢慮事專一被思召上趣被仰下、此月小西作右衛門より爲御加勢、鉄炮衆三百人被差遣、大口迄來着、同十一日、琴月様より以御書被謝之、

同八月五日、松齡様伏見より忠元江御書被成下、其後御無音御心外ニ被思召上候、京都御静謐、其表源次郎于今楯籠、先度ハ山田城爲被攻崩由珍重被思召上、當時者少將様御在國侯間、別而御奉公可仕儀肝要ニ被思召上、且忠増無恙御奉公、御無人ニ而昼夜辛勞仕候事迄も被仰下、同廿日、恒吉城落去被爲取之、同九月九日、忠元加下知、人衆敵地ニ差遣當毛爲取取、同日、又差遣、都城近邊一里計之間當毛惣様爲取取候処、敵兵走出鉄炮手強打懸、去共無何事候処、野之三谷・高城・志和知三城之賊徒續來合戦ニ成立、此方人衆相働、悉野之三谷迄追込、前垂三重程取敗、敵式三拾人討取、味方ニも六七人戦死爲仕由、此比高鍋城主秋月長門守種、日州福嶋迄出張被爲居、庄内表之事爲可被聞せ、同十一日、忠元預書翰、則右之趣返書爲遣由、同廿九日、琴月様庄内ニ御出馬、前件山田城爲被乘取時分、上野隼人惠則・逆瀬川豊前等爲奉行、新敷御修補被召加、御本陣ニ被爲立、又森田御陣も御普請有之、同十月五日と目、又御陣を森田に被爲移、志和地城を被爲相囲、同十二月四日、城外ニ間之垣を結廻し、堀も爲堀、打菱を蒔、仕寄を付、兵糧之運送被爲相絶

候由、此日松齡様伏見より忠元江御書被成下、就庄内御行之儀ニ昼夜相詰致在番由、寒中極老之出陣誠ニ前代未聞、可被仰御詞も不被爲在、不被爲及被仰付御事候得共、弥可廻賢慮表此時と被思召上趣、且忠増奉公少も無油断、然共疾病ニテ騎馬御供難仕、早竟貴所若年之比若衆數寄ニテ多人數ニ迷惑爲仕掛報ひ早も廻來、於今者可爲後悔と御戲言迄被仰下、同八日、賊等兵を安永口ニ伏置、山田城之兵を爲引躰、老功之者共見取可成差留候得共、若手人衆驅出百人計及戰死候由、此時分入田左馬入道并其子孫右衛門氏泰繩瀬迄參越、先年忠元等ニ相付、於豊後爲抽忠人ニテ、勤番之場所より預使僧趣有之、同十七日、忠元相良長泰と成行御老中迄可遂披露旨返簡爲仕由、同廿四日、權現様より重而庄内和降之御調儀として、山口勘兵衛尉直友被差下、貫明様琴月様御宛之御判物被爲賜、右ニ付同廿五日、松齡様樺山久高江茂御賜書ニテ、諸法度無油断可被申付、於其儀者御勝利案中候趣被仰下、左候而直友彼表打立爲被爲下向由御座候、

一此年迄忠元人質諸大名同様常詰ニ在京爲仕、天正十五亥年より都合拾三年、其内忠元者勿論松齡様よりも

段々被爲盡御手御願爲被下事候得共、始終 太閤御許
容無之、薨去後前件之通、初而忠元ニ御暇爲被下由御
座候、

(本文、底本ニ欠ク、鹿兒島県立図書館本ニヨリ補フ)

義久公

義弘公 慶長五年 自正月
至三月

家久公

後編 舊記雜錄 卷四十八

998 慶長五年庚子

正月十六日、河内五郎兵衛志和地にて戦死・桑畑飛彈・海老原

源右衛門内之者佐介・柚木崎平右衛門正次十六、

二月十四日、迫田弓左衛門弓或休、北郷氏臣、山の口城を攻

下の列、栗山喜兵衛良親同上、長井彌兵衛同上、瀬戸口石

見或瀬戸山、小窪善右衛門、以下の文名、迫田・瀬戸山か次に

本源兵衛北郷氏臣、兒玉又右衛門・山内藤左衛門・長友彌

左衛門以上三人も北郷氏臣也、後藤孫八亦北郷

村田與吉郎以下庄内戦死にて、指宿雅樂助・片野坂休

内佐多、赤崎源五郎同、野村藤藏豊久坂本半兵衛同、黒

木勘左衛門同、前田大藏兵衛同、野田覺内・權左衛門・

竹八・與八・理助・主馬・中間五人・次郎五郎・源兵

衛・中間二人・太郎五郎・夫丸三人・三郎二郎・源藤

・孫六・次郎五郎・藤内・源七左衛門・彌二郎・彌七

・源太・彌太・彦二郎・太郎九郎・源七左衛門・彦八

左衛門・平六・甚八・平五・助兵衛・彌六・市左衛門

・甚左衛門・與助・十右衛門・五藤左衛門・茂助・彦

助・小左衛門・彌市・主水左衛門・彦八郎・仲左衛門

・金助・仲兵衛・孫兵衛・弥七郎・今助・喜八郎・左

助・助太・源五郎・助七・藤弥・市右衛門・太郎三郎

・太郎三郎・五七・又左衛門・夫丸三人・大藏・二郎

右衛門・加藤・鬼兵衛・小藏・彦太郎・五郎三郎・小

五郎・彌藏・才藏・藤太・彌四郎・平十郎・小者一人

・七右衛門・勘助・三郎・又兵衛・竹八・與五郎・源

六・迫九郎・助六・助五郎・與二郎・彦十郎・弓藏・

清二郎・甚左衛門・助左衛門・孫四郎・八兵衛・承林

・五藤・甚兵衛・與兵衛・彌九郎・弥三郎・與一左衛

門・今右衛門・千七・藤内・源兵衛・早二郎・助左衛

門・十郎左衛門以上、無姓氏も戦亡帳にあれとも、其戦場及び

まつ考を

年月なし、只庄内戦死の末にみゆれば、此に置

「御文庫拾七番箱十五卷中」「家久公御譜中ニ在之」

「北郷久村時久四男譜中」

慶長五年、忠能安堵莊内本領、依之與勝岡・石山高城之内、

采地三千石于久村、

久村所知采地三千石、其課役忠能総高之内也、

「義久公御譜中」

「案文在肝付半兵衛家臣前田三左衛門」

起請文前書之事

一 奉謹言上、今度幸侃 御成敗ニ付而、三郎五郎無分別之格護之様子承、奉驚存候、彼進退之儀者、可爲御意次第候事、

一 古彈正忠爲 御奉公之一筋、家之儀無断絶様ニ、乍恐

奉頼存候事、

一 富之限 鹿兒嶋 帖佐三方之御奉公、弥々無別儀可抽

忠貞候、自然相背族等於在之者、即可申上候、乍勿論、

縦雖爲親子兄弟縁者知音、同意申間敷候事、

右之旨、若於爲申上者、

「朱力半」

「慶長五年」

「御文庫四拾八番箱中」「義久公御譜中正文有之トアリ」

猶以羽兵御内旅庵方も書狀遣候間、御覽候て可有

御通候、以上、

新春之御慶目出度申納候、仍旧冬ハ爲御歳暮、内府へ御

小袖被進候、一段祝着之旨、以直書被申候、私へも御小

袖一重贈被下候、御懇志之段、誠以忝候、然者此西郷弥

左衛門・山口勘兵へ・伊勢兵部方へ遣候、其元も富限迄

無吳儀御送候而可被下候、貴殿様御領分計御送候而も、

其先不罷成候由申候間、一人を御指添候而、無相違參着

候様ニ頼入存候、維新公も書狀可被進候へとも、從大

坂直ニ參候而、無其儀候、恐惶謹言、

「朱力半」

「慶長五年」

正月三日

伊那圖書頭

令成(花押)

嶋津中書様

人々中

急度申上候、夕寅刻敵致大働、あひの牆ニ懸、番手之薄

所より少々取入候を、城内へ追入、即六人討捕、其外之

敵致敗軍、しちへ可相籠用意之兵糧共過分ニ追落候、

夜中之儀候間、さきへ見分不申候て、人數不付立、不

得大利候事殘多候、城中へ結句人數を追入、兵糧をハ追

落候間、弥よハリ可申と存候、猶相替儀候へ、可申上候、誠惶敬白、

正月五日

又八郎

忠恒(花押)

〔宛ナシ〕

1003 「家久公御譜中」

慶長五年庚子正月四日、夜暗敵兵含枚逼來、破志和池城外間垣、敵兵少少糧米亦入城裏也、蓋以守牆邊我之兵等有怠慢乎、

1004 「御文庫四拾八番箱義久卷中」家久公御譜中ニ在之

謹當春之御吉慶、重疊目出度候、仍頃者定而可爲越着かと相待候処、從境目中來儀共候哉、就夫一兩日者可被聞合之由、尤肝要候、猶巨細之旨趣、本田助左衛門尉へ申合候之条、不能細筆候、恐々謹言、

〔朱カキ〕

「慶長五年」正月六日

(家久)
又八郎殿

(義久)
龍伯(花押)

1005 「義弘公御譜中」

「正文在仁禮左近」

已上

出水表江在番之儀、別而辛勞之至候、就其城普請之儀、隨分念を入、毎日無懈怠在番之者共ニ申付、肝要候、無餘儀普請之時者、太田吉兵衛丞・白坂七右衛門入兩人へ令熟談、諸在郷へ可申付候、惣別百姓猥ニ召遣候事、一切停止之由申聞候之条、其心得尤候、謹言、

〔朱カキ〕

「慶長五年」正月七日

(義弘)
維新(花押)

宮原左近入道殿

1006 「家久公御譜中」

猶以爰もと静謐御座候間、可御心安候、北國表之儀者、未相濟候、

態申入候、去極月八日ニ、御人數少損候由承、無御心元存候処、此方にて御家中衆へ相尋申候へ、又小者躰之者にて御座候よし承候、左様候哉、先無御心元存、以飛脚申入候、委本田源右衛門殿爰元之躰可有御物語候間、書狀ニハ懇不申入候、何様駈走、來月者我等も可罷下之間、其刻可申上候、何にても御いそぎの御用候て、飛脚以下御上せ上候、白杵へ可被遣候、美作在之儀候間可申

〔義弘公御譜中〕

〔上色〕
義久様
參人々御中

小西攝津守
行長

〔御文庫ニ番箱義久公ニ卷中〕「義久公御譜中正文有之トアリ」

改年之御吉慶重疊申納候、猶以不可有際限候、爲此等之御祝儀、御太刀一腰・御馬一疋令進獻候、拙者事、一兩日之間致上洛候、何様下國之刻、必致祗候相積御礼可申述候、猶此使可申上候、恐惶謹言、

〔御譜ニ慶長五年秋、朱カキ〕
正月十一日

行長(花押)

義久様
參人々御中

付候、將亦兵庫様一段と御息災候、殊 内府様御入魂被成御前能候て、我等式迄大慶存候、猶本田源右衛門尉殿御難談可在之間、早々申上候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長五年秋〕
正月九日

太田飛騨守
吉(花押)

羽柴少將様
〔家心〕
人々御中

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在之」

旧冬極月十一日之御狀、同廿八日相届、委細披見得其意候、此元之様子者、本田源右衛門尉へ相含候て指下候条、不及書載候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長五年秋〕正月十四日

維新(花押)

追而薦五令進覽候、表御音信計候、以上、

於改年之御慶者申事旧候、猶以珍重存候、隨而拙者事、早々可罷上覚悟候處、最前以來如申談候、伊集院儀、彼表一左右次第可致出陳旨、從 内府様も被 仰付候、私ニも隨分御馳走申度覚悟候、然者寺志厂、重而得御意子細在之由候て上洛候之間、彼一左右承、何れの道ニも其覚悟可仕と存承合、在國申事候、其元被仰談様子可示預事可忝候、山勘兵頃下向候て、人御拵之由候、難相調やうに、又八郎殿被仰越候、いかゞ可有之候哉、切々申談候、替儀候へ、可申入候、委細猶此者口上ニ申合候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長五年〕
正月十一日

〔立花〕
羽左近
親成(花押)

維新様
人々御中

又八郎殿

1010 「公上」家久公御譜中ニ在之

追而今度存松へ御傳言之通、具承候、こと更爲御音信、

銀子五枚并長刀一振送給候、到遠方御懇情之段、祝着不
少候、仍條々本田源右衛門尉へ相含指下候間、不能一二
候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長五年秋〕正月十四日

維新(花押)

又八郎殿

1011 「御文庫四拾八番箱義久卷中」義久公御譜中正文有之トアリ

當歳之祝言珍重々々、仍去年以來者、庄内表へ不慮之儀
共出合候、然者忠恒以分別、志和知と申城へ被致着陳、
頃者敵及折角之由候間、近日中可得案利候、猶吉左右追
々可申候、次者乍輕微、縮一端進之候、謹補祝意計候、

佳事、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長五年〕正月十五日

龍伯 御判ナシ

〔宛切ル、〕

1012 「家久公御譜中」

正月十六日、志和池城中敵兵出城門追合戦、此時我兵得
勝利有斬獲也、

1013 「右馬頭以久譜中」

慶長五年庚子正月十六日、志和地城十二之砦之、守兵出城而戦、
於是以久家臣之中、有或接敵合鎗、或得強敵之首級者、
其外勇士等盡筋力挑戦、遂撃破敵軍追入城、時味方士卒
多被傷、又戦死者居多也、

1014 「御文庫四拾八番箱中」家久公御譜中ニ在之

猶々先日も無御越故、山口殿其元へ御越着候、此度
も其分ニ候てハ如何候間、被成御談合、其御用意肝
心候、將又其境御用心專一候、必定あひのかきを可
敗之由申候間、賢慮之儀可被仰渡事尤候、

急度申候、山勘兵殿去十三日庄内へ被成御越、十五日夜
ニ入歸宅にて候、然者到源二郎被仰渡之段、無異儀御意
次第と御請申候、依之山口殿其表へ可有御越之由被仰候
を、種々申理相留候、扱者以飛脚右之旨可申之由候間、
此式候、然時者、貴所此方へ被成御越、様子可被聞召候、
自然於無御越者、山口殿其方へ可有越之由候、到時違變

1017

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在之」

元祿十四年巳八月廿三日

〔前後略此〕

〔筑後孫〕
兒玉四郎兵衛

1016

〔兒玉氏藏〕

一慶長四年、忠恒公庄内御出陣之砌致御供、伊集院源

次郎士渡邊茂右衛門与申者鏝ニ而仕留、諸事軍勞爲仕

由申傳候事、

慶長五年庚子、猶戌渡瀬、正月十九日、與攻志和知城奮
戰附城、實持槍及渡邊茂右衛門格闘克之、遂獲其首、乃
城中之勁兵也、繇是實相著名聲焉、

1015

〔兒玉筑後守傳〕

又八郎殿

龍伯(花押)

候へはいかゝニ候之条、眞儀可承候、若山口殿於御越者、
調等之儀、自利安前圖書頭へ可申之旨被聞食合、其御分
別尤候、恐々謹言、

〔采カキ〕
〔慶長五年〕正月十七日

1018

〔御文庫二番箱家久公九卷中〕「家久公御譜中ニ在之」

又八郎殿

〔采カキ〕
〔慶長五年〕正月十九日
維新(花押)

猶々日本・大明和平之儀者、前代未聞之儀候間、能
々可被入御念候、彼船ニ可乘人衆被相改、可然之様
ニ可被仰付候、以上、
遮而令申候、かうらいそてんニおいて被請取候大明人質
ういひん事、當春薩州表可被爲渡唐之由被仰出、則
内府様以御下知大明へ被遣之書以下、たい長老被相調候
間進入候、加判候て可然候、於様子者本田源右衛門尉へ
相合候間、被聞食届、諸事丈夫ニ被仰付尤候、雖不及申
候、且者日本・大明之覺、且者公儀可被仰付儀候間、旁
以不輕儀共ニ候、能々可被入御念候、恐々謹言、

猶々改候者、則參候て可申述候へ共、自内府様御
下知可有之由候間、各悉之申事候、ぬけかけ之様ニ
候へハ、いかゝと存無其儀候、何も依趣、不計以參
可遂御見廻候、以上、

改年之御慶珍重々々、猶以不可有際限候、仍御太刀一腰
・馬代三百疋令進覽候、誠表御祝言計候、然者改候而、

御左右無之候、其元御様子被仰聞度候、山口勘兵衛方下

向之由、旧冬進之使ニ被仰越候、内府様御下知之通、

いかゞ承度候、寺志广守所ヨリも頃預書狀候、山口勘兵

一左右被相待躰と相聞へ申候、拙者式事も御一左右承候

までハ、上洛も相延干要之通被申越候、萬端様子銘々承

度存候、猶追々可得御意候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長五年〕

正月廿日

羽柴左近大夫

親成(花押)

羽薩少將様

人々御中

1019

〔御文庫二番箱家久公三卷中〕「家久公御譜中正文在卷本トアリ」

尚々上方珍事候者、追々可申述候、以上、

追而申入候、書狀調候て使者差立候処、從寺志广預書狀

候、山勘兵被差下候、彼一左右之上を以、重々又被仰出

旨も可有之候、御人數被遣儀も其上ニての事たるへく候

間、早々上洛仕肝要之通被申越候、内々御見廻可申と存

候処、右之分候間、急度上洛之覚悟ニ候、寺志广致相談

御人數入儀候ハ、則可罷下候、其地様子後々被仰知事

可忝候、恐惶謹言、

立左近

〔朱カキ〕
〔慶長五年〕正月廿日

薩少將様
人々御中

親成(花押)

1020

〔御文庫拾七番箱十五卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

追而被仰下御狀之趣、具ニ得其意候、扱者山口勘兵衛尉

殿其表へ御越被成、就其内府様別而御懇志之儀共被仰

候哉、尤目出候、將亦庄内弥よわりたる由、節々申來候

旨案中之儀と存事候、何様三日中ニ可致祇候候之條、其

節可得尊意候、右之通可然之様御披露所希候、恐々謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長五年〕

正月廿日

中務太輔

忠豊(花押)

伊勢兵部少輔殿

まいる御陣所

1021

『飯野満足寺文書』

日州諸縣郡眞幸院 白鳥領目錄

加久藤

湯田村之内

高七拾六石六斗式升四合三夕九才

飯野

正原村

之内

畠田村

高拾八石六斗九升五合五夕六才但本領

加久藤

川北村之内

高四拾八石式斗三合九夕八才但本領

都合百四拾三石五斗二升三合九夕三才但公役免許

慶長五年
正月廿一日

忠恒(花押)

白鳥山金剛乘院光巖

「家久公御譜中、正文在白鳥山トアリ」

「御文庫四拾八番箱中」家久公御譜中ニ在リ

好便之条令啓候、仍貴所當年之御星供中性院頼存候て致

執行、御札護進之候、可被成頂戴候、兼又庄内之儀如何

候哉、當年者於山田可有越年之様に其聞候き、其分ニ候

つる哉、寒中に陣誠御辛勞之至候、山口勘兵衛尉殿御下

向以後、御左右も無之候、承度存計候、猶追々可申承候、

恐々謹言、

「朱カキ」
慶長五年

正月廿三日

維新(花押)

又八郎殿

「御文庫拾七番箱十五卷中」家久公御譜中ニ在リ

猶々此等之儀共、能様ニ御取成たのミ存候、以上、

態申入候、仍拙者事、一昨日此表へ致參陣候、先々此等

之儀共、貴所まで申達候、可然様ニ御取成被成候て可給

候、兼又其地之御様子御報ニ可示預候、此堺相替儀無之、

是又爲御存知候、尚期後首候、恐々謹言、

「朱カキ」

慶長五年

正月廿五日

中務太

忠豊(花押)

伊勢兵部少輔殿

(貞昌)
御宿所

「御文庫拾七番箱十五卷中」

起請文前書之夏

一御前御ために於可罷成儀者、縦御氣にちかひ候共、或

ハ存寄、或者使など、ありのまゝ可申上候事、

一いかやうの御使を申候共、少も私之儀申上ましく候、

承たるおもむきを、何時も可申上候事、

一私之遺恨有之とて、人のよきをかすめ、一言も讒言申

ましき事、

一人の頼にまよひ最賈いたし、あしきひとをよきに取成

申ましき事、

一親類・わか身の上、急こを申ましき事、

右条々僞於申者、

▽奉始上梵天帝釋四大天王、下堅牢地神、惣者日本國中六

十余州大小神祇、別者薩州鎮守開門正一位 新田八幡大

菩薩 大隅正八幡宮 霧嶋白鳥兩大權現 日向妻万五社

大明神、殊者鹿兒嶋諏方上下大明神 稻荷 戸柱 若宮

春日大明神 愛岩山大權現 大天狗 小天狗 天滿大自

在天神御部類眷屬(ヨメズ)神爵實爵蒙身上、於現世(考)受白癩

黑癩之大重病、於當來(ヨメズ)受諸人誹謗可墮在無間獄者也、

仍起請如件、△

慶長五年

正月廿六日

伊勢兵部少輔

貞昌(花押)

別府舍人佐

景秋(花押)

「宛ナシ」

「御文庫廿三番箱」義弘公御譜中案文在卷本トアリ」

日本 薩州太守源義弘 源忠恒

寺澤志摩守正成

謹啓

大明總理軍務都指揮茅老爺

幕下

一 去歲己亥年夏五月、呈愚翰傳達也否、至今未見回章、

如本邦者、

大相國大閤戊戌秋下世矣、 内大臣源家康公受

遺命輔佐

令嗣秀賴公、治之以文、施之以武、故國豐民安也、

抑

皇朝之質子四官人淹留于

日本者垂三霜、久絕音問、則朝鮮

本邦兩國和平背約叛盟者決矣、可加刑戮者理之常也、

雖然

内大臣不忍無大罪而誅殺、來朝鮮大臣於

日本、而不結堅盟者罪在朝鮮、蓋

諸老爺所命耶、於質子之

四官人者、似無咎、以故寬宥之施仁政不誅、則作囚

人亦有何益乎、不若送

本國、安其心、即命舟人飛歸帆於春風、兩國和交之

大事、各非不欲、因受

大明皇帝勅言經年月、則今歲來歲者可待之、

本邦朝鮮作和平、則到

皇朝亦如前規以

金印勘合可作往返、猶豫而及壬寅年、諸將再可超滄

溟、加之、浮兵船於福建浙江、可却縣邑也、夫兵者、

雖凶器有所當用、有所當戢、至可用之時、雖聖人不能以戢、

大閣歸泉下、是可戢之日也、朝鮮變盟約、則是可用之日也、欲作和交以兩年爲限、若曆及壬寅、朝鮮城中可屠國破家誅戮人民、勿噬臍、

一 大明土商數年在

日本、娶婦女生子孫、忘還鄉志、剩依知

貴國風度撓鈎搭索、奪

皇明商船殺人取貨財、太以不義也、寔可惡也、

內大臣聞之、雖可誅罰遠方異域人也、是亦下可還

大明之令、故賊徒二十人送之、刑罰輕重可隨

國法也、

一 麾下所出之質子乞副

本邦之一士、故差鳥原宗安、應質人所求、兼爲船上

衛護、自劉老爺・陳老爺所來之質子者、送朝鮮令歸

大明、

本朝國風民俗所留止之

官人、各々見聞焉、不及縷陳也、不宣、

〔朱力半〕慶長五年
庚子孟正二十有七日

忠恒在判

正成在判

義弘在判

1026 〔義久公譜中〕

一慶長五年正月廿七日、大明質人滑濱歸帆、慕之詠之、

〔御文書方ニ有之〕

かりそめのなさけとしるもまたあハむ

事をししたふもろこしの人

1027 〔義弘公御譜中〕

〔正文在加治木衆白坂與一左衛門〕

猶々御樽代式百疋、御慰勸之至候、以上、

當年之御慶、千々萬々不可有盡期候、仍御祈禱之御札頂戴、大慶此事ニ候、高麗已來到京都、諸事存分無殘所候、

偏御祈念之故迄ニ候、弥奉仰 御山之冥鑑之外、無他事

候、猶普門院可有演說候間、不能一二候、恐々謹言、

〔朱力半〕慶長五年正月廿八日 義弘(花押)

霧嶋山

座主御房

1028 〔末吉松元權兵衛尉覺書〕

一慶長五年正月廿八日ニ、庄内山之口江日中ニ三度追籠

共候、たれごし屏越共被成候、其時矢疵一ヶ所負申候、

其立相、調所丹後守殿・澗田有右衛門尉殿、

「義弘公御譜中」

「正文有之」

花漸盛 咲初て心のまゝの花の色

まちうるけふの詠うれしも

維新

花漸盛 もろこしのよし野はいかにさくら花

やゝ咲つゝく四方の山の端

雅庸

花漸盛 咲出るかたへにまたき花の色ハ

さかりをしハしおしむとそみる

忠續

花漸盛 あすはなを咲も残らし昨日まで

枝わく花のけふそれとなき

道澄

花漸盛 分てみんなおなしえなから咲さかぬ

ほとこそ花はさかりなりけれ

如言

花漸盛 風ふかぬ世をうる花の色そかに

けふかあすかのさかりをそしる

了齋

花漸盛 長閑なる花のあるしの心より

またきにみるもさかりと思ふ

元村

花漸盛 咲のこる花よをそかれかたえつゝ
みるにさかりのひさしかるへく

慶要

花漸盛 日暖風柔和氣天 白櫻初發色猶鮮

黄友賢

花漸盛 傾盃賞詠供詩興 不羨蘭亭梓澤筵

樹々得時花漸披 主賁乘興共言詩

等波

花漸盛 良辰美景只宜賞 風雨明朝捻不知

待得櫻梢漸次開 詩詞歌詠雅遊催

承兌

花漸盛 主人徳色入花否 春日呈祥僧風來

「朱力半」
「慶長五年歌」

「御文庫二番箱義弘公巻中」「家久公御譜中正文在巻本トアリ」

去極月廿九日之御狀、正月廿六日相届候、仍山口勘兵衛

尉殿無吳儀御下着之由、珍重之至候、然者庄内へ使者を

被指遣、其上をもて山勘兵衛御自身被相越、源二郎へ可有

對談之旨、山勘兵衛示給候、いつれの道にても貴所爲可

然之様、竜伯様へ被成御相談、可預御入魂之由、これ

を返事申候、爲御心得候、定此比者庄内之一儀可相濟歎

と存計候、早々御左右可承候、次しハちの城被取詰、あ

いのかき其外ニ大堀をほらせ、内場を少もかもい無之様

に念をいられ候由、尤存候、不及申候へ共、源二郎一着

無之間ハ、いかやうの儀をあり〜と申來候共、相構々、同心有間敷候、能く諸堺目之用心、陳中無緩之様可被仰付候、返々不可有御由断候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
慶長五年〕式月朔日 維新(花押)

又八郎殿

「御文庫四拾八番箱中」家久公御譜中ニ在之

猶々其元御談合之様子不存候て、如此さし出かましき儀共申入候段、乍慮外あまり〜愚老夜白心遣のミにて、斟酌をかへり見す申事ニ候、其元御吉左右追々待入候、兼又北國之儀、弓箭ニ相濟申候共、又御變ニ罷成候共、未相究之由申候、然者宮牟礼与左右衛門尉京にて紺搔けいこ仕候、其師匠の所にて、きんご様のほり并こさし、合而千本調させられ候由、宮牟礼申事ニ候、又此隣所にて、長宗我部殿大のほり・こさし用意之由申候、其外諸大名武具・兵具用意之由、巷説候、將又於越前諸大名兵粮用意させられ候由風聞候、かやうニ物沙汰有之時者、心遣之世上にて候欤、乍重言庄内之儀、日とひ〜とおしうつり、はか不行事咲止ニ存候、能く御しあん此時候、

已上、

追而令申候、

一庄内之儀、山口勘兵衛尉殿御變之由如何候、相究候哉、無御心元候、當時者 内府様種々被添御心、何欤と被仰儀共ニ候、然所ニ庄内變之儀ニ付而、わかき人衆始末之思唯無之、手前つよだてをのミ申出る者ニ貴所同心候て、何欤と一着之儀も無之はか不行候ハ、山勘兵衛惡心必定ニ存候、さやうニ候て、庄内變之儀共打捨、山勘上洛なされ候ハ、内府様御前も然々有ましく候、其邊にて、庄内之儀ニ自爰は 内府様おかもいなき躰ニ成行候てハ、諸家之覚はたと此跡ニちかい可申候、然時者ゆくす多いか、庄内之儀可相調候ハん哉、十分之御變ニて候ハす共、七八分にてなり共、先々山勘兵衛儀ニ被任候者、内府様御前も可然候ハん欤と存る事ニ候、返々ゆくす多の分別此時候、此等之趣者 竜伯様へも申上候、爲御心得候、

一其元伏草など、候て堺目へ罷出候人衆、人ニよりあるひハべんたうを持せけふりをたて、あるひハ乗馬をいははせ、又ハふミ合つなと候て、伏草の案内を敵方へいはぬはかりにもてなし、誠ニ無正躰之由、此元申散

し候、さり共さやうにはある間敷と存ながら、愚老なとか耳には百ニ一ツモこそ承付事にて候、然時者若似たる事もや候らんと聞付候儀を不申候へ、如何ニ候間申入候、能く念を入立聞候て、外聞実儀可然之様ニ可被仰付候、

一弓箭之道ニ、あまり古躰・當世とて珍敷儀者有間敷候、若き人衆いかやうの儀を申候共、始末之御分別專入之事にて候、是非共く年より功者衆へも被逐熟談、無越度之様ニ可有分別候、

一山田之御稻荷之御事ハ、御當家ニ子細在之儀ニ候、然処ニ今度各打入ニ付而、宮作以下打破、御山之神木なと切取たる由承及候事実ニ候哉、絶言語計ニ候、又山田ニ秘佛在之由候、それも堂之儀ハ不及申ニ、御づしなど打破、あらはに御座候由候、此中一向宗さへ立置候貴所手前之人衆として、打崩候儀於事実者、ざりとてハくせ事深重ニ候、御當家之儀ハ、忠久以來御代々御神慮仏力を以相續儀ニ候、こと更貴所事、御家連續之手初出陳之首途には、いかやうにも神社仏閣ヲ御崇敬有へく候処ニ、右之到來於事実者驚入存候、誰ともそれ程ニ心懸奉公可仕者ハ見及不申候、早竟下々

いたる迄も御心付無之ハ、貴所御由断迄と存る事ニ候、能く仰付尤候、

一當時御配當共在之由、存松をもて承候、其元之御談合定可有子細候間、不及申候、御支配之儀者諸人述懐出來物に候条、時分柄之仕合氣遣ニ存候、

一寺澤志广守殿、於此元嶋津家は心を添られ、一入御念比ニ承候、今度 竜伯様よりも、貴所より茂、書狀共不被上候てつかまつりにく候、後便之刻者、切々以書狀ヲ成共可被仰通候、是又御心得之ために候、

一御覽在之とて、一日く取延、世中ヲ源二郎見合、謀略之儀必定可在之と存候、陳中之儀ハ不申及、諸所堺目無緩可被仰付候、相構々々可有御由断候、

一内府様伊那圖書殿にて御尋候、於庄内貴所手之人衆數百人令敗北、をくれヲ取候由被聞食付候、如何在之欵之由承候、さやうニハ無御座之由申上候、且源二郎ひいきの人衆さまく御取沙汰之由きこえ候、惣別出張之下知なく候て、若き人衆おもひくニ罷出之由、人々申候、於事実者何ともく笑止迄候、いつれ共期後〔本、〕便之候、恐く謹言、

〔朱力半〕
慶長五年二月四日

維新(花押)

少將殿

1032 「御文庫拾七番箱十五卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以御吉左右之儀ニ候間、早々爲可申入飛札如此候、
已上、

先日者爲御使者御越、御太儀共無申計候、然者志和地事、
今日可致下城之旨申入候、隨而ハ高城之儀も相弱たる由
其聞候、然時ハ此表城も、一兩日中ニ落城候へんと存
候、先々御吉左右之儀ニ候間、扱申入候、何も追々自是
可申達候条、不能多筆候、恐々謹言、

「朱力寺」

「慶長五年」

二月五日

中務大輔

忠豊(花押)

伊勢兵部少輔殿

御宿所

1033 「家久公御譜中」

志和池守兵等會圍繞之不緩怠者數月、是以謀道兵器食物
亦盡竭、而顔色憔悴形容枯槁、可謂餓鬼也耳、仍二月五
日、滅勇氣請降者頻也、吾憐之有餒死、俾渠等下城得逃
去者也、

1034 「御文庫拾七番箱十五卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

御書謹令拜見候、仍而以御使被 仰下儀共候之刻、人數
一分ニ御談合ニ罷出候、爲其御礼御書成被下候、忝奉存
候、然者志和知事、今日下城仕候、寔千秋萬歳目出奉存
候、猶追々ニ御祝言可申上候、此等之趣宜預御披露候、
恐々謹言、

「朱力寺」

「慶長五年」

二月五日

右馬頭入道

以久(花押)

伊勢兵部少輔殿

1035 「御文庫二番箱十卷中家久」「家久公御譜中ニ在リ」

改年之御慶雖事舊候、猶以珍重存候、先度者乍御報貴札
參着、本望至極存候、其表弥被属御存分候哉、承度存候、
節々以飛脚も可申達候処、遠境故罷過、所存之外存候、
何も期後音、早々得貴意候、恐々謹言、

「朱力寺」

「慶長五年」

二月五日

井伊兵部少輔

直政(花押)

嶋津

少將殿

人々御中

1036 「家久公御譜中」

慶長五年庚子二月六日、志和池籠城之凶徒等、數月絶糧道無菜根、且復無皮器已下之可食者、矢竭弦絶、而失防禦之道敬屈請降、是以有死、解一面圍令彼等退去也、

1037 「北郷忠能譜中」

慶長五年庚子二月六日、志和池城糧盡降、

同月十四日、太守公出軍高城備寶光、長千代丸之從軍

屯于田原、山之内、山之口城兵發出挑戰、家臣迫田休左衛

門尉・栗山喜兵衛尉良親・瀬戸山石見戰死、遂我兵得勝

利追入敵城内、此時家臣津曲狩野介兼業于時十六歲討取東之

坊住僧、

忠貞處處合戰不利、從兵日衰月疲、依之同月二十九日、

梶山・勝岡・山之口城降、三月朔日、高城降、同二日、

安永城降、野之三谷城亦降、忠貞依進退谷有和睦之儀、

同月九日、末吉下城、同十日、梅北下城、同十五日、財

部下城、忠貞亦同日退去都城、

同日、龍伯公 忠恒公入御于都城、則賜都城及安永・

高城・山之口・勝岡・梶山・梅北於長千代丸、此時長千

代丸十一歲元服、忠恒公自爲加冠賜名於次郎忠能、拜

領寶刀、備前續心、理髮者比志島紀伊守國貞也、

1038 御寄合中之恠之儀、如承先日拙齋老相良新右衛門殿を以被仰候、各談合至可然様ニ分別可申候、委曲御使江申候間、不能一二候、恐々謹言、

「慶長五年」

二月六日

圖書頭

忠長判

入田左馬入道殿

(親埋)
御返報

1039 「御文庫二番箱家久公拾卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

尊書拜見申候、仍山口勘兵衛重而被差下付而、御祝着之段、被顯書面旨、内府へ申聞候之処ニ、御隔心之由被申候、然者其表相替儀無御座、當時被取卷城、同庄内中より

ハリ候て、欠落之者數多有之由目出候、委様子自兵庫頭

様可被仰入候之間、不能一二候、恐惶謹言、

「朱カキ」

二月七日

伊那圖書頭

成令(花押)

少將様

貴報

1040 「御文庫二番箱家久公十卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

貴札拜見忝候、仍而山勘兵衛殿庄内御曖之儀、御存分共依

被仰達、延引候之處、志和地令落城、御案利之由御満足之至、乍恐奉察候、尊意之様、如此之時者、諸城可爲落去事不可有程候、然者此境魚塩通用之儀共、連々緩無御座之様申付候、可御心易候、猶重々可得貴意候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長五年〕

二月八日

秋月長門守

種長(花押)

羽少將様進獻
貴報

1041

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

猶々其元まつほをのほせらるへき儀、むつかしく被送候ハ、まつくしからきになり共渡し候て、下し可申候、其方御分別次第ニ候之条、此御返事急度可承候、兼又度々申下候茶碗之儀、いよ／＼たのみ存候、以上、

追而御茶の事、當年三月末つ方には、時分たるへきよし候、貴公御茶をもつめさせ可申候、然者其元ニまつほ所持之由候之条、いそぎ／＼御のほせ有へく候、それに渡しをき候て下し可進之候、當年之御茶つめ可申候間、其元がのほせらるへきつほ、御急候て肝要に候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長五年秋〕二月八日

少將殿

維新(花押)

1042

〔御文庫二番箱家久公十卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

去六日之御狀髓相届、拜見仕候、仍而志和地之城落去仕之由、目出度存知候、御満足之鉢令察候、相殘城共、程御座有間敷と存候、弥丈夫之御分別、肝要ニ存候、幸山勘兵下向之儀ニ候条、隨分可被仰談候事尤候、猶追々御吉左右可申承候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長五年〕

二月九日

伊豊後守

祐兵(花押)

羽少將様
御報

1043

〔義久公御譜中〕

〔御南戸方ヨリ出〕

猶々題八十首・十五首、又廿首・卅首・五十首・百首、大かた相定候、一首題年頭無是非候、あなかり年始にて候ハねとも、一首題出申事も候、はしつくりニ題書入申候、懐紙にて候、十首の題候、四季を入申候ハ、春一・夏一・秋一・冬一・戀三・雜一、

雜ハ此時ハ、祝又ハ神祇・慶賀など可然候、

去正月三日之御札、二月九日相届、令披見候、本望之

至候、心静御返事申度候へ共、明日返事与申候故、急

麗草ニ令申候、

一先書ニ具申候ごとく、御返事共申候、相届候哉、

一歌書之抄物も令再覽、宗古ニ相渡申候、慥下申候由候

キ、下着申候欵、

一度々これより進之候狀共、不相届候哉、其趣御返事ニ

不相見候、無御心元候、

一百首御法樂にて候へ、御興行之時ハ、短冊にて候ハ

んと存候、

一大勢より候らへ、夏百日百首之歌など讀申候ハ、着當

とて巻物ニ仕、一首つゝ面々ニ書付申候、又百首つゝ

も面々ニ別紙ニも仕候、非一樣候与相見候、

一百首之懷紙と申候書ハ無之候欵、但大勢候て、兼題年

頭、又ハ二首・三首にて候へ、懷紙の歌ハ人數不定

候、

一法樂・祈禱などニ百首よミ申候ハ、短冊ニ大略かき申

候、禁裏などにて候、御法樂ニ百首題候て、各歌よま

せられ候へ、いづれも短冊にて候、題飛鳥井・冷泉な

と家の者仕候、又 勅題とて、 禁裏ニ被染御筆候事
も候、

一勿論百首法樂など御興行候ハ、短冊可然候、あなか

ち人數百人にて候ハすとも、廿人・卅人にて候ハ、五人

・十人にて候へ、興行候其時ハ、一人して五百も十

首も仕候事も候、右之趣にて可有御分別候、人數不相

定候欵、

一兼題ニ季もなき一首題在之かと承候、年頭ニ出候題ニ

左様候、たとへハ松契久・石契久・羈還年友、如此之

題にて候、勿論年頭之題ニ、鶯是万春友 梅有佳色、

此等之趣も出候、年頭之題ニ、又 竹不改色、かやう

の題も年頭ニ出候、又庭松年久、

一七夕之會ニ、七夕契久などのやうなるも、一首の題ニ

出候、

一夏の題ニ、郭公出山・水邊納涼かやうのも出候、これ

ハミな懷紙ニ仕候、三号三字の一首歌候て候、

一二首之題ニ、氣もなき題出候かとの事承候、縦ハ春の

題ニ、閑「本マ」静見花山家風、如此も候、

一三首之題ニ、野花留人・返事増戀・海邊眺望など、此

趣候、又

三首之題ニ、當季二首、戀にても、尺教にても、又雜之
 題何にても、當季ハ善惡、さし口ハ當季之題、二首めハ
 戀にても、雜にても、祝言にても、尺教にても出申候、
 一二十首・卅首の中ニ、季もなき出題之事、勿論ニ候、

如承候、乍去四季之内ニハあるましく候、

一十首之内ニも、當季五首・戀三首・雜二首ほと出よく
 候、

一たとへハ百首之題ニ、

春二十首 夏十五首 秋二十首 冬十五首 雜十首、

如此出申候事、相定たる法度にて候、但略してハ、色

々々ニ以工夫出候事も候へ共、手作なる事ハ不成候、

むかしぐ仕付たる題ならてハ不仕候、

一何時も春と秋とハ數おなし物にて事よく候、又夏と冬
 とハかす同前、戀・雜ハ多候ても、又すくなく候ても
 不苦候、是にて御分別可參候欵、猶御ふしん候ハ、
 重而可承候、習覚申候趣ハ、乍勿論少ものこし不可申
 候、飛鳥井ニ御尋之由候、定而注て可進之候欵、すこ
 しつゝハ相違之事もあるものにて候欵、乍去其中にて
 も輕重は候、

一年頭出題ニ出申候物、無御所持候間、あまた注付可進

之由、此便宜既明日と返事申候間、後便ニ下可申候、
 多事候、あるいは松縁久・精葉契久、これも年頭之出
 題にて候、懷紙三号三字ニ一首書付申候、右ニ注申候、
 同前候、おもひ出次第ニ書付申候、

一老後ニ不入事ニ候へとも從 御若年御執心故与承候、

奇特之御たしなミ殊勝存候、貴老之事ハ古今傳受之御
 身上無隱事候、紹巴ハ度々貴老之事、歌道者之中、乍

勿論御年老と申、殊御歌も連歌も殊勝候、何と申候て

も田舎人にて候へハ、御ふしんも多在之候、古今な

との中、歌以下詞御尋候かと、度々われらへ相尋申候

間、御執心之由、去とてハ奇特ニ候、たれへも自余ニ

伯老ほと心かくるもの無之由申候へハ、大名大守ハそ

れほとニなき事も、人ほめそやし申候物にてか、伯老

ハ奇特与われら申候へハ、紹巴ハ少も無用捨物をこな

す者にて候つるか、貴老之事ハかけにてもこなし申候

事無之候キ、御年寄候て、猶以入事候、貴老之事ハ五

人六人の内之歌道者にて由、紹巴つね々申候、貴老

へも直ニも申入候つるなど々、まさしくわれらへ令醉

中ならも、治醉不申候ときも、度々申候と覚申候、猶

以御ふしん之事ハ無御用捨可承候、不存候事ハ御等閑

「御文庫四拾八番箱中」家久公御譜中ニ在之

にて候ましく候、存たる事ハ書付て可下申候、さりな
からわれらもふしん何ともしらする事多候、可相尋者
も當時無之趣にて相果申候、紹巴も同前にて候由、主
も申候キ、ふしんを申候ニ不存候事ノミ多候つる間、
しれぬ事にて候、況いたゞのものハ不習事多候儀、更
々其身の難にて候ハす候、われらも不入馬鷹自余之武
藝をあひくにならひ候て、隙をかき不堪于今口惜候
へ共、老後はけミ悔といへ共にて候、又只今ハ病者ニ
成候て、猶々無正跡忘却申候、此書付も不可有正儀候
へ共、不申候へハ御等閑候間、筆之狂候て、まつ書付
申候、猶追々可申候、以上、

「朱力キ」

「慶長五年カ」二月十一日

（近衛前久）

山

伯老

床下

切紙

加増老石七斗、但本日録者、今月來月之間ニ可被宛行候、
當時寒中、爲可補衣裳等、連々如御定法、老石ニ付一俵
宛御扶助候、此内雜石可相加也、

慶長五

式月十二日

（新納忠元）

新武入判

尚以我等事令下向、貴所へ打合候て、庄内之儀談合
申候て可然之由承候へとも、せめて老人ハ京都へ罷
居候て、内府様御前申補候て可然候へんと存、度
々用使札候、大谷刑少殿内證の御吳見共有之事ニ候
之条、本田六右衛門尉申付、近日可差下候、とにか
くに山口殿儀被違候てハ、京儀に成合申ましく候、
ふミにてハ巨細難申分候之条、本六右にて可申候、
以上、

急度令啓入候、

一北原勘右衛門尉・堀助左衛門尉去十日ニ致上着、其地
無何事之由承候て、目出候、殊更庄内表諸口、被得勝
利候之段、祝着此事候、

一しハち事、間垣其外稠被仰付候ニ付て、城内之儀弥及
折角候之由、并庄内諸城も草臥はて申候段承候て、案
中なから満足不遇之候、定而しわち事、此比ハ落居仕
候らん、早々吉左右承度候事、

一正月十三日ニ山口殿庄内江越着候て、御囑之懸引させ

られ候之処、源二郎御下知次第之由申上候、併 竜伯様・貴所之御返事、未承届候之条、重而可被仰上之由、今度我々迄も從山勘兵殿承候間、其一到來待申候事、一右ニ申候ごとく、しハち事かたふしニ被召成候処、御暖ニ可罷成事、さて／＼殘多事にて候、後日ハ後悔も可有之儀必定たるへく候へ共、知人中方々承候へ、北國之儀も未相濟候、自然庄内之儀長々敷候てハ可惡候、其故へ、内府様へ不可有別儀之旨、連々被申上、かやうニ私弓箭ニ被執合時分から、在京も無之候へ、口と心と致相違儀候間、内府様御心中難計候、然時者先々此御暖ニ任せられ候て可然之由、内儀共候、其上大谷刑少殿・伊圖書殿御兩所へ、別而被仰候間、御思案可入事此時候事、

一山口殿今度下向之刻、上使之儀候条、中途まで被出合、先々御意趣等被聞、其應し存分共於有之へ、幾重にも被申分候てこそ、公儀ニ成相可申候処、無其儀、剩富隈へも無御越、結句陳所へ山勘被越候由申候、何共／＼心遣にて候、もし勘兵殿機嫌損候て上洛候へ、即 内府様も被聞食付、さてハ彼御暖にハ御構有まじき旨、可被仰出事ハ案中候、左様ニ候てハ、向後いか

調可申候はん哉、能々後慮肝要たるへく候、恐々謹

言、

〔采力平一〕慶長五年二月十四日 維新(花押)

少將殿

參

1046

〔家久公御譜中〕

〔正文在島津安藝守久雄〕

當春未能書信遅引、背本意存候、遂日被任芳意之段、誠以珍重々々、不可有盡期候、將又年頭祈念卷數纔表祝儀計候、其表頓可屬芳意之由、尤目出御上待入存候、近日茂從武庫承之、爲御祈禱隨分秘法令修之候、定卷數等可被下進之候、猶追而可得賢意候間、不能巨細候、穴賢々、

〔采力平一〕

慶長五年二月十五日

〔昭高院如雪〕
(花押)

羽柴少將殿

如雪

1047

〔義久公御譜中〕

「案文在了順」

志和地落去之爲祝詞、預使札畏入候、殊更房轍五掛送給候、御懇意之儀ニ候、猶細々使者可爲演説候、恐々謹言、

〔朱力半〕
〔慶長五年〕二月十六日

龍伯

秋月長門守殿

1048 「御文庫四拾八番箱中」家久公御譜中ニ在リ

猶々無御由断、御鷹師御上せ有へく候、

從 内府様貴所へ、若大鷹を拜領させられ候、一段見事

之御鷹不及申候、尤今度 竜伯様御鷹同前ニ下し申度候

へ共、遠路船中之儀、御鷹二連とハ彼御鷹師も合期可難

成と存、先拙者預りをき候、此元にてハ小林民部少輔殿

など功者之人衆多々御座候間、彼是御氣遣あるましく候、

早々當毛まへに御鷹師御のほせ候て、可被食下候、恐々

謹言、

〔朱力半〕
〔慶長五年〕二月十七日

維新(花押)

少將殿

維新

1049 「御文庫二番箱家久公拾卷中」

猶々濱市も可有御左右間、御働御遠慮可爲本望候、

以上、

急度令啓候、仍一昨日自濱市當地へ罷越候、然者陵之儀

大形可相濟様ニ候、一兩日中御働御遠慮候者、可爲本望

候、竜伯御父子へも其通可申候、唯今はまの市へ罷歸候

条、自彼地様子可申候、竜伯も濱市も可被仰入候、其

間之儀御働御遠慮候者、祝着可申候、恐惶謹言、

二月廿日

山口勘兵衛尉
直友(花押)

嶋津右馬頭殿

嶋津中務少輔殿

〔久〕
人々御中

「此一書、右馬頭以久ノ譜中ニ在リ、右馬頭殿・中務少輔殿連名也」

1050 「義久公御譜中」

慶長五年二月六日、志和池籠城凶徒、矢竭弦絶食用亦不

敷、而既降去矣、〔久イ〕忠貞運籌策向彼此、雖曰屢戰諸所不利、

丁此之時、家康公使山口勘兵衛尉直友達和諧、故隨高

命矣、因茲與少將忠恒主俱裁連署起請文、如左、

「島津圖書頭自轉之世録記ニ有之」

起請文前書之事

伊集院源次郎到寺澤志摩守殿、「以下略ス」

「此御譜、左ノ如ク先年雜抄ニテ載置ト雖、少々文意異同アリ、後人ノ参照ニ備フル也」

1051 「義久公御譜雜抄」

(本文ハ一〇三六号記事ト同文ニツキ省略ス)

「全」

1052

(本文ハ一〇五〇号記事ト同文ニツキ省略ス)

1053 「此正文三番箱中ニ在リ」

起請文前書之事

伊集院源次郎到寺澤志摩守殿、當家江者堪忍仕間敷之由、以墨付申候儀、雖遺恨深重候、内府様御暖候条差捨候、然者源次郎罷出候て奉公上者、以來之儀無吳儀可召仕候、自然其身不相届儀、又者讒訴之族於有之、遂糺明、以其上如何様ニも可申付候、

右之旨於相違者、

▽^(年主)

奉始上梵天帝釋四大天王、下者堅牢地神冥官冥衆、惣日本國中大小神祇、別當國鎮守正八幡三所大菩薩 霧島六

所大權現、殊薩州擁護新田八幡大菩薩 開門正一位 麿

島諏方上下大明神 愛宕大權現 大小天狗等 天滿大自

在天神御部類眷屬等、神爵冥爵可罷蒙者也、仍起請如件、

慶長五年庚子二月廿九日 忠恒(花押)

龍伯(花押)

山口勘兵衛尉殿

直友受誓紙示忠眞、而後無異儀定降參矣、

「三月十日之起請文末ニアリ」

1054 「御文庫二番箱家久公十一卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

追而申候、呂宋へ渡海御朱印之儀、蒙仰候、得其意奉存候、併只今関東へ使者など候て申下候共、披露被申事罷成間敷候条、急度 上様御上洛之儀ニ候間、其刻得御意御報可申上候、少も油断存間敷候、尚御上洛之砌、可得御意候、恐惶謹言、

(張紙) 御譜ニ慶長五年トアレトモ追考スヘシ 山口勘兵衛

二月廿四日 直友(花押)

薩^厂 少將様

參貴報

〔征韓錄〕

都司涓濱茅國科歸唐之夏

去ル程ニ、此涓濱慶長三年十月十七日ニ、朝鮮國泗川ニ於テ大明國ノ所質トシテ、島津兵庫頭義弘主請取處ノ人也、然ルヲ伏見ニテハ、宇都宮弥三郎カ旧宅ニ入置カレ、嘉嶺上客ノ如饗應シケルカ、同四年極月、彼涓濱ヲ薩摩ヨリ大明ニ送り歸スヘキノ旨、五大老ノ仰ニ依テ、則伏見ヲ去テ薩摩ニ來リ、暫留滯ノ間、嶋津圖書頭忠長ト交接ノ書簡有リ、其文ニ曰、

朱印

圖書頭老將軍

都司涓濱茅國科拜

泗川別後、繼レ此未_レ由_レ一晤、前年蠲_レ尽抵堺、承使惠下及、亦不能面謝、後因匏繫唐津、恨難_レ通_レ尽牘問候_レ獲_レ罪萬千、今幸至_レ貴治、切喜領_レ教有_レ日、第知

貴履向在軍中、且未_レ敢遣_レ使馳叩_レ洒辱_レ、重惠遠頒、何以克當令人惶愧益甚、謹對_レ使拜嘉、先此附謝尚有、嗣躬謁不尽、

二月廿八日

涓濱書判

朱印

圖書頭老將軍大人麾下

咫尺

高軒極欲_レ躬叩談瀾、又恐煩_レ動輿居、是以未_レ敢來耳、謹差_レ官代候、聊具詩扇四握・拙書六幅・花瓶一對、用表_レ寸心、久旅乏_レ物、乞情宿幸是、
〔慶長五年也〕(二月十五日)
庚子花朝日 涓濱書判

朱印

前日薄儀何足云謝、乃承

使翰、又頒益增惶恐、予欲親謁床下、又恐煩動未敢來也、昨予差官、前往泊津看船、今尚未回、抑不_レ知何日可報_レ歸棹、尤望_レ麾下、維持俾_レ得_レ早行_レ爲_レ感、
三月初三日 都司涓濱書判

圖書頭老將軍大人麾下

朱印

咫尺

高軒不_レ獲_レ趣晤、顏色歡如之何、予承

維垣西歸、抑未_レ後會、有_レ期否、如商艘往來、當_レ通一紙以問_二安居_一也、草率此

謝、不盡、

初夏朔日

都司涓瀆書判

圖書頭老人麿下

〔此文中誤字アルカ、良本ニ由テ糾合スヘシ〕

1060

〔義弘公御譜中〕

〔正文有之〕

〔朱カキ〕慶長五年秋
三月三日、朝鮮人等百拜上書于

御前、伏以、我等聞、積土成山風雨興焉、積水成淵蛟龍

生焉、是以毛羽集而沈舟、叢薪聚而折軸、

昔少康有衆一旅、卒復夏禹之績、高宗得馬匹、終繼宋

祖之業、古之英主有爲天下者、在謀淺深不在多少也、

大抵上有其主、下無其臣、不可以舉大事也、下有其臣、

上無其主、亦不足與成大功也、故趙之程嬰輔逃匿之孤

武而能踐其位、晉之子推衛饑餒之重耳而能返其國、古

之良臣建業宇內者、繫時得失不繫衆寡也、我等所言雖

似迂遠、事之利害謀之成敗、計既積年思已、累日豈可

以無實之事輕達於御前乎、

蓋兵者不可以輕發也、朝鮮之強古之難當也、只恃國衆
妄犯敵土者、謂之驕兵、兵驕者敗、故唐太宗之威、徒
中矢而歸、漢武帝之雄、必重幣而後降、

往征無道救亂誅暴者、謂之義兵、兵義者王、故成湯以
七十里爲政於天下、文王以百里無敵於四海、由此觀之、

以燕伐燕、以暴易暴者、雖舉天下而動、無益於成功也、

以直治曲、以順服逆者、雖制一挺而起、能挫堅強也、

〔今カキ〕
今之可憤者朝鮮之王、素以不辟、流毒一邦、浚民肌骨、

曷喪之嘆斯極、來蘇之望方急矣、仁主之不作、未有疎

於此時也、生民之憔悴於虐政、未有甚於此時也、飢者

易爲食、渴者易爲飲也、事半古人功必倍也、彼李龜生

者先王之直孫也、請收我國被俘之衆數得一萬、則翊戴

王孫渡入高麗、假日本之威聲、行我等之奇計、除舊苛

法施新仁政、則民之悅之猶解倒懸也、民之歸之猶水就

下也、而舉欣欣然鼓舞、而相賀曰、吾王之孫也、不可

失也、簞食壺漿爭迎我師、全慶二道不血刃而坐得矣、

夫如是、則成事之功在於我等、成功之本在於

御前、德不可忘、恩不可負也、歲歲聘幣之禮、年年和睦

之信、自令而始、後當繼通也、

若以薩摩之力獨難謀事、則願達

内府様、終始勉圖、千萬幸甚々々、謂予不信有彼天日、
謹百拜頓首、

1061 「家久公御譜中」

二月廿九日、莊内端城高城・山口・勝岡・梶山・野野三
谷・安永、共六ヶ所徹而去焉、

1062 「御文庫拾七番箱十五卷中」「家久公御譜中ニ在之」

御書謹而致頂戴候、抑今度志和知城被召落、打續端城共
六ヶ所落去仕候由、先以珍重ニ奉存候、都之城無程相果
可申与奉察候、扱々御手柄之段申茂疎ニ候、御存分之儘
被仰付、天下太平ニ罷成候上者、上使被任御變之旨ニ、
源次郎殿命を被成御助候事、御尤ニ奉存候、遠路之儀候
處ニ、其表之様子早々被仰聞、眞々身ニ餘忝奉存候、御
意之通爰許留主居共ニ茂申聞候、庄内一篇ニ被仰付、何
ヨリ茂目出由申計ニ候、何様近日致祇候可申上候、此等
之旨宜預御披露候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長五年」

三月七日

「朱カキ」
「小西撰津守内」
瀧七右衛門

重時(花押)

伊勢兵部少輔殿

1063 「家久公御譜中案文有之トアリ」

しへち城せめおとし候由相聞得候哉、早々爲祝儀芳書畏
存候、志和池落居以後、打續城々相濟、都之城迄ニ相極
候間、源次郎事ハ可助置も、可列首もいかやうにも容易
せめ成候間、ミヤこの城もふみつぶすへきと存候へ共、
内府様御變候旨を餘ニ申破候へハ、對 公儀時宜いか
ニ候条、源次郎相助、少々知行遣可召出候由、山勘へ申
談、從勤兵源次郎方へ被申遣候処、貴所如存候、寺志
殿被相越候刻、つよだて申たるニ相替、召出儀殊外うれ
しがり、追付都之城致下城、可罷出ニ相定候、高新・平
源などへも、春中ニハ可攻果由申候き、勿論致首尾候、
我等も早々都之城へ相越、庄内置目等申付、急度可罷上
覚悟候、攝州へハ從是直ニ上方へ申のほせ候、猶期後音
候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長五年」

三月八日

薩少將

忠恒

「宛ナン」

1064

「旧記雜抄」「正文在御文庫拾六番箱四卷中糺合ス」

起請文

謹而奉言上候、幸侃事依重之罪科、被成御成敗候處、

若輩故不改其誤就楯籠候、被向御人數、既進退可相果

極候處、山口勅兵衛尉殿以御取次可被召出之由、開不慮

之愁眉恐悅無極候、寔身命之被成御助、剩堪忍分之御知

行可被下之旨、御高恩之儀不知所謝候、弥不被殘御心底

可被召仕儀、所希候、勿論於拙者儀者、如此蒙御哀憐候

間、自今以後毛頭不企惡逆、偏御奉公可仕候、致出頭上

者、向後何様之儀も可應、御意候、右之旨於僞申者、

▽敬白(牛毛)天罰靈社上卷起請文事

謹請散供、再拜々々、夫惟年号慶長五年庚子歲、月並者

十二月、日數者三百五十餘ケ日、撰吉日良辰、而致信心

請白、大施主等謹奉勸請、掛忝上者梵天帝釋四大天王

豹尾 黃幡 歲德 釋迦善逝 釈提桓因 奉宿劫、四天

八天 十二天 二十大天 三十三天 十二神將 七千夜

又 廿八部第六天魔王 聖主 天地之卅六禽(會) 百億須弥

百億梵天帝釈 百億鐵圍山 百億閻魔法王 諸天 百億

天衆 百億天人 百億天女 百億童子 百億大力夜叉

百億惡鬼 百億天上 百億閻浮提中所顯現之大小神祇、

上者有頂天、下者到金輪在佛神、皆悉驚白言、堅牢地神

八海所接龍王龍衆 十王十駄俱生神 太山府君 司命司

祿 冥官冥衆 有情無情 辰星 南斗 北斗星 日曜星

破軍星 羅喉星 計都星 巨文星 七夕星 八葉星 本

命星 四方四佛 五方五佛 大聖摩利支尊天 太白神

(歲晚之) 大神 八諸神 十二月將神 天葬神 地葬神 阿豆知神

天神 地神 海神 木神 火神 金神 水神 風神 諸

佛諸菩薩 諸善神 東方降三世明王 南方軍荼利夜叉明

王 西方大威德夜叉明王 北方金剛夜叉明王 中央不動

明王 大黑尊天 毘沙門天王 大弁財天女 宇賀神 十

五童子 三寶荒神 多婆羅天王 武答天神 頗梨采女

她毒氣神王 八王子 八万四千六百五十餘神 金剛界七

百余尊 胎藏界五百余尊 金剛藏王 晃她帝主 大聖金

剛童子 普天率土愛染明王 妙見菩薩 過去現在未來三

世諸佛 一万八千軍神 二万八千軍神 三万八千軍神

四万八千軍神 五万八千軍神 六万八千軍神 七万八千

軍神 八万八千軍神 九万八千軍神 十万八千軍神 二

千八百師天童子 一万燈明佛 二万灯明佛 三万灯明佛

藥師如來 寶生如來 無量壽佛 微妙身如來 文殊 普

賢 觀音 勢至 十六善神 八万四千夜叉神、忝日城崇

廟天照皇太神宮四十末社 内宮 外宮 風宮 諸末社

八幡大菩薩 春日大明神 王城鎮守山王廿一社 根本中

堂本尊 立塔諸堂諸坊之諸本尊薩埵 祇園牛頭天王 松
 尾大明神 平野大明神 吉田 立田 熱田大明神 大原
 大明神 稻荷大明神 賀茂上下大明神 貴布祢大明神
 北野天滿天神 三輪大明神 住吉大明神 三十番神 愛
 岩四所大權現 熊野三所大權現 十二所權現 九十九所
 權現 廣田大明神 金峯山權現 吉備宮大明神 對馬天
 王 羽黒山大權現 葛城大權現 峯藏王權現 子守勝手
 大明神 梅宮大明神 法花廿八品 三藏法師 鞍馬毘沙
 門天 吉祥天女 雨寶童子 関東守護神伊豆箱根兩所權
 現 三嶋大明神 鹿嶋大明神 富士大權現 白山妙理權
 現 立山大菩薩 諏訪上下大明神 出雲大社大明神 多
 賀大明神 御靈八所大明神、殊者氏神、惣者大日本國中
 六十六ヶ國大社 二千小社 五百九十二所大小神祇等
 地藏菩薩 陀羅尼菩薩 龍樹菩薩 虛空藏菩薩 栴檀香
 菩薩 大病神 八万四千鬼神 大恩神 歲破神 天蘇神
 大疫神 太歲神 夜氣夜叉神 妙鬼神 六百五十餘神
 金山六十万鬼神 刀八毘沙門天王 父天狗太郎房眷屬
 九億四万三千四百九十余神 善貳師童子 八所大明神
 善害坊 次郎坊 八万四千眷屬 飯繩大明神 四十四万
 一千眷屬 大天魔三万三千 小天狗三万三千眷屬 智羅

天狗 十二天狗等、日城中山々峯々嶽々所居住之大天
 狗 小天狗等、居住群集而正路之旨照鑑給与、若偽心於
 在之、立處受白癩黑癩之重病、八万四千毛孔、四十二之
 骨節、日々夜々苦病無止、深厚蒙御罰、弓矢冥加末盡、
 佛神三寶雖作祈願不可叶、於後世者墮八寒八熱阿鼻無間
 大地獄、到未來永却不可有浮期者也、仍靈社上卷起請文
 如件、△

慶長五年三月十日 伊集院源次郎 忠眞(花押)

稅所越前入道殿

喜入大炊殿

伊集院源次郎

1065 「義弘公御譜中」

「正文有之」

天爵起請文之事

一不新雖申上事候、奉對 龍伯様 惟新様 少將様、向
 後無二心可抽御奉公候、縱骨肉同胞之仁、又者雖爲緣
 者親類之輩、於有逆心之企者、一日片時茂不致同意、
 速言上可仕候、併右之趣於不承付者、不及了簡事、

一此度庄内志和知落去之御悅申後候之儀、不届之故迷惑仕候、毛頭心底之非疎略候事、

一幸侃存生之中、同到源二郎茂聊入魂不仕候、縱此度源

二郎并兄弟共召出候之共、曾以入魂仕間敷候之事、

一自何方爲何計策之儀在之共、不入其案、即可致言上候之事、

一御爲可惡儀、自他國之衆へ茂致口外間敷候、若諸事

付、讒言之儀於在之者、有筋御糺明所庶幾候、乍恐廉

直之愚意可申上候之事、

一自然 御三殿様御前を仕違、他國江可罷出程之仕合候

之共、御分國中ニ而進退相終可申候之事、

一萬一 御家及御難儀事於令出來者、親子妻女兄弟、或者骨肉同胞、或者縁者親類を茂差捨、始末共ニ可致御

奉公事、

右之趣若於僞申上者、

〔牛王〕 「朱力キ」
神名 「靈社上卷」

慶長五年庚子三月十二日

川上弥四郎

久賢在判

三原七左衛門尉

重頼在判

肝付左馬助

兼道在判

川上拾郎

久慶在判

米良弥六

重棟在判

鯨嶋小藏

宗堯在判

入田掃部助

氏虎在判

大野弥三郎

久武在判

東郷源六

重次在判

黒葛原少八

忠次在判

谷山宗兵衛尉

忠清在判

指宿助五郎

貞信在判

木原七郎三郎

家祿在判

祢答院伴次

重次在判

長谷場弥四郎

実純在判

深見早右衛門尉

家豊在判

有川五兵衛尉
真信在判

小嶋勝介
正綱在判

八木少右衛門尉
信是在判

坂本彦右衛門尉
清親在判

酒向弥八
景次在判

若松弥吉
吉親在判

勝部弥次郎
行定在判

津曲加右衛門尉
兼豊在判

土持治部左衛門尉
宗綱在判

肥後与次兵衛
盛信在判

木村源六
重時在判

境助左衛門尉
政治在判

土持平左衛門尉
久綱在判

桐野助丞
利昌在判

二見筑後守
安信在判

山中与作
重実在判

石塚藤太左衛門
兼次在判

有馬弥六兵衛尉
純重在判

玄也在判

正玖在判

草枕在判

昌策在判

意温齋
瑞泉在判

宮原狩右衛門入道
瑞養在判

鮫嶋宅右衛門尉
宗次在判

久富但馬入道
春齋在判

宅万与八左衛門尉
道直在判

濱田民部左衛門尉
重利在判

新納一右衛門尉
忠征在判

折田作右衛門尉
種益在判

染郷勘左衛門尉
重尚在判

二宮掃部助
景房在判

土持大膳亮
綱家在判

大田左京亮
忠秀在判

荒武典介
宗明在判

井尻七兵衛尉
祐家在判

中村弥左衛門尉
友稻在判

平田吉右衛門尉
宗安在判

岸良勢右衛門尉
兼速在判

美代九右衛門尉
清堯在判

大内田源三
吉実在判

阿久根九兵衛
良次在判

上原軍右衛門尉
尚房在判

鹿嶋太郎兵衛尉
國明在判

市來雅樂助
家次在判

青木源介
利金在判

旅庵老

存松老

喜入攝津守殿

「上包有之」
天罰起請文

幸侃御成敗二付、於上方
各違判

1066

〔中務大輔豊久譜中〕

慶長五年庚子三月十三日、忠貞降 太守去都城、豊久既成軍功所以歸陣也、今度在陣之際、於彼此之戰場遂戰死之家臣、三原九兵衛・野村藤藏・坂元半兵衛・富山次十郎・前田大藏兵衛・野田覺内以下其數多矣、被傷者不可勝言也、 太守感其軍功、有賜野々三谷之命、然而我固

辭、以不受也、

三河入道役焉、

1067 「御文庫廿二番箱八卷中」 「御譜ニ寫在重久長右衛門トアリ」

猶々昨日 竜伯父子前ニ罷出候、若御次之時分者、

御取成所仰候、以上、

1070 「公御譜中」
「案文」

覺

好便之条令啓上候、然者此表之御曖度々雖違變候、山口

殿被入御念候故、和融相調、昨日濱市へ罷出候、知行方

内府様以御意二万石被仰付、外聞実儀候、猶近日使者を

可差上候条、不能一二候、恐惶謹言、

「御譜ニ朱カキ」

「慶長五年」

三月十五日

伊集院源次郎

忠眞

伊那圖書頭殿

參人々御中

1068 「義久公御譜中」

（本文ハ二〇七四号記事ノ一部ト同文ニツキ省略ス）

1069 「家久公御譜中」

伊集院源次郎漸失謀略道、隨山口直友言既定降參、都之

城・財部・梅北・末吉皆徹城下矣、三月十四日、法印

龍伯翁・忠恒共俱入都之城、其翌十五日、大平吐氣岩切

- 一 庄内相濟候御祝言之事、
 - 一 御曖ニ付而、度々入組之事、
 - 一 北郷旧地へ召置候事、付知行分之事、
 - 一 支配延引之事、但無足衆も相濟候事、
 - 一 源二郎へ遣候知行所目錄之事、
 - 一 源二郎へ勸兵殿入こんの事、
 - 一 寺志へ庄内の儀、重々申候やうに罷成候事、
- 以上
- 一 從内府様不被仰下以前懸引の事、
 - 一 山勘兵最前下向被成候、御曖違變の事、
 - 一 寺志へ以墨付、當家へハ罷出間敷よし申候事、
 - 一 今度勸兵殿御曖候て無事ニ相定、下城之日限迄申談、
 - 一 夜之間ニ違變の事、
 - 一 源二郎弟共、神文相違之事、
- 以上

「朱カキ」
「慶長五年」

1071

「御文庫四拾八番箱中」家久公御譜中ニ在之
口切レ、 候之条、御手杯□□上洛候てハ可爲笑止と、竜伯様被成御才覚ニ付、被任其旨、源二郎被召出、尅萬石にて穎娃へ落着させられ候由、尤令存候、先札にても度々申候様、内府様程々被添尊慮、寺志广殿を始、度々御使者、殊山勘兵殿儀者、兩度迄被指下候間、彼機嫌あしく上洛候て、内府様御前之御取合於無然々者、早竟國家之爲ニ不成事にて候、就中志和落去之御注進、久保七兵衛尉にて被仰上候、其砌山勘兵殿とかくの御使札も無之候、又今度源二郎被食出候儀者、山勘兵殿へ竜伯様御談合を以、巳山勘兵殿都之城へ被相越御暖之由、きこえ候、雖然山勘兵殿が今度も尅通不被上候、是者いかやうの子細候哉と、内府様も御不審ニ被思食、伊那殿なとも不審深重之由被仰事ニ候、以來之儀者能々山勘兵殿へ御入魂之外有間敷と存候、其元之仕合如何候哉、諸事被入御念尤候、雖然今度庄内之儀、源二郎進退之儀共被聞食、内府様御悦喜之段者無殘所候間、可御心安候、山勘上洛候て、御前之御取合共よく候者、いよ／＼國家

1072

之爲可然候へんと存計候、乍重言山勘兵殿上洛候て被申様ニ、内府様御家中之御人數薩之儀を、物あさくも、又者たのもしくもきゝなされへく候間、諸事不可有御由断候、兼又貴所上洛之事者、國元置目之儀共被仰付、御成候て可有上洛之由、從、内府様直被仰下候由、伊那圖書殿が承候欵、可爲其分と存候、いよ／＼國元御仕置以下丈夫ニ被仰付候て、可有御上洛候、先々庄内表御案利之御悅爲可申、態用飛札候、尚追々御吉左右まぢ存計候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長五年」三月十八日 維新(花押)

少將殿

「御文庫四拾八番箱中」家久公御譜中ニ在リ

猶々つほ式ツ之茶之代物、爰元にて尋候へハ、銀子少分候由申候、せめて去年ほととの茶者詰候へてハと存、其ことくニ申付候、已上、

追而令啓候、

一從、内府様貴所へ拜領之御鷹可差下候之条、鷹師可被上之由申下候キ、雖然貴所事可有、上洛候之間、此方にて慰之爲ニすくに被召置候へん哉、又其方へ可被召

寄候哉、何も御分別次第候、惣別今程者諸大名衆鷹を

御馳走之様ニ見え申候、然間爰元へ被召置候ても能候

はん哉と存候、縦鷹師罷上候共、其方之御左右可相聞

迄者可待申候条、早々御返事待入候、

一 去年貴所御壺之茶金沓枚詰候由、役人共申入候哉、左

様ニ者無之候、然間茶之入目記下申候、凡金子貳兩あ

まりほととの代にて候、今一ツの壺者其方へ最前下申候

条、其元にて茶之入目記可有御覽候、其つほの御茶ハ、

此方へ御座候壺之茶もあしき御ちやにて候ツ、其銀目

共其方にて可相知候、然者當年之茶、大方ニ可相調由

今度新沓入を以被仰上候、雖然御茶者晴ヶ間敷事候、

其上貴所江つき相之人數者、或大名衆、或まち人にて

も、方々へ出入有之事候条、縦敷寄をこそ不被成候共、

御茶ニ者念を入候へてハと存候、其上去年之茶も、餘

結講成御茶計にて者無之候ツ、大名之事者不及申、町

人已下も金子沓枚詰ニいたし候人數多々有之儀候条、

責而去年程ニ者可申付と存事候、殊宇治にてハ壺之主

をも尋申、諸人取沙汰共仕儀候之条、右之分ニ候、何

も其御心得尤候、恐々謹言、

維新(花押)

1075

「朱カキ」
「慶長五年」三月十九日
「正文在弁官新兵衛」

少將殿

1073

伊集院侘言申付而、有免之由尤候、然者近日御上落之旨
其聞候、其元有仕置等、緩々御上待入候、委細維新

可被仰之間、令省略候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長五年」三月廿二日
家康(花押)

薩广少將殿

「家久公御譜中ニ在リ、正文在卷本トアリ」
「右ノ正文ハ、旧御番所御文書ニ番箱中國統新龜鑑中ニ在リ」

1074

「義久公」御譜中」
一 慶長五年三月十四日、伊集院源次郎忠貞降來于富隈私

宅、敬屈所以謁見也、十五日、龍伯及少將忠恒主共俱

往莊内入都城、令岩切三河入道唱凱歌矣、十八日、令

吾三軍各爲歸陣也、廿日、龍伯歸著于富隈私宅者也、

忠恒主同廿二日、歸宅于慶島也、伊集院源次郎忠貞隨

内大臣家康卿之命、已爲降參、則聞之於 内府、由是

賜 台書、記左、

其表之様子被仰越、具承候、伊集院儀可被討果被相極處、

重而山口就指下、少將殿被及御吳見、赦免之上、堪忍分

老万石被宛行之由尤候、委細維新、可被仰候間、不能具

候、恐、謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長五年〕三月廿二日

家康〔花押〕

龍伯

1076
〔正文在新納氏〕

今度永、相届在陳、寔老後之軍勞忠節無比類候、仍脇刀

一幸光遣之候、謹言、

慶長五年三月廿四日

忠恒〔花押〕

新納武藏入道殿

〔上書〕
新納武藏入道殿

忠恒

〔此御書、忠元譜中ニ在リ〕

1077
敬白 願文之夏

右旨趣者、爲國家泰平、武運長久、子孫繁栄、別而今度

庄内退治諸願成就、日州高原之内蒲牟田村五百八石奉寄

進、或御祭禮、或社内修理等不可有緩疎者也、仍願文如

件、

慶長五年三月廿五日

忠恒〔花押〕

霧島山

〔上包〕
高原蒲牟田御寄進狀

〔家久公御譜中、正文在曾於郡花林寺トアリ〕

1078
〔御文書四拾八番箱中〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

猶、北國之儀未相濟由、下、申事ニ候、尚新敷儀共

御座候者、追、可申下候、將又 内府様、貴所へ拜

領之鷹、氣相悪様ニ見之申候条、隨分養性申候、是

又爲心得候、以上、

去三月朔日之御狀、同十五日ニ爰元へ上着仕候、

一内府様へ進上被成候書狀、同十六日ニ伊那圖書頭殿へ

進入申候、御返事出申候間、持せ差下申候事、

一天下一段御無事候、然者其後其元之御左右不承候条、

無御心元存事候、定頃者御吉左右たるへきとまち居申

候事、

一御かミ様此比小脳氣にて候、いまた然、御快氣無御座

候間、谷杉と申候はかせ御祈念可然之由、 竜伯様連

と被成 御意候之通、存松被申候条、致談合召寄申候

而、今ほと御祈念仕候、谷杉うらかたにも、女之呪祖
之たゝりにて候由申候条、以其意得御祈念申候事、

一 友賢うらかたニ茂、御壽命ニ者爲何事も有ましき通申
候、あまり過急之御煩ニても無御座候之間、可御心安
候事、

一 祐乘法印へも御養性爲可頼存、大坂へ今ほと堪忍にて
候条、使越申候、いまた其使不罷歸候、何共別儀有ま
しきと存候、諸事存松へ談合申候而、御祈念共仕事候、
猶追々可申候、恐々謹言、

〔朱カギ〕
〔慶長五年〕三月廿九日

維新(花押)

又八郎殿

〔義久公御譜中〕〔慶長五年中ニあり〕

〔正文在末吉住吉大明神社内〕

詠松間時鳥和歌

法印龍伯

一 こゑはそゝやそれともわきかたみ松の葉こしの山ほと
ゝきす

詠松間郭公和歌

沙弥慰叟

こゝろあるまつのしけみの木のまかなほとゝきすなくこ
ゑのもりくる

詠松間郭公倭歌

沙弥紹劍

里わくる名にはたつともほとゝきすやとりをしめよ庭の
まつかえ

詠松間郭公和歌

沙弥玄与

ほとゝきすきなくものゆへ山まつのこすゑの夏はあらは
れにけり

詠松間郭公和歌

沙弥爲舟

よろつ代の聲やそふらむ古にたる松のこすゑのやまほと
ときす

詠松間郭公和歌

沙弥抱節

いそのかみふりたるまつにほとゝきすあたらしき音をな
きいつるかな

詠松間郭公倭歌

沙弥休心

雲かゝるまつのみま／＼音つれていつちすきけむやよほ
ときす

詠松間郭公倭歌

沙弥宗察

さとなれてめくりやすらしほとゝきす松の木すゑのあけ
かたのこゑ

詠松間郭公倭歌

沙弥与進

松の葉のいろにならひてこゑもたゝときはならなむやよ
ほとときす

右九首之會紙、稱法樂所以籠置住吉社内也、

1080 「正文末吉住吉大明神社内ニ有之

傳住吉大明神の 木のまより顯れ出てほとゝきす

神前に詠之、 三月廿九日 あすのはつねをけふしなかなむ 龍伯

「正文在末吉住吉大明神社内」

ましてしはし暮ゆく春も心あらは

名も住よしの松の木陰に

玄与

「正文在末吉住吉大明神社内」

けふのミの春になかなむ郭公

抱節

神かきそゝく雨にまかせて
右三首之短冊、慶長五年三月廿九日社參之時詠之、所以
籠置住吉社内也、

義久公
義弘公
家久公
慶長五年 自八月
至八月

後
編
舊記雜錄 卷四十九

1081 「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中在之」

以上

幸便之条令啓候、

一 庄内之儀相濟候て、先以目出度存候事、

一 先書ニ申候様ニ、御かミ様小脳氣ニ御座候つれ共、此
比者御快氣之躰候、然共よりく少御煩被成候へ共、

致御養性候条、急度可爲御快氣候事、

一 伏見へハ西國衆可爲御番よし、御掟被仰出候処ニ、何
程之儀候哉、諸大名悉大坂へ家居以下被引越候、我等
事とかく不承候間、ふしミへ致御番候、今分ニ候ハ、

伏見之儀者荒野ニ可罷成躰候、然共 御城へハ 内府
様御息御番被成候事、

一 都今ほと御無事候、乍去景勝致出仕間敷よし被申候ニ
付、増田右衛門佑殿・大谷刑部少輔殿、度々雖被成御
暖候、不事濟候条、伊那圖書頭殿來十日ニ打立、奥州
あいつへ下向候、勿論様子者不存候、就夫とにかくニ、
さつまゞ茂人衆被召上候へハ不叶砌と存事候、不可
有御由断候、猶追々可申候事、

一 爰元諸大名、少之所へ他行被成候にも、道具を事々敷
持せ被成候条、上洛之時者其用意專一存候、恐々謹言、
〔朱力キ〕
〔慶長五年〕卯月八日

〔義弘〕
維新(花押)

〔家久〕
少將殿

1082 「御文庫拾七番箱十五卷中」「家久公御譜中正文在伊作士
中島吉左衛門トアリ」

尚々からめもの仕置之儀ハ、 内府様御内證候て堅
固ニ籠者させられ候て、幾年も可被召置由候、御油

断有間敷候、以上、

幸便之条令啓上候、

一 庄内落去仕、源二郎殿去月十四日出仕之由相聞得候、
誠 少將様御名譽、都鄙之御面目不可過之候、

一内府様尊前、對御當家ニ弥々御懇切無比類候、可御心
 易候、就夫 少將様御上洛御急候て、肝要に奉存候、
 其故ハ北國へ子細在之事ニ候条、此節一稜御忠儀専用
 ニ候、

一庄内へ肥後表被指通候山くもり、被擱捕被指上候条、
 則 内府様へ被達 貴聞候、然者伊那圖書頭殿被差出、
 彼からめ者口上被聞召候キ、然に出入之儀多々在之事
 ニ候之条、爲生口籠者させおかれへき由 御詫候而、
 被指下候、いかやうにも堅固ニ御格護專一ニ候、被思
 召子細共在之儀ニ候之条、無御油断番衆已下可被仰付
 候、次者大口にて被召取候からめもの、鹿兒嶋へ罷居
 由相聞得候、そのものも同前に勤番可被仰付旨ニ候、
 爲後日拙者前々可申上由、 維新様御意にて候、尚可
 得御意候、恐惶謹言、

〔朱力半〕
 〔慶長五年〕卯月九日

旅庵(花押)

〔平田増宗〕
 平太郎左様

〔忠長〕
 圖書頭様
 参人々御中

〔本文名ハ一〇六五号文書ノ署判者名ト同文ニノキ省略ス〕

「末吉住吉社奉納短冊写」
 恨戀 せめてさはうらミのほとをいりやりて
 たえん命はさもあらハあれ 龍伯
 祝 行末もいませしらるゝくにの
 あまつ御神のめくミある世ハ 忠恒
 〔右忠恒公御短冊ノ裏〕
 慶長五年四月十一日當坐
 「外ニ數人有之、略ス」

「外ニ御短冊二ツ、年間シレストイヘトモ、御奉納ノ内ナレハ是ニ載
 ス、家久トアレハ以後ナルヘシ」
 〔慶長五年三月廿九日之往参之時之御短冊〕
 傳住吉大明神の 木のまより顯れ出てほととぎす
 神前に詠之
 三月廿九日 あすのはつねをけふしなかなむ 龍伯
 〔慶長十二年七月、家久公御参詣之時之御短冊とアリ〕
 秋の色にうつる木すゑも住吉の
 神代の松はあらハれにけり 家久

「懐紙二十枚之内」
 詠松間時鳥和歌 法印龍伯
 一こゑはそゝやそれともわきかたみ
 松の葉こしの山ほととぎす
 同 少將忠恒

常葉なる松にちきりてほととぎす

いく久しさの初音ならまし

「外三拾八枚略ス、慶長五年四月十一日當座トアル丹尺一クサリノ内ノ人数ナレハ、其時間しく奉納有しにや、よて是ニ載ス」

「義久公御譜中」

「正文在末吉住吉大明神社内」

恨戀

せめてさはうらミのほとをいひやりて
たえん命はさもあらはあれ

龍伯

霞

かすみたつ瀧乃白糸たえすしも
たかをりいたす衣なるらん

玄与

梅

梅かゝの袖にしとまる物ゆへに
しはしわれかと身をたとる哉

爲舟

春月

言のはのことハリ身にそおもひ出る
おほろ月夜のあかぬ詠は

抱節

見花

明るより暮るゝもしらす木のもとに
なつさひあかぬはなの色哉

以久

落花

散花のにしきを庭にしきぬれは
よのつねならぬ宿とこそみれ

慰歌

藤

水上ハいつく成らん山きはの
岩ねをかけてめくる藤浪

忠長

新樹

足引の山のあらしのをとまても
こす糸の夏に成てしつけし

治劍

五月雨

暮るかとみし空いかに五月雨の
はれまのいり日いつこなるらん

經宣

納涼

秋もやハかくは涼しき夕たちの
あとにこほるゝ露の玉ゆら

國貞

初秋

いつしかに秋立ぬらし明ほのゝ
山のかたへになひくうすきり

宗察

草花

秋たちて日數ふりけるけふ毎に
のへのにしきハ色ぞ増れる

貞林

鴈

ほのかなるはつ鴈かねのこゑはたゝ
ねさめもよほすものにそありける

休心

鹿

夕より聞しなからも曉は
いとゝ身にしむさをしかの聲

長泰

山月

月のひかりもをちかたの山
つくくゝとはしゐなからに詠れは

久時

浦月

あかなくもなかも馴けりよせ歸る
うらはの浪にうかふ月影

宗親

擣衣

はしるせし夜も曉の空とてや
碓のをとのかすかなるさと

忠能

時雨 いをやすくねられさりけり度くくの

重聡

落葉 袖にまなくも散木の葉かな

実位

雪 つもらせてなかむる松のしら雪に

善信

忍戀 とへてのミとしはふるともいかせん

豊信

不逢戀 いたたつへき名をし思へは

与進

契戀 くる髪のかかぬはかりに面かけを

家詮

待戀 見そめしよりのちきりとそなる

慰政

別戀 鐘にうかるゝ心はかなさ

紹佐

絶戀 わかるゝ袖は涙なりけり

政近

曉 人の心のたえ終る中

久正

さひしさをいかにせよとて曉の
まくらにとをきかねの首つれ

旅 又こよひ草の枕をむすへとや
かねハ聞えず雲かへる山

重理

祝 行末もいまそしらるゝくにくくの
あまつ御神のめくミある世ハ

忠恒

「右之短冊裏ニ有之」
慶長五年四月十一日 當座

1087

「家久公御譜中」
「正文有卷本」

以上

三月十二日之書狀、四月五日ニ伏見ニおひて令披見候、
仍庄内諸城無殘所被属御案利、都城もあやうく罷成候処、
山口勘兵殿以御唆、源次郎可罷出ニ相定由被仰上候、就
夫知行方之儀も、式万石被遣之由候、如承候、内府様
兩度迄被入御念、山口殿爲御使者被差下候条、御意筋目
無相違様にと被思召、如此之段尤存事候、然者其後伊東
殿舟ニて従山口殿使者罷上候、源次郎事、去月十四日ニ
濱市へ致出仕候通被仰上候、誠諸家之覚、我等式迄大慶
可過御察候、將又都今程御無事候、乍去景勝致出京まし
き由被申候ニ付而、伊那圖書頭殿會津へ下向候、今月十
一日ニこゝもと被成通候ニ、拙者所へ被立寄せ候、雜談

にも景勝合點可被成様ニ被仰分之由候、其上ニても出京有間敷由候ハ、承濟可罷上由候て下向候之通物語にて候、爲御納得令啓候、尚追々爰元様子承合候而、可申越候、恐々謹言、

「朱カキ」

「慶長五年」卯月十一日

維新(花押)

少將殿

1088

「御文庫拾六番箱九卷中」義弘公御譜中ニ在リ

猶々養性申罷越、旁可申入候、

此四五日散々相煩申出京仕候、然者今朝 御家門様へ懸御目候処、庄内之儀者如何御座候哉と被成御尋候、去月十四日ニ下城申、源次郎罷出候由承候与申上候、其儀於事实者、鞍馬ニ有之幸侃後家子共かたへ被成御音信度候、去年以來終々菟角不被仰遣候、如此無事ニ相濟候へハ、不苦儀候哉、内々從拙者相尋可申由被仰聞候間申入候、東山などへハ御參候へ共、御家門様へハ無御參候、如何候哉、無御心元被思召候由、是又可申入旨御意候、此旨維新様へ可被申入候、恐々謹言、

「朱カキ」

「慶長五年」

卯月十二日

友枕齋

如貴(花押)

1089

〔本文書ハ一〇八八号文書ト同文ニツキ省略ス〕

1090

庄内之儀悉相濟由、從少將殿之書狀披見、得其意候、近日令上洛候間、期其節候、猶石川左衛門太夫可申候条、令省略候、恐々謹言、

「慶長五年」

四月十三日

家康(花押)

惟新

「義弘公御譜中ニ在リ」

「右正文、旧御番所御文書ニ番箱中國統新龜鑑中ニアリ」

1091

「御文庫四拾八番箱中」家久公御譜中ニ在之

態用一書候、仍幾度申候ても、庄内之儀貴所御かつてに罷成候事、到我等も外聞実儀大慶此事候、其方御満足之通察存候、然者御上様御煩、何共心遣存候処、此比被得御快氣候、目出度存事候、是又可御心安候、猶追々可申下候、恐々謹言、

「朱カキ」

「慶長五年」卯月十五日

維新(花押)

少將殿

「御文庫四拾八番箱中」家久公御譜中ニ在之

猶々上様御煩、此比ハすぎと能御座候而、今日者御幸八幡へ御參詣候間、可御心安候、將又先札ニも申入候景勝御覽之儀ニ付、伊那圖書頭殿去十日ニ爰元打立、會津へ下向候、毛利殿・増田殿・大谷殿使者同心ニて罷下候、様子聞得次第注進可申候、雖輕微之至、樽ニ荷并白鳥一持せ申候、誠御首信之しるしまてニ候、

此度貴所始而之出陳与申、天下之取沙汰無隱儀共候之処、庄内之儀思召候ニ罷成、我等大慶此事情、定而貴所満足可爲御同前候、如此之爲御祝儀、上様御使者被差下候条、乍次令啓候、尤別使を以可申候へ共、同篇之儀候間、無其儀候、定頃者庄内置目等被仰付、いよ／＼目出度相調候へんと存事候、將又此表今程別条無御座候、替儀共候者、追々可申越候、恐々謹言、

「朱カキ」慶長五年卯月十八日 維新(花押)

少將殿

「御文庫四拾八番箱中」家久公御譜中ニ在之

猶々内府様御貴所拜領之鷹下可申候間、鷹師御上

せ候へと、先ニ申越候へ共、餘鷹煩申候間、此節下

可申事難成存候、就夫小林殿へ頼申養生仕、さうをも二度仕躰ニ候、何共今程下申候てハ積申ましく候、殊ニ國元へ然々之鷹師無之事我等存候間、爰元ニて夏かいをさせ申候而、可進と存候、但貴所鷹師御上せ候而、可被飼せも御分別次第候、とニかくニ今程下可申事、中／＼罷成ましく候、折節任到來、蠟燭五十挺持せ申候、以上、

追而申候、御當家之馬之乗様、此節 龍伯様へ可被得御意事、不可有由断候、爲御心得候、恐々謹言、

「朱カキ」慶長五年卯月十八日 維新(花押)

少將殿

ふしミガ

「上書」少將殿 維新

1094 「御文庫四拾八番箱義久卷中」家久公御譜中正文御自筆トアリ

昨日以高崎弥六被仰越候条々、いつれも尤ニ候、御歌之事玄与へ被仰付候、或出來候欵、可然候、間之字之心無之由承候、こゝもとへも十首あまり見申候、三ニニッハ

間之字心無之候、くるしからぬかと見え申候、拙者歌ハ、
一こゑハそゝやそれともわきかたミ松の葉こしのやまほ
とゞきす 是かと存候、將又年ことのゑさうしの事、其
方より御のほせのやう承候、心々不申候、伏見より我ら
ニさして承候儀にて候、此草紙ハかのやのもたせられ候
ヲ、めしかへし候てをき申候ゑさうしにて候、其儀ヲふ
しミも存候て、うつさせ候するよし、被仰候哉と存事ニ
候、納戸衆書奉行まで申候モ、此方へもたせ給候へとこ
そ申越候へ、それより御のほせ候へとハ不申候か、いか
ゝ外聞候哉、無御心元候、然共御上せ候ハ、可然候、申
候事度々まかい候、齒かけ候て弁せつ不明故かと存候、
おかしく候、又能之具ニと存候て、久敷たしなミヲキ候、
もし今度入候事もやと持せ候、能之具ニめしたて候て、
をかせらるへく候、わき能ノシテノかり衣ナトニよさう
に存候、「本マ、」今日春山野之馬追仕候、廿五日
ニハかならず可罷越候、何事モさしい、そかれ可然候する、
恐く謹言、

「朱カキ」
「慶長五年」卯月廿二日

龍伯(花押)

又八郎殿

1095

「御文庫ニ番箱義弘公五卷中」「義弘公御譜中ニ在リ」

猶々當地へ於御下向者、得御意 内府へ様子可申上
候、但御用も無之候ハ、可罷出候、將又先日ハ、路
次迄御使札忝次第候、委曲奉期貴面候、以上、
急度令啓上候、今朝廿三日ニ大坂へ罷着、則 内府へ雖
可罷出覚悟候、貴殿様可有御下向候之条、相待可申候由、
旅庵が被仰越候間、今日者致延日候、若御用も御座候て
被成御下向候者、早々奉待存候、依御報、則我等者可致
出仕覚悟ニ候、御同名又六殿、此度拙者御供申罷上候、
旁被成御分別、御左右奉待候、猶貴面之時可得御意候、
恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長五年」

卯月廿三日

山口勘兵衛尉

直友(花押)

維新様

參人々御中

1096

「義弘公御譜中」

慶長五年六月十七日、内府家康卿爲景勝退治首途於伏
見、丁此之時、伊集院源次郎母弟共在鞍馬、有被渡界之
命、以故受之、下薩摩者也、

「御文庫二番箱義弘公五卷中」「義弘公御譜中ニ在リ」

猶々何様以參上可得貴意候、以上、

今朝者旅庵被下、忝奉存候、殊に従少將様之御使者、懸御目申候、御一書并御口上之通、懇内府へ爲申聞候、御念之入候段、忝之由被申候、貴殿様御筋氣ニ御座候間、明晚御出可被成之由爲申聞候、左様ニ候者、少將様之御使者も、其時可懸御目之由被申、委曲旅庵まで申入候間、不能一二候、恐惶謹言、

〔朱カギ〕

〔慶長五年款〕

四月廿五日

石川左衛門大夫

康通(花押)

羽兵庫様

人々御中

1098

「御文庫四拾八番箱中」「義久公御譜中正文在檢見崎喜兵衛トアリ」

猶々又八郎へも此等之様子、細々可被仰聞候、急使候条、尊老様まで令言上候、

追而奉啓上候、仍今朝 内府様へ罷出、庄内一着之御礼申上候、別而御氣色能、入來院又六・善載坊被召出、御前ニて御食被下候、隨而長尾殿之上洛延引ニ付、様子爲可被聞召、伊那圖書頭殿并御奉行中よりも使者を被相添、去月十日伏見御打立、會津へ下向候、必六月上旬之比者

可爲上洛候条、御返事申はなされ候へ、依其返事、

内府様御馬可被出ニ御定候、就夫伏見之御城可致御留守番之由、御面を以拙者へ被仰付候、當座言上候へ、何も御意之段承候、於様子者、御間之使迄可申上由申候而、御前を罷立候、然者爰元御知人中へも尋申候、各被仰候へ何之道ニても公儀候条、御下次次第仕候而、可然候へん由被仰事に候、伏ミの御留守番ニ相定候へ、人數等丈夫ニ不被召置候者、御家之御爲も不可然儀共候、其上天下之取沙汰も如何候へん哉と存候条、御人數之儀、急度上着候様ニ可被仰付候、伏見御城請取申候者、諸口多々在之儀候条、人數等過分ニ入可申候、よく被成御談合、兵糧以下相調、急速可被仰付候、庄内在陳わき諸侍も、めいわくニ可存候、雖然爰元ハ百石ニ三人役ニ被仰付、奥州へ出張之由候、當方之儀者御留守番候条、百石ニ一人役ニ被仰付候者、可相調欵と存候、自然於御由断者、我等事者不及是非、御家之御越度ニ可罷成候条被入御念、又八郎へ御熟談肝要ニ奉存候、伏ミ御城本丸之儀者、御滿様被成御在番、自余之御城者我等へ可有御頼由候、御滿様御役人一人并人數少々被召置、其外 内府様御手之衆者惣別めしつれられ、東國へ御下向有へき御

内存と相聞得候、何も善載坊可罷下候条、其節委曲可申

上候、恐惶敬白、

〔御譜朱カキ〕
〔慶長五年秋〕卯月廿七日

維新(花押)

龍伯尊老様

参人々御中

〔上書〕
龍伯尊老様

参

維新

〔家久公御譜中〕
〔正文在末吉住吉大明神社内〕

詠松間時鳥

和歌

少將忠恒

常葉なる松にちきりてほととぎすすいく久しさの初音なら
まし

夏日同詠松間郭公

倭歌

圖書頭忠長

岡野へのまつより松はあくる夜の木すゑをつたふほとと

きすかな

夏日同詠松間郭公

倭歌

紀伊守國貞

そことしもきゝこそわかねほととぎすやとりしらせよま
つの木かくれ

夏日同詠松間時鳥

倭歌

大炊助久正

ゆきめくるこゑかすかなりほととぎすひろきその生のま
つのむらたち

夏日同詠松間時鳥

倭歌

兵衛尉宗親

千とせまでこゑをきけとやほととぎす砌の松にそなれ來
ぬらむ

夏日同詠松間郭公

和歌

左衛門尉貞林

初聲はいつれの松の木すゑともいさしら雲のやまほとと

きす

夏日同詠松間郭公和歌

左衛門尉久時

いくとせかかはらぬやとの松か枝にきつゝもなれよ山ほととぎす

夏日同詠松間時鳥

和歌

雅樂助經宣

雨雲にもよほされつゝ時鳥さと馴くるや松のむらたち

夏日同詠松間郭公

倭歌

右衛門尉長泰

いつくにも啼はすくるなほととぎす軒端のまつに宿りなれつゝ

夏日同詠松間郭公

倭歌

左衛門尉忠能

いつくともきこそあへねほととぎす木ふかき松のかけに來ぬれば

夏日同詠松間時鳥

和歌

右衛門尉豊信

行かたはいつくなるらんほととぎすこゑのミ松にしはし残りて

右十一首之會紙爲法樂詠之、所以籠置住吉社内也、

1100

〔家久公御譜中〕

〔正文〕

追而鷹あまた御所持之由、肝要之儀ニ候、就中我等へ可預ため、見事之大鷹、種左へ被預置之由示給候、さてく大慶此事候、早く見申度候、京都も御鷹場御ゆるしなされ、一段鷹はやり出候由候、此比者しみたさやうの取沙汰も不承候、いつれ共急度可有上洛之条、諸事以面可申談候、恐々謹言、

〔朱力寺上〕

一慶長五年五月二日

義弘(花押)

又八郎殿

1101

〔北郷三久譜中〕

慶長五年五月四日、感三久七年軍勞、加賜采地千石、

〔北郷氏藏〕

加増目録

式千七百卅石之内

庄内下川路有水

高千石

已上

慶長五年五月四日

平田太郎左衛門

増宗在判

圖書頭

忠長在判

北郷作左衛門尉殿

〔本田氏藏〕

返地目録

薩州鹿兒嶋之内犬迫村

高六十八石二斗八升

久木田之門

高拾貳石壹斗九升

伊集院郡村
内屋敷

惣合八拾石四斗七升

右阿多爲返地、被宛行者也、

慶長五年

五月五日

平田太郎左衛門尉

増宗(花押)

圖書頭

忠長(花押)

本田六右衛門尉殿 (正親)

幸便之条令啓上候、仍其地御無事候哉、此方も上下共
ニ無何事候、

一長壽老も去廿四日ニ御着船被成候て、伏見へ此二日ニ
上着にて候事、

一我々下向之事も、此六月者必可罷下候、爰元不如意之
事、御推量有へく候、御見次之事も申下度候へ共、と
ても申ても、其元可難儀条不申入候、

一先書ニ如申入候、爰元疫病はやり候て、笑止ニ候、我
等召烈候夫丸も、やミ申候て事關候之事、

一長藏ことやミ出来候故、長藏をにけ候て、南之方へ何
れも被罷越候、

一宰相殿様も餘り爰元やミ候事□御領地攝津の内かや
のと申在所へ、御中宿被成候事、

一かやのへ御供之人衆へ、枕枕老・有川助兵衛殿・廣瀬
吉左衛門殿・伊集院左京殿・新納左右衛門殿・和田右
京殿・有馬藤七兵衛殿・波多彦兵衛殿、但此三人へ伏見
かやのかけ候て被居候、加藤平七殿・井上勝右衛門殿
・邊牟木彦兵衛殿、此人衆にて候、ふしミへ御留守居

之人衆へ、旅庵老・有川与左衛門殿・帖佐彦左衛門殿

・北村六右衛門殿・稻留五郎右衛門殿・池上宮内左衛

門殿・岩下弓兵へ殿・堀諸右殿・上原弥六殿・我々罷

居候、又被病候人衆へ、五代友喜・本田源右衛門殿・

妹尾左右衛門殿・健軍猪右衛門殿・桑畑城介殿・宮内

二郎左衛門殿・友賢之子息助九郎殿、其外夫丸等へ數

しれす候事、

一色々御祈念共有之事ニ候条、自今以後ハ快氣可申かと
存候、

一先書ニ申入候様、下女之代を以、今年ハわたを御求被
成、袖を引候様御才覚尤ニ候、

一爰元びた錢當分遣申候、其元ころ錢之内ニ、びた・永
樂錢之類御座候者、御あつめ有へく候、

一切米被下候人衆へハ、何れも知行被下由候、さてハ我
々へも知行廿石之はず被下候、加増分之所務之事被入

御念被納置候て、我等へ可被下事頼上候、

一御近所衆へ、御心得被成候て可給候、

一留守中火用心、堅可被入御精事、

一谷口弥六左衛門殿御頼之茶わん、爰元ニて人々へも見
せ申候、種々精を入候へ共、かいて無之候、就中ねや

すく申候て、如國之持歸可申と□候事、

一種々申度儀多候へ共、急候まゝ、先々閣筆候、よめま

しく候、猶追々可得御意候、恐惶謹言、

五月五日

同甚作

重親(花押)

福崎大膳亮殿

參人々御中

1105

「御文庫ニ番箱義弘公十五通」「家久公御譜中ニ在リ正文有卷本トアリ

以上

今度山口勘兵衛殿上洛ニ付而、入來院又六・善載坊爲

御使令上洛候、口上之段具ニ承届、我等も大坂へ罷下

被仰上通、内府様へ言上候、様子被 聞食、別而忝

御意候、委曲善載坊へ申含候条、可申達候、

一庄内之事属御案利、都鄙之外聞不可過之候、愚老之滿

足可有御察候事、

一源二郎事被召出、知行貳万石被遣之由、内府様御意

与申、尤之御分別候事、

一無御失念茶碗送給候、祝着之至候、涯分秘藏可申候事、

一奥州へ於 御出張者、伏見御城番可被仰付由、内府
様御面談ニ被仰聞候、然者御留守番之儀、心遣大方に

てハ相調ましく候、其上人數等丈夫ニ無御座候てハ、
諸口之御番致首備間敷候、様子細々善敷坊へ申聞候間、
被聞食納得專一候、恐々謹言、

〔采カキ〕
〔慶長五年〕五月五日

維新(花押)

少將殿

〔義久公御譜中〕

〔正文在大乘院〕

掟

一咎人被拘事、可依其罪之輕重、縱雖格護候、於重科之
輩者、無吳儀可被返出候、然者到其時、可被致迷惑之
間、其心得を以可被召置事、

一被成御折檻候者、御侘之時も被糺輕重、かろくしく
無之様に可有分別候、就中當時者、無其遠慮御侘被申
候事曲事ニ候、然間檀那之納得等も迦、寺家も被失面
目候条、能く罪之淺深遠近を思慮尤ニ候事、
一天下以御下知諸寺諸社令勘落、當分之立柄被及迷惑候、
雖然以時分可有沙汰候欵、其間者何と様ニも可被成堪
忍事、

慶長五年

五月十一日 龍伯(花押)
大乘院

〔御文庫四拾八番箱中〕〔家久公御譜中ニ在之〕

猶々本田与兵衛、去十八日ニこゝもとへ上着仕候、
被仰上重疊細々承届候、同十九日ニ案内者を相添、
大坂へ差下申候、御返事聞得次第可申越候、將又
龍伯様々我等下申候鹿毛之馬、父馬ニ可被入由、貴
所へ被仰候通、与兵衛申候、併此節者時分柄もあつ
き儀ニ候、殊ニ來春之事候間、先々其元へ被召置可
被乗せ候、自然出合も候へ、龍伯様へも其理可
被申候、以上、

幸便之条令啓候、仍貴所御上落之儀、あまり延引ニて
ハ如何可有御座候哉、其故者 内府様奥州會津への御
出陳、來月中ニ相定候、然者庄内之儀ニ付、被添御心
候儀、御存知之前候条、不及口能候、早々被成上落、
せめて其御礼可被仰上事肝要候、時分柄も御遅引候て
ハ如何可有之欵と、我等存寄通申越候、御納得專一候
事、

一今日十七日ニ承付候、源二郎母此十日以前が大坂へ打

詰罷居候、定而身上之可爲才覺と存事候、毎々如此之慮外人ニ候之条、此方へ今分ニ召置候ても如何候へん哉、又罷下候而も、後日之首尾を不存候条、能く御談合可被成よし、先度善載坊を以申下候キ、猶以其分ニ存事候、此等之様子我等如此申下候通、龍伯様へも言上候て、様子急度可被仰上候、何之道ニても、源二郎母一着之儀、御由断有ましく候事、

一加藤主計殿事、此度會津立御供雖被望候、御留守之儀者國元へ被下置之由候、是又爲御心得申入候、恐く謹言、

〔朱カキ〕
慶長五年五月十七日

維新(花押)

少將殿
まいる

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在之」

猶く帖佐留守居之者共へ、以条書神五郎進退之儀申下候、此条書可被御覽候、神五郎狂氣仕候て、不可然様子以下、竜伯様が有様念比ニ被仰聞候、帖佐留守居之者共より申のほせ候へ、種々用捨仕候ておよそ申上せ候、如此ニ候之条、悉皆其元有筋を被

聞届、能様ニ被仰付候て可給候、就中帖佐がすこしの見つきも無之候間、手前借銀共仕躰ニ候、かやうの儀もよくく被仰付候て可給候、隨而高雄山木食より御札御護被進之候、此便ニ下し申候、たしかニ相届候由、便宜次第早く可被仰上候、以上、去月廿八日從日向八代之書狀、去十二日到來、令披見候、

一先以海上無吳儀着津之由、千萬目出存候、

一洪水故八代へ數日滞留之由、御窮屈ニ御座候つらんと存候、

一從秀頼様御拜領之御馬、本田六右衛門尉へ申付、はや差下候、定此比者可爲着國候、御満足之段自是察存計候、

一源二郎弟共、加主を頼居候へ共、内府様が被仰付、今程者くらまへ被遣置候始末之儀共、先度相良新右衛門尉へ相含差下候、其以後比志嶋大膳亮をも差下候間、今更不及書載候、

一先度從竜伯様以御書被仰聞候、上并甚五郎事、慮外至極之振舞、以之外之儀にて候、狂氣にても在之歎之由被思召候、諸人之取沙汰者、我等か入玉し爲にて可

在之と、人々申あひ候由被仰聞、誠々おとろき入候、かやうの儀諸人之目口ニあまり候共、我等へ可申聞人あるましく候処、被聞食付候通、無御腹藏被仰聞、乍勿論忝存候、然者於富隈神五郎弥無筋事を申ニ付而、親類之者共へ被仰付、籠居之躰にて被食置之由、被入御念、弥被添、尊慮候段、忝共中々申者疎ニ候、竜伯様へ先度御請如申上候、神五郎出水之置目申嘸候へとハ不申付候、貴所如存知、出水置目之条書石治少以御談合被仰出候、其条敷を神五郎・桂太兵兩人ニ持せ候て、比志嶋紀伊守・北郷作左衛門尉・入江殿・橋本殿、条書之上を以、下々無猥之様ニ相談肝要之由、申きかせ候て差下候、此外ニいつミ表にて鹿鳥など取候儀、一切停止たるへき由、并瀬崎野々母駄所持之地下人百姓共於在之者、憲法ニ買求候而可食置之由、此兩条者右之置目狀之外ニ申付候、さやうニ候て、我等住所ニ可成所を見合候て、早々可罷上之旨申きかせ候外には、何たる儀をも申きかせず候、こと更出水表諸百姓之置目共、神五郎取沙汰仕候へとハ努々不申付儀にて候、然処狂氣仕者之所行を、我等か入玉し爲にて可在之たと、諸人の取沙汰ニなり候事、愚老一段迷惑仕

候、尚々神五郎其外國元様子被聞届、可預注進候、一旅庵事、神五郎振舞慮外之段、有様を拙者へ可申届之由、竜伯様被仰含被差上之由候へ共、然々の儀も我等へハ不申聞候、やうく出水表ニおいて慮外之置目などを申付、又女をこしニのせ諸所をまへしたるなど、此兩条を大方ニ申あやつり、種々あへしらひのミにて、少も神五郎氣任せの振舞仕候て、うへの爲あしき事とハ不申届候、又白坂七右衛門尉も此比國元罷上候間、たつね候へ共、是も然々の儀我等へハ不申候、早竟彼兩人之者共未練者にて、傍輩を主人ニ思ひ替たる迄ニ候、向後たのもしからぬ存念、無是非次第候、然間た々大方ニ承候て、役人の上者物ことに諸人わろ口も在之習に候間令糺明、以其上可申嘸と内々存候処、今度貴所書面披見、まことにくおとろき入存候、人の口には戸かたてられぬと申候間、さためて國元取沙汰其隠有間敷儀にて候つる物を、有様直申きかする者も無之故、失外聞候儀、無念千萬候、一惣別人を持候ハぬ故、何事もうへの爲を存、申上人も無之候、神五郎慮外之振舞も、最前承付候者致折鑑、切々くせ事之由申きかせ候へ、其身滅亡仕程の儀に

は立のらぬ事も可在之候歟、もはや如此成立候てよりハ、神五郎身躰之儀者不及申、拙者ため一段はいなく存候、

一廿萬石之藏入之内七八萬石もあれ候へき由、さてく笑止之至りニ候、取分帖佐方藏入荒地、多之由候、如此之儀も努々此中不承付候、如示給當時者少路普請なともあまり不入儀にて候、かやうの儀ニ夫丸をつかひ耕作不調儀、以之外笑止之至候間、去年已來高麗よりもきひしく藏入夫丸水夫などにも、あまためしをくましき由切々申付たる儀ニ候、さやうの首尾も無之、耕作あらし候段、くせ事深重に候事、

一神五郎、諸所にて銀子鳥目などを人へ遣し候由、被聞付候哉、是又我等始而承候、貴所如書中狂氣仕者にて、よしなき事ニ御物を取くれ候とて、其儀ニ請取置候者者不可然候、被相改取もとされ候へきよし承候、尤存候、我等前よりも帖佐へ稗申下候間、弥被仰付候て可給候、

一神五郎、於諸所過錢を相懸、過分ニ在之由きこえ候、此納拂方之儀、たしかに被相改候て可給候、分國之者共へ相懸たる過錢、むさとなるへき儀にてハ無之候、

已來諸役人之爲ニ候之条、被入念被仰付候て可給候、

一此狀調飛脚申付候処、去月十九日之付にて、從 竜伯様被成下 御書、神五郎狂氣亦無其紛、銀子米錢刀以下人ニ取くれ候儀、以之外にて候由被仰聞候、彼飛脚一昨日上着候、神五郎所行承候て、いよく絶言語計候、然上者諸人之見せしめにもなるへきやうニ嘸度儀に候へ共、當分狂氣之由取沙汰候之条、先籠ニ入置、以其上可申嘸之由、帖佐へ申下候、惣別貴所へ得御意候へと申付候間、以御分別能様ニ被仰付候て可給候、

一重言ながら、帖佐方藏入之始末、今度入江仲兵衛尉殿物語昨日承候、萬々おとろき入候、藏入夫丸などを召仕候儀、無正躰候由きこえ候、いつれ共此元遠方之儀候条、何を申候ても不調候間、貴所在國中之儀者、別而頼申候、猶追々可申候、恐々謹言、
〔朱力字〕
〔慶長五年〕五月十七日 義弘(花押)

又八郎殿

1109

〔家久公御譜中〕

故殿下秀吉公召我於薩摩、文祿三年、於京都爲兄之後嗣所補薩隅日守護職、而後直渡于朝鮮國、勞軍務者五十年、

既歸朝、翌年之春在于城州伏見之際、手自斬戮逆臣伊集

院入道幸侃、其子源次郎在國止出頭構數个所城郭、自去

年夏至今年春敵于我焉、諸方逼渠者甚急也、因茲漸窮降

參、故國中已靜謐矣、丁此之時、巡見于領國封疆新定法

度、欲古往之補不足減有餘、今來之國治家齊身修也、此

事未終、以故上達上京遲延旨於京都、由是 内大臣家康

卿賜高書、記左、

1110 「正文有卷本」

節々御折紙、祝着之至候、其元緩々^{マカ}与仕置等被仰付、左

右次第御上落尤候、猶石川左衛門大夫可申候条、令省略

候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長五年〕五月廿日

家康(花押)

薩广少將殿

〔右ノ正文ハ、旧御番所御文書ニ番箱中國統新龜鑑中ニ在リ〕

1111 「財部日光神仕由緒帳之内」

日光神領

財部宮□之内

一浮免

竹之下
中田老段六畝 基四郎

同
式石六斗四升 同人

同
中田三段八畝四步 同人

大坪
五石三斗三舛六合 同人

同
中田三反一畦 同人

霜月田
三石老斗七舛 同人

同
上田老反廿步 同人

中島
老石七斗六合 同人

同
上田老反二畦 同人

同
老石九斗二舛 清右衛門

同
中田二畝八步 清右衛門

彼岸田ヒラマ田
老石六斗八舛 弥左衛門

同
中田二畝八步 弥左衛門

坂之下
三斗老舛七合 志摩丞

同
上田七畝十步 志摩丞

山下
老石老斗七舛 伴左衛門

同
下田老段四畦二十二步 伴左衛門

同
老石七斗六舛八合 善左衛門

同
下田老段老畦十步 善左衛門

同
老石三斗六舛 善左衛門

田數合老町五段四畝十五歩

分米廿石六斗六舛七合

右之納を以、年中之祭礼無懈怠可相納者也、

慶長五年五月廿二日

(山田) 理安判

(伊集院) 抱節判

大宮司

1112

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在之」

猶々御人衆可被差上時者、よくく被入御念、主取之仁可被仰付候、此跡ニかわり、氣任之事迄ニ候、可罷上人衆へ御法度之儀然々被仰聞、さしのほせらるへき事、御由断有ましく候、以上、

卯月廿一日之書狀、五月十八日ニ於伏見令披見候、仍貴所事、此比御上洛可被成覚悟候処、從 内府様暫御くつろき候様ニと被仰下候ニ付、延引之通承届候、就夫 内府様へ御礼爲可被申上、本田与兵衛被差上候、則案内者相添大坂へ差下申候、別而御懇ニ被成 御意、御書被差下候条、持せ下申候、猶本田源右衛門尉近日可罷上候間、其砌委曲可被仰上之通、令得其意候、隨而會津立御座候ニ付而、貴所御供衆之分被召置、其外之人數早々可被差

上事、御由断有ましく候、爲御存知候、恐々謹言、

〔朱力書〕
慶長五年五月廿五日

維新(花押)

少將殿

まいる

1113

〔家久公御譜中〕

〔正文〕

以上

今度本田与兵衛尉爲御使罷上候ニ付、重疊被仰上候、細々承届候、就夫帖佐うりうのを城ニ可被取せ由被仰上候、うりうの事、吉田・蒲生・帖佐・山田・加治木、此五ヶ所を外城ニかまへ、殊うりうの城も丈夫成在所ニ候、其上所柄ざりとてハ見事成とちゐに候之条、御座所ニも罷候ハんと、此以前も出合候、雖然北ニ流水在之而、さまざま悪き地と申候、爲大將人一日も可有御座事御無用之由、此跡ガ爲申仁有之儀候、然ハ新地を被取構候者、諸侍も百性以下も迷惑可仕候、其故者在京仕候程之侍ハ無隙儀候、百性等ハ耕作を不仕、普請一篇ニ候ても、急度相調ましく候哉、然時者不入事ニ手間を被入候ハんがハ、かこ嶋東福寺之御城を結構ニ被相構、しゝつの川ガ東福

寺之方を惣別籠ニ取囲、普請ニ被入念候者、いかやうにも可罷成哉、其外かこ嶋内ニ御城ニ可罷成在所、可被見立事肝要候はんや、惣別かこ嶋事者、御當家御代々御座所と申、御先祖之御寺にも新地へ悉可被引越事、とても二三ヶ年内ニハ致首尾ましく候欵、今之分ニ御座所を鹿兒嶋ニ被相定候者、當時之御屋形之地も、四方ニ被爲石墻・大堀普請稠被仰付候者、うりうのを新地ニ被仰付候はんやハ、輒可有成就欵と存候、先々我々存寄候分申下候、何れも 竜伯様へ被得御意、御下知次第可被仰付候、我等かやうに申候通、御申有へく候、餘者期後音之時候、恐々謹言、

〔朱力キ〕
「慶長五年」五月廿五日

維新(花押)

少將殿
まいる

1114 「義久公御譜中正文在霧嶋山華林寺トアリ」

掟

一 咎人被拘事、可依其罪之輕重、縦雖格護候、於重科之輩者、無吳儀可被返出候、然ハ至其時、可被致迷惑之間、其心得を以可被召置事、

一 被成御折檻候者、御任之時も被亂輕重、輕々敷無之様ニ可有分別候、就中當時者、無其遠慮御任被申候事曲事ニ候、然間檀那之納得等も迎、寺家も被失面目候条、能々罪之淺深遠近を思案尤候事、

一 天下以御下知諸寺諸社令勘落、當分之立栖被及迷惑候、併以時分可有沙汰候欵、其間者なにとやうにも可被成

堪忍事、

慶長五年
六月二日

龍伯御判

花林寺

〔上包有之〕
花林寺

龍伯

〔外ニ同年五月十一日、大乘院并福昌寺御宛之御同案有之候得共略ス〕

1115 『福昌寺文書ノ内』

掟

一 咎人被拘事云々、「同案故略ス」

慶長五年
五月十一日

龍伯(花押)

福昌寺

1116 「御文庫四拾八番箱義久卷中」「家久公御譜中ニ在之」

あまりく事關候ニ付、おく方奉公人之事申候處、相良新右衛門尉ニ被仰付候、可然存候、早く至上洛、御奉公可申事尤候、恐く謹言、

〔朱力キ〕
慶長五年六月廿五日 龍伯(花押)

又八郎殿

1117 「御文庫二番箱義弘卷中」「家久公御譜中ニ在之」

猶く彼兄弟之内ニ一人ハ爰元ニ留置申度候、乍去氣任深重候間、合點可申事不存候、以上、

急度用一翰候、仍 内府様爲上使、山口勘兵衛殿伏見へ御越候而、小傳次兄弟三人共ニ可致見參候由被仰聞候条、五月拾九日ニ見參申候、然間鮫嶋小藏罷下候時、其段申渡候キ、其後源二郎母并子供三人、山口勘兵衛尉殿を憑存、下國仕度之由申候、源二郎も左様ニ爲被存由、山勘被仰聞候、源二郎其存分ニ候ハ、於其元貴所へ可被申儀候處、到我等被申儀無心元存候条、國元へ申下候而、彼到來次第返事可申之通、山勘殿へ兩度申達候、然處今度 内府様御進發之時、山品迄御送ニ罷成候處、伊那殿・山口殿以御兩使、小傳次兄弟并母之儀、早く可差下之

1118 「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在之」

猶く會津表之儀、未何共不相聞候、替事候者可申候、以上、

段被仰聞候、其上爲 御内證承候様子者、源二郎母兩三度大坂御城へ致推參、二三日宛罷居、殊三度目ニ 内府様へ直訴仕、種々之儀雖申上候、言葉不通故、委不入御耳候、ケ様成者を上方ニ召置候てハ、御奉行中へも罷出、

むざとしたる事共申出候へ者、旁以不入儀候条、是非共早く召下候へと被成御意候、最前者其方之一左右相待可申之由申候へ共、右之分ニ被仰出候間、可罷下之由、近日可申聞候、彼人國へ參候て、自他國之人を誑候ハ、源二郎事も譬十か七ツ八ツハ心中相違可仕事指掌候、然時者可爲御心遣と察存候へ共、上方ニ逗留仕候へハ、結局惡逆深重候間、弥以御爲不可然候、所行之様子ハ、更難載紙面候間、先く如此候、旁爲御心得申候、猶期後音候、恐く謹言、

〔朱力キ〕
慶長五年七月二日 維新(花押)

少將殿
まゐる

先度比志嶋紀伊守罷上候刻、照高院様江御書物之儀被申

上候、被遊被下候間、先日五常尺差下候、參着申候哉、

只今三社詫宣、中務殿へ誂申候間、可有御請取候、表法

繪之事、爰元ニはやり候やうに、隨分念を入申付候条、

可被得其意候、恐々謹言、

〔朱力キ〕

慶長五年七月四日

維新(花押)

少將殿

1119

〔御文庫拾六番箱八卷中〕

已上

伊作地頭職、文祿四年拾二月被仰付候、然者慶長五年庚

元年、御寶物御虫干自身仕候、右四年ハ從 公儀被撰人

之被仰付候キ、其謂慶長五年ハ駿伊作へ罷移故ニ候、爲

厥證跡如斯者也、

七月七日

伊集院肥前入道
元(花押)

〔此書中御寶物云々、文祿四年十一月五日ノ三通照考スヘシ〕

1120

請取申七分出銀之事

高貳百石者

内 老石者殿役分

合鳥目四拾六貫八百三拾三文

銀ノ貳百八拾壹匁者、但日數之外故、壹倍之算用也、

七分皆濟并殿役濟、

慶拾五七月十日

渡邊市左衛門尉(花押)

滝間傳右衛門尉(花押)

本田助丞殿

參

1121

〔家久公御譜中〕

石田治部少輔三成入道稱古曆、忽企陰謀將拒關東、而陽曰、

秀頼之旨也、催西三十三個國諸侯、而欲赴東國、此時

義弘公在于城州伏見、從兵少寡、由是進退無何之如、而

請增勢於薩摩者甚急也、然而匪翹忽不能發多兵、且復遠

國海路亦不自由、不得連行乘船於要地、以迄遲緩矣、

1122

〔御文庫四拾八番箱中〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

猶々かミさま御進退、何方へ移可申哉と談合最中候、

中務太夫殿も此方にて候間、諸事相談仕候間、聊非

由断候、

1123

「御文庫ニ番箱義弘公家久公七通中」「家久公御譜中ニ在リ」

武庫御無事之由候条、可御心安候、以上、

急度申入候、從兩三人如此之書狀到來候之条、不及是非、今日十五出船候、兔角 秀頼様へ可遂忠節之由言上候、

急度申越候、仍爰元亂劇ニ罷成、無是非次第ニ候、左候へへ、手前無人にて、何を申候ても罷成間敷と迷惑此時に候、因茲在京之人數并船加子以下、丈夫ニ可被仰付之由、節々雖申越候、無御合點候哉、無其首尾笑止之至候、貴所御下向之時、我等茂御家之爲御奉公、高麗より打續致在京候間、自然之時者見捨候ましき哉と、堅届申候へへ、身命之限へ見捨有間敷之由、返事承候キ、其段于今於無相違者、人數等被差上、御入魂可爲本望候、人數も遅々罷上候者、徒事ニ可罷成候間、急ニ可被仰付候、乍去其元迄も可被及御氣遣事程有間敷候、然時者先國元無恙様ニ御才覚尤候、聊以不可有油断候、委細之旨、鹿嶋太郎兵衛へ以条書相合候間不具候、恐々謹言、
〔朱カキ〕
〔慶長五年〕七月十四日 維新(花押)

少將殿

まいる

1124

「御譜中」

(本文へ一〇九六号記事ト同文ニソキ省略)

各指圖次第迄候、万吉、重々可申入候、恐々謹言、
〔朱カキ〕
〔慶長五年〕
七月十五日 藝中
輝元(花押)

「宛キレテナン」

1125

「御案文御文庫廿三番箱十四卷中」

急度啓上仕候、仍爰元亂劇ニ罷成、不及是非次第ニ候、左候へへ、手前無人にて候間、何を申ても罷成間敷候、迷惑仕候、早速御人數を被指上候而可被下候、於様子者、鹿嶋太郎兵衛尉へ以条書相合候之間、不能一二候、猶可得尊意候、誠惶、

七月十四日

龍伯尊老

尚々かミさま御進退、何方へ移可申成と談合最中候、中務太夫殿も此方にて候間、諸事相談仕候間、聊非由断候、

〔御案文〕

雖未申通候令啓候、今度内府貴國へ出張ニ付、輝元 秀家を始、大坂御老衆小西・大刑少・治部少被仰談、秀頼様御爲ニ候条、貴老御手前同意可然之由承候間、拙者も其通候、委曲石治可被申候、以上、

七月十五日

羽兵入 惟新

景勝 人々御中

『御文書』〔写御文庫廿三番箱十四卷中〕

急度申入候、今度景勝發向之儀、内府公上卷之誓紙并被背 大閣様御置目、秀頼様被見捨出馬候間、各申談及鉾楯候、内府公御違之条々、別紙ニ相見候、此旨尤と思召、大閣様不被相忘御恩、賞候者、秀頼様江可被成御忠節候、恐惶謹言、

七月十七日

長大

正家判

増右

長盛判

徳善

玄以判

薩广宰相殿 (義弘) 人々御中

1128 〔中務大輔豊久譜中〕

慶長五年五月十二日、首途於佐土原乘舟船到上方、在城州伏見也、未經數月關西諸侯皆以賜歸國暇、由茲豊久亦六月五日、辭伏見下大坂矣、丁此之時、石田治部少輔三成背 家康卿謀拒關東、合心於長尾氏・佐竹氏等、催關西數十箇國之兵、太守義弘與 家康卿深有盟會之儀、故欲入伏見城堅守之、而守將島井彦右衛門尉・内藤彌次右衛門尉固辭不入、雖曰再三請之終不許諾、不得已而與一揆、熟按勝敗利鈍、家康卿之干戈、其銳利鳴于日域四方、石田氏・毛利氏之干戈、未嘗聞一戰之有銳利、後日之敗走何可疑乎、豫慮後敗不與一揆、則如當日之不逃急難何、不得已而隨一揆者、是乎非乎權乎未知之也、於茲八月朔日、先陷伏見城、然後發向於美濃州、先陣於洲侯、未經幾程退去於大柿、其後石田氏・大谷氏・長宗我部氏以下諸將群聚駒野、以決評議、而後退關之原去、定戰場於此地、待關東軍衆之向來、而欲較勝於一戰也、

「樺山兵部大輔忠助譜中」

慶長五年庚子六月中旬、奥州之長尾某企叛逆、其陰謀既露顯、故 家康卿爲攻平於件凶徒、發向於城州伏見、又亂臣石田治部少輔合心於長尾、背 家康卿催關西數十州之兵、丁此時、 兵庫頭義弘主在伏見、而會石田催之難去、故不得已、而與治部少輔俱發向于美濃國、爰尾張州清洲之城主福島左衛門大輔變石田之與同、告件之旨趣於家康卿、是以家康卿止東征、赴京師之路於濃州關之原、東西之軍勢共以得相逢、兩軍競進而爲合戰、未決勝負之際、味方軍中有筑前中納言者、逆戈却討關西之軍、以之故味方敗走之旨、有告來于薩隅者、雖然未分明、九月廿四日、紹劍候富隈見于 龍伯法印、于時蒙日州佐土原警固之命、不得辭而同廿八日之晚景進發、經三日而著佐土原、聽半夜之鐘聲、于時 義弘主者經伊勢・伊賀・大和・河內・和泉、而解纜於堺之浦令赴西海、中務大輔豊久者於關之原有遂戰死之聞、又伊東之家臣有稻津掃部助者、發於上方三五日已前所下國也、臨此時、伊東往昔不知行之諸所有欲押領之告、且亦庶民欲爲伊東之家民者多矣、吾今欲人和而不能、只依地利量天時耳、 義弘主已著船於細島之岸、今夜者寄一宿於財部市中之旨忽然告來、即

使一价爲言上曰、無恙下向、國家之大慶無可比類者、然而又恐時刻之移佗領矣、神無月朔、自鷄鳴至平旦、當宮崎之方發鐵炮之聲無間斷、所以爲不審也、及于巳時有告來者曰、伊東氏發軍衆陷宮崎城矣、然則佐土原之危急可有近邇、蚤動者多矣、紹劍曰、敵軍若寄來佐土原、則加勢之軍兵宜遮敵之跡、如此則敵軍豈有一人之得遁去者乎哉、 義弘主者發於財部至於佐土原者午時也、因茲地下之士卒各以得勢之際、申時發佐土原赴八代矣、故士卒等失氣力、且豊久之老母含恨落淚曰、欲 義弘主之追後曳裾而留焉、若有不得留、則從後當至于隅州也、于時使樺山孫左衛門尉達老母曰、親子死別之歎欲止無言、雖然佐土原者家久・豊久二代之住所、而今去此城往佗邦可乎、不如慕家久・豊久之居處終身於城裏、如此則豈不有名譽之至乎哉、老母屈理即應諾、因茲士卒亦落著也、余來日日雖待加勢之軍、更無來者、經十日而後平田新左衛門尉・肥後内膳正來著曰、此外無到者也、

廣原・新名イナヅ爪等之領知者、所以經宮崎城下之地也、今年未爲收納、故地下人等欲刈杭稻致運送、而已過件城下、于時城裏之敵軍忽然發出、競進欲討殺、味方者以稻刈爲先途將以引退、漸向日暮、敵軍以日暮爲得其時、迄于佐

土原六坊之上追來、且及于新山口城麓放火者也、雖然二之城門者平田加賀入道堅閉而爲警固、紹劔欲爲發向致防禦、而野心之族不鮮、是以堅城裏不爲討敵之籌策、爰家臣等向敵軍盡筋力爲防禦者不緩、故敵軍已退去、味方乘勝追到于廣原之邊、隔一橋而相戰、又敵軍敗而將引退、于時斬得敵首者八員、而後歸于佐土原畢、然而此事閉口不言、如何者、豊久者石田之與謀叛遂戰死、又且恐此境合戰之有聞也、及冬日皆同爲和平、故紹劔所以歸鞍之揚鞭也、

右數个條、紹劔有自書之記、其卷首曰、慶長十年神無月、六十六歲之翁、記此書云云、又卷末有一首之歌、今年より三十「六カ本ノ、」か外を安經て百の翁と人に云れん 紹劔 慶長十年雪月吉日云、

〔中務大輔豊久譜中〕

〔写〕

〔本文書ハ一二七号文書ト同文ニツキ省略ス〕

〔朱カキ〕

〔慶長五年〕

七月十七日

長大

正家判

増右

長盛判

薩（義弘）侍從殿
人々御中

徳善
玄以判

〔義久公御譜中〕

〔案文有之〕

去月廿五日之御書札、昨日廿一日到來候、然者以条書被仰越旨、委承届候、就其我等可爲上京之由候、得其心候、此元へ者今月初カ其由申散候、左様ニ候ハ、定自貴方早打可被差下事ニ候へ共、未無其儀之間、唯雜説にて候ハんと存由断候、殊とく相定たる由候間、早く被仰下候者、支度彼是可申付物を、遅く故安事纏頭之儀候、此外条々之儀者、自鹿兒嶋可有返事儀候間、不能書載候、隨而源二郎弟兩人致下國たる由候、又母・小傳次事罷下由候、既ハミへ可爲着津之由候て、山下所まで宿之儀申越候、此由空入道へ相尋候へは、曾不存由申候、親子之間ニ一人者可被召留事候、何とて皆々被差下候哉無心元、猶委曲者期上洛之時候、恐く、

〔朱カキ〕

〔慶長五年七月廿二日欵〕

「義弘公御譜中」

「案文在新納仲左衛門忠雄」

覚

幸侃

一伏見御城本丸・西丸之間ニ御番可仕之由、及兩度ニ雖

申理候、無御納得候事、

一如右御城内へ不致在番候者、大坂へ罷下、秀頼様御

側へ可致堪忍存候事、

一秀頼様 御爲、可然儀ニおひてへ、各御相談次第と安

國寺へ申候事、

一安國寺御留之事、

一伏見・大坂之しまり之事、

一増右の參候書狀、小攝へ遣申候事、

一同名中務太夫、爰元へ召留候事、

一御奉行衆之内御一人、伏見へ御在番候事、

七月十二日之夜半、大坂へ旅庵被差下御条書之案文也、

〔朱力字〕

〔慶長五年七月〕

「御文庫廿三番箱十四卷中 義弘公 御案文」

覚

一伏見御城本丸・西丸之間ニ御番可仕之由、及兩度ニ雖
申理候、無御納得候事、

一秀頼様 御爲、可然儀ニおひてへ、各御相談次第と安

國寺へ申候事、

一安國寺御留之事、

一伏見・大坂之しまり之事、

一増右の參候書狀、小攝へ遣申候事、

一如右御城内へ不致在番候者、大坂へ罷下、秀頼様御

側へ可致堪忍存候事、

一同名中務太夫、爰元へ召留候事、

一御奉行衆之内御一人、伏見へ御在番候事、

七月十二日之夜半、大坂へ旅庵被差下御条書之案文也、

〔此御案文、月日無之〕

1134 「御文庫廿三番箱十四卷中御案文」

爰元爲御見廻御札拜見、本望之至候、如承此方も雜説さ

ま／＼申候ニ付而、御奉行衆迄へ度々申入候、因茲入御

念、町方火之用心等之儀被仰越候、高麗から嶋以來、得

御意候辻、于今無相違御心付之段忝存候、然者當地可致

御番之由、從 内府様被仰付候間、御發足之砌、誰然々

御人衆被仰付候者、其御下ニ參候て御番可仕之由雖申上候、一途之以書立條々得御意候内、御返事無之東國へ御

下向候、左候得ハ、當地之事或陳立、或大坂へ被引越、

當分ハ誰人も無御座、我等式一人罷居躰ニ候間、千々萬

々心遣ニ奉存候、乍不申愚老事、

秀頼様御奉公一偏ニ

奉存外無別儀候、御方环儀共御座候者、節々可被仰聞候、

猶可得御意候、恐惶、

〔此御案文、義弘公々誰江之宛書不相知、月日茂無之〕

〔義弘公御譜中ニ在之、七月十三日、御宛書生雅樂入様御報トアリ、

片書ニ案文在新納仲左衛門忠雄トアリ〕

〔義弘公御譜中〕

〔案文在新納仲左衛門忠雄〕

〔本文書ハ一二二五号文書ト同文ニツキ省略ス〕

〔全上〕

〔案文在新納仲左衛門忠雄〕

〔本文書ハ一二二五号文書ト同文ニツキ省略ス〕

〔御文庫四拾九番箱中〕義弘公御譜中案文在新納仲左衛門忠雄トアリ〕

〔本文書ハ一二二六号文書ト同文ニツキ省略ス〕

〔此御書、御案文被御判ナシ〕

1138

〔義弘公御譜中〕

〔寫〕

〔本文書ハ一二二七号文書ト同文ニツキ省略ス〕

1139 好便候条令申候、仍世上之事六ヶ敷罷成、さわかしく躰

ニ候、様子ハ 内府様御内衆伏見御城數日籠候を、諸軍

兵取巻、夜白ニ責候、未落去候、 惟新様奉始、御供衆

方無隙軍勞被成候、我等事此内大坂へ被召置候得共、人

數一分伏見(マ)召寄、當時城き(マ)被仰付相越候、城より

之鉄炮ニあたり手負有之候得共、我等事尚今迄無存分、

可易心候、か様之時節、此地へ我等式有合候事、さりと

てハ幸之儀ニ候、隨分無油断御奉公可仕覚悟ニ候、其元

之儀、何篇無油断分別頼入申候、千代丸兄弟手習其外人

ニ成候様、吳見頼入申候、恐惶謹言、

七月廿三日

有馬藤七兵衛純房判

宿許

まいる

1140

「御文庫四拾八番箱中」家久公御譜中ニ在リ

今月二日之御狀、同廿日伏見ニ上着、披見申候、然者人數可被差上由、及數度雖申下候、于今無其甲斐候、然処爰元亂劇大破ニ罷成候、左候へは、手前無人ニて何を申候ても、不任心事迷惑仕候、今度之御書面大方成文牒、無御心元候、於様子者、以使僧申入候条不具候、恐々謹言、

「朱力平」

慶長五年七月廿四日

維新(花押)

少將殿

まゐる

1141

「御文庫四拾八番箱中」家久公御譜中ニ在之

猶々手前人數無之候て、爲何忠節も不罷成、失面目果候、今度於致馳走者、御家之爲ニ可罷成儀と取沙汰候、委敷者重而可申候、右之趣諸神も御照覽、僞ニあらず候、余者彼使ニ相含候、將亦かミさま大坂へ御座候間、無何事候、可御心安候、兼又石治少事者、追付大垣へ下向候て、秀頼様へ御目見得可在之由候、早竟諸式はか行不申ニ付而、被召出候と聞申候、是又爲御存知候、

就幸便啓達仕候、仍上方忿劇之儀、度々以使申渡候、爰許之儀、吉凶之境更不見及候、然者関東へ下着候御人衆者、一人も無上洛候間、彼表之様子、兎角相聞不申候、

石治少事者、今日伏見へ上着之由候、治少被遣之候書狀、此便ニ進之申候、先書ニ如申候、人數早々被仰付可被指上候、聊不可有油断候、余者此使ニ相含候間、不能重筆候、恐々謹言、

「朱力平」

慶長五年七月廿九日

維新(花押)

少將殿

まゐる

1142

「御文庫四拾八番箱中」

今度上方錯亂之儀、内府様御事 大閤様被背御置目、爲景勝成敗東國へ御出馬候、此外 秀頼様御爲不可然儀共多々在之付而、各一同ニ被企鉾楯候、伏見御城ニハ内府様御人數籠居候間、噯ニも不成防戰最中候、然處手前無人ニて、爲何儀も不任心中、失面目果候、今度忠節を盡候者、御家之御爲ニ可罷成儀と聞候へ共、無人故諸事不罷成、殘多次第二候、因茲人數早々可差上之由雖申下候、可爲遅々と心遣候、此度之儀者、左右方之儀を

『樺山紹敏日記』

不見合、急速ニ可罷上候、聊油断有間敷候、帖佐方之分
 ハ在京之人數過上候之間、盛等を以可差上事ハ、速罷成間
 敷候、先條に申候様ニ、心有へき人ハ不寄分限、自由ニ
 て可罷上事此時候、若自余之盛等之沙汰共聞合候て、續
 衆延引申候てハ不可然候、兼又貴所兩人事者、然与在國
 候て諸事可申付候、弥其許之調ならてハ致首尾間敷候、
 是又能く可被入念候、委曲此使相舍候、恐々謹言、

七月廿九日

維新(花押)

本田六右衛門尉殿

伊勢平左衛門尉殿

一慶長五年庚子六月中旬、奥州之長尾殿一揆ニ付、内
 府様関東江御下向之処ニ、石田方謀叛爲張本故、八月
 中旬京都之乱不及言語、武庫様當時寄親成間、被下知
 ニ隨て伏見之城仕落被成候、石田者美濃國へ追懸、
 内府を可打たくミ成處ニ、尾州清洲と云所之人跡福島
 左衛門太夫と云人心替して、石田如此企之由を 内府
 ニ知せ申候、自夫取て返し、内府上洛成間、関ヶ原
 と云所ニ而防戦也、石田打負て散々成、武庫ハ手

『神戸久五郎咄覺』

之者殘少ニ打被成、爲殘者共式三百ニ而と、有所ニ幡
 を立て暫御坐候へとも、敵恐れて不寄付、扱ハとて、
 島津兵庫頭罷退申候と使を立打通る、さずか手ニ立敵
 もなし、所々ニ而さ々へけるを追拂、跡々追懸るを取
 て返し打散程ニ、伊勢・伊賀・大和・河内・和泉へ打
 通り、船ニ乘て押浮ふ、大坂へしちの人有けるハ、付
 置者共才覚仕候而、兵庫之沖ニ而船漕合て瀬戸内を打
 通ニ、手に立者なし、日州細島へ船押付、本國へ下着
 也、此関ヶ原之軍之儀有別紙、

一次年、公方様大坂御打立、江戸江御下向被遊候、其刻
 公方様より 惟新様江伏見御城御番御頼之由、被仰置
 御下向ニ而候處、御城御番衆鳥井善右衛門殿・内藤殿
 ・落合殿、本丸を相渡不被申候ニ付、其後度々以御使
 被仰候得者、本丸御渡被成候得、參合御番可被成由被
 仰候得共、曾而相渡申儀不罷成候由被申候、左候而、
 此方々被仰候者、二之丸ニ罷有各を本丸ニ召置、其下
 ニ罷成御番仕候事ハ不罷成候由被仰、御番不被成候、
 然處ニ石田殿より 秀頼公之御奉公此時ニ候間、御奉

1145 慶長五年庚子

公可被成之由ニ付、其通ニ候、頓而御城を石田殿せめ被申候、此方之先手松丸口ニ而候、仕寄之惣奉行入来院又六殿、其脇奉行久留休齋、我父松岡勝兵衛兩人ニ被仰付候處、我等之父若輩も、伊勢國司之内ニ而左様之事ニなき申候間、一夜之内ニ茂以外敵近仕寄、萬事之儀下知仕候而、余之仕寄も殊之外敵近仕寄を付、別而肝を煎申候故、又六殿御覽候而、惟新様江細、被仰上候、自其御前江被召出、此度者仕寄ニ別而辛勞仕候由被聞召候、一段神妙ニ被思召候由被成御意、御寄合ニ而御食被下候、誠々忝儀共、可申様無御坐仕合ニ而候、自其一日ニ四度宛、朝日晩夕御前ニ而御寄合被成候付、古參新參衆茂浦山敷申程之事ニ而候、如此仕合ニ而候間、外聞実儀忝奉存候間、此度一命を相捨候而御奉公可仕候被申候、弥精を出被申候事、

八月朔日、有馬藤七兵衛純房山之丞純齋子なり、伏見城を攻らるに從ひ、敵と奮戦して死す年三十八、同小者善七・同善六純房と共白坂助六篤次・下も皆同し、

井尻甚六年十財部傳右衛門盛明・富山清右衛門義陣・福永助十郎・四本八兵衛忠次・東郷源四郎重信重尚の父なり、

1146

有川五兵衛喜左衛門祖和田仲藏義音北郷忠能臣にて、北郷孫市久永に屬きて伏見に戦死、若松藤藏同上和田主兵衛尉同上山崎助右衛門重有子孫加治木にあり、松元市右衛門伏見にて戦死とあり種子島次郎兵衛時宗種子島氏臣なり石堂市右衛門同上、檜原弥二郎同上山下喜六祿慶重張臣にて伏見城攻の時戦死、下小川平左衛門・牧喜助、二人も同し、

『神戸久五郎咄覺』

一 八月朔日、伏見落城、其刻未明、松丸口与間ニ五代舍人殿・我等之親勝兵衛一番ニ相付、我等之親、ハ鑓ニ而候故、矢さまを三ツ四ツ閉被申候処ニ、堀内より親之鑓を敵取申候間、内ニ引申候ニ付、門脇之石垣之中程迄引上申候得共、親引勝被申候、石垣より下江落被申候由、舍人殿被仰候、父も我等ニ左様ニ被申聞候、ケ様走廻仕處江、草すり之はつれを鉄炮ニ而打ぬかれ、誠深手負、十死一生ニ相究候、財部傳内殿茂門も内ニ被參候而、敵と組打被仕、老ッ枕ニ討死ニ而候、父勝兵衛深手之故、相果可申与究候得共、惟新様毎日一度ッ、御見廻被成御藥被下、御蔭迄ニ而命たすかり被申候、自其無程美濃國大柿江御越ニ而候、父茂御供仕度之由ニ而色々被仕候得共、未腰一圓ニ不罷立候故、

我等計大柿江御打立前ニ、今度ハ別而致分骨御奉公爲

仕由被成御意、於大坂御藏本、米六拾石父ニ被下候、

其時分之六拾石者今之百石ニ而可有之と存候、誠辱次

第不淺儀候間、頓而手仕立、御跡ヲ御供可致參上由申

上候事、

1147 『大重平六覺書』

一石田治部少輔殿慶長五年野心を起し、西大名から繰廻

し、其後嶋津殿御同心の由被申候得共、家康様へ別

而被仰合候条、御同心被成間敷候通被成御意候、夫ヲ

伏見御城番衆松平主殿介殿・鳥井彦右衛門殿、石田治

部少輔殿より被仰候者、右之衆御同前ニ可被成之由承

候得共、成間敷由御返事被遊候、平地にて御味方ハ被

成間敷候間、御城へ御籠可被成候由被仰候、然共城主

取衆より、嶋津殿城ニ入申事成間敷の通被仰候付、於

其儀者平地にて御味方罷成間敷、不及是非御替可被成

与御意候而、井尻弥五助被仰付、江戸江右之通御狀を

以申上候處、家康御返事御狀持參申罷登、近江の水

口にて科められ、御狀を捨御判計取留候處、頓而籠舎

をさせられ候得共、色々ちんし籠ヲ出被申候而、伏見

江罷登候得共、御返事ハしらす候事、

(本号ト次号ハ一四〇五号記録ノ一部ト同文ナラン)

1148

『全』

一慶長五年七月十九日に、伏見御城へ矢入御坐候、無程

同八月朔日落申候、夫ヲ頓而美濃之様ニ御下被成候間、

大垣ヲ沓里奥須之侯与申所へ御陳取ニ而候、其間ニ大

川有、六之渡与申候而船渡也、其後瀬ニ石田殿・小西

殿、惟新様大垣之城ヲ御出合被成、惟新様へ御談

合御坐候處、内府方之衆美濃國岐阜の城をつめ落し、

石田殿人數梅野与申所ニ而三百人程討取、直其人數六

之渡押寄候、此方之人數ハ須之侯へ皆々召置候、御供

衆入來院又六殿・川上久右衛門殿・新納矢太右衛門殿

・喜入攝津守殿、其外拾人計にて御坐候、其時石田殿

被仰候、様子ハ稠御座候程、先々御除可被成通被仰候

得共、人數を皆々須之侯へ召置候、彼人衆老人も不殘

繰除不申、我等除事罷成間敷由、御意被成候、然共石

田殿めれん被成候間、大垣のことく被爲引候を、新納

弥太右衛門殿・川上久右衛門殿、治部少輔殿馬之口を

取、兵庫頭殿爰元江相はまられ候、めれん罷成間敷

「義弘公御譜中」

候よし被申候へ共、馬を引立大垣の様ニ籠被成候、然處木脇休作殿馬乘、長刀を持六之渡掛入、薩廣の舟慶と名乗掛渡候、御前て被參候、御意被成候へ、久作馬を乗入參候を御覽被成、千騎のきをいと御意被成候、其より須之俣之人數も不殘除取申候而、大かきの城ニ御籠被成候、夫より赤坂江家康之御陳被成候、惟新様も大垣江數日御滞留被遊候、「已下末ニアリ」

先是六月十七日、内大臣家康卿爲長尾氏景勝退治、既下向于關東也、石田治部少輔三成思得此時、謀所殘之老而欲拒關東、催關西之諸侯、有東國發向之企者急也、於予亦有催促、而自七月二日至同十七日固辭數返、又依内府之有堅命、入伏見城以死請警衛者匪啻再三、然而城主鳥井彥右衛門尉・内藤彌次右衛門尉未嘗許焉、無如之何、陽曰可應三成之催在大坂矣、此際旅庵馳上於薩州來、於茲乎、遣旅庵於伏見、與兩將彥右衛門尉 彌次右衛門尉俱達守城而不可焉、吾今欲背三成之催求得要害之地、忽策一陣不變素意、雖然數年於朝鮮國致軍務勞、經七十年揚歸帆赴日本、則直上帝都、或在于伏見、或在于大坂、敢以無有

閑暇、所以數年爲勲勞之臣等、漸漸免歸國矣、且復伊集院源次郎忠貞據莊内背大守、因茲所從之騎步馳赴其地者多矣、是以今也旗下士卒不過二百餘人、以少寡兵不應三成之求、則迄死亡必矣、非翅一身死亡、自忠恒主妻・予之妻至領國貴族妻子、爲質皆在大坂、渠等盡不逃死莫所忍之、故不得已、而與三成者非背内府權也、今日八月朔日關西諸將攻伏見城陷之畢、

與關西諸將俱、慶長五年八月十五日、發於伏見往江州大津浦、乘船遠渡湖水著澤山岸、兩日留于此、往垂井五日在于此、往大垣數日留滯之際、三成曰、欲使我進洲侯、是以往其地爲一宿、翌朝又曰、退澤渡、諾其言而引入澤渡矣、今夕押川鄉兵衛斬敵首來示于予焉、翌朝三成來予營曰、聞於澤渡有太刀初之士、早欲遂對面、忽召出曰、今也爾於大垣太刀初、先祝之忽昇黃金一枚也、

1150

一筆令啓候、於天下之儀者、從古曆可被仰入候条、不能申候、於于今へ、御人數國中無殘被召連、急度御上洛肝要候、玉藥御兵糧等之儀者、從公儀被仰付之条、御人數有次第御馳走此時候、猶期面上候、恐謹言、

備前中納言

〔朱カキ〕
〔慶長五年カ〕八月朔日

秀家(花押)

安藝中納言
輝元(花押)

嶋津少將殿
御宿所

〔家久公御譜中ニ在之〕

1151

〔義久公御譜中〕

〔正文在吉田次郎兵衛爲清〕

猶以おく方へ御奉公仕衆へ、此節之儀涯分頼候通可
申聞候、

爲使差上せ候處、京都猥成立たる由候、誠奇特之節登合
候間、しかと息女之傍へ可罷居事憑入候、殊存松相煩、
御用ニ可罷立躰にて無之由聞得候、時分と云、可爲事闕
候条、別而可添心事此時候、爲其染筆候、恐く謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長五年カ〕八月五日

龍伯(花押)

吉田美作守殿
(清考)

1152

〔御文庫三番箱宝鑑中〕

先日者美作に御音信、慥届候、即返事申候之間、定而可
下着候、抑今度伏見之仕合、誠不思議千万之至、不及言

語候、委様躰、定而維新より可有注進候間、不伸筆紙候、

雖無指事、的使候間一筆申候、かしこ、

八月八日

龍伯

信尹

1153

〔御文庫四拾八番箱中〕〔家久公御譜中ニ在之〕

已上

度く如申越候、上方亂劇無盡期候、然者當手無人爲絶言
語躰候、片時茂無御由断、人數罷上候様ニ可被仰付候、
於彼儀者、去三月已來度く雖申下候、于今無其首尾咲止
迄候、於様子者、市成掃部兵衛尉以条書可申入候間、不
能書載候、猶追く可申達候、恐く謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長五年カ〕八月八日

維新(花押)

少將殿

1154

〔御文庫二番箱 義弘公七通中〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

去月廿九日御狀到來、拜見候、於此表之儀者、從兵庫頭
殿可被仰達候、伏見之儀兵庫殿其外御手柄を以、則被乘

崩、悉被討果候、此比者至伊勢表人數差出、所々仕置等申付候、定而内府可有上洛候条、可及一戰覚悟候、東國之儀、佐竹・最上・會津へ一味之由候、就其内府上洛も不定相聞候、於此表者、丈夫ニ申付候間、可御心安候、御方様御事、一刻も早々御上國待存計候、不可有御由断候、恐々謹言、

〔朱力半〕
〔慶長五年〕

八月十五日

藝中

輝元(花押)

〔宛切ル、〕

〔御文庫二番箱義弘公卷中二「家久公御譜中ニ在之」

以上

先日粗雖申越候、出張砌ニて具ニ不申入候、然者小傳次兄弟・幸侃内儀下向之儀、始末思唯仕候条、拙者前（傳）々暇遣候儀、曾以無之候、右之人衆下向無心元よし、先書ニ被仰越候、尤至極候、拙者も其段致分別、下向之儀種々雖難澁仕候、内府公御意候之条、差下申候、下向前廉ニ右之旨申越候キ、少も無由断候、
一三月十七日、内府公以御意、小傳次・三郎五郎・千次へ見參仕候、就夫右之兄弟へ申聞候様子者、萬一別方

へ主人頼候者可爲曲事由、喜入攝津守・存松兩入方も、小傳次兄弟へ可被申渡由内談仕、宅万与八左衛門尉・鹿嶋太郎兵衛尉此兩人ニて細々申含候、

一其後如申越候、小傳次兄弟并母事、連々氣任ニ候条、下向停止之旨申聞候ても、とても承引仕間敷候、爲後日候之条、可被聞召置由申越候、定其段可相届と存事候、

一山口勅兵衛尉方を以、於大坂從内府公被仰聞候へ、幸侃妻子ニ暇を遣候へと被仰候、雖然國元へ相尋可申入由言上候而、一着之御返事不申上候、

一内府公東國へ御下向之刻、山しなまて御送ニ罷出候處、伊圖書方・山勅兵方以兩人被仰候へ、幸侃女房大坂御城へ三度推參仕、已ニ内府公御座所へ罷出、御國元之様子、種々様々悪様ニ言上仕候、然時者、ケ様之候仁ヲ上方へ被召置候者、奉行中諸人へも罷出、いかやうの儀を申かすめ候へんも不相知儀候条、早々差下候而可然候へん由、しめて御吳見被成候条、任御意可差下由、御返事申入候、其後小傳次并母暇遣候由、以兩使申聞候、三郎五郎・千次下向之儀へ、聊以拙者不存候、小傳次へ暇遣由申候時、はや五日以前ニ、三郎五郎・

千次下向仕候由、返書ニ申來候、扱々慮外至極ニ雖存候、可然様無之候間、先小傳次下向之時分者、とかくの儀も不申候、爲御存知候、

一我等事、昨日十五日ニ佐保山迄相越申候、明日者美濃之内たるいと申所へ陳替仕候、それよりさきの陣所ハ未相知候、誠無人衆にて候間、外聞実儀めいわく千萬候、

一存松煩以外悪候条、當分かミ様御側ニ罷居、諸事を可申付人無之ニ付、龍伯様より内府公へ爲御使被差上候吉田美作守留置、陳立留主之間、先々諸事可申付由申候而召置候、然者誰そかミ様御側可主取人被仰付、急度可被差上事肝要候、御油断有ましく候、恐々謹言、
〔朱カキ〕
一慶長五年八月十六日 維新(花押)

少將殿
まゐる

幸便之条、申下候、

一今日迄者、我等も存生罷居候事、

一上方亂入、無是非次第ニ候事、

一三右衛門・宗左衛門・助右衛門、急度上洛可然様可申

付事、

一ケ様之儀も可在之と存、中間を「本ノマ、」おい候而可參之由申下候へ共、爲何子細ニ而候哉、不指上由候、無心元事う

ミ山候事、

一夫丸成次第可上候事、

一たとひ我等相果候共、むすめ一人在之儀候間、方々借物之儀可申來候条、尚取納之儀少も無油断可相調候、一たとひ只今相果候而も、武庫様之御願ニて、諸大明も忝御意難申盡候事、

一何事も五郎右様御分別次第ニ、跡々之儀可申付候、聊以油断不可有候、

一五郎右様書狀上度候へ共、餘取亂候条、此書狀可懸御目候、以上、

〔慶長五子〕
八月十七日 〔旅籠〕
(花押)

平野伊兵へとの

上野吉兵へとの

大場かん丞との

玉利對馬との

黒木大藏との

「御文庫ニ番箱義弘卷中」家久公御譜中ニ在リ」

猶々内府公の貴所へ預候之鷹、こゝもと陳立ニ付而取亂候間、幸山路市兵衛尉罷上候条下申候、將又帖佐方之人衆、定可罷上候、自然濱市・かこしま之人衆、同前ニ罷立候へなと候てハ、可致遅々事可在之候、帖佐之人衆者今程過上御座候条、盛にてハ罷成ましく候、伊勢平左衛門尉・本田六右衛門尉兩人として、人衆すゝめ候て、早々可差上よし□被仰候而可給候、

七月廿九日之書狀、八月十七日濃州至垂井上着、令披見候、

一龍伯様御上洛之儀被聞召合之由、御尤ニ存事候、然者被成御上洛、かミ様へ御替候はん哉と申越候も、世上靜謐之時分、内府公御意候条、右之分申越候ツ、當時者上方之成立、諸式被成改易候条、于今者龍伯様御上洛之儀不入儀候、委細先書ニ申下候条可相届候、

一去春以來、伏見御留主番ニ付而、人衆可被差上由、數度雖申下候、無合點候哉、終ニ一人も不被差上候、千萬無心元存候、

一今度上方就轉變、鹿嶋太郎兵衛尉差下、様子具ニ申越

候、雖然御人衆被差上候之共、又者被上間敷とも、否之返事無之、大方成御文牒ニ候、早竟太郎兵衛尉若輩故、委細不申届候哉、不審深重ニ存事候、連々御家中が在京之人衆七千人之御盛、兼日相定由及承候条、先其内を半分と存、三千五百程急度可被差上由、鹿嶋太郎兵衛尉を以申越候キ、如此申下候様子者、御國元之儀も心遣存候ての申事候、然処九州衆過半被成在京、當時秀頼様御用ニ被相立候、在國之衆者皆々被召上候、其上分國よりも御人衆馳走可仕由被仰聞候間、其後申越候ハ、最前三千五百人可被差上由雖申下候、他國なミの儀候間、有様之軍役被仰付肝要之由、細々申下候、然者此度之御書中、何方とも無一着、遠慮之躰と相見得申候、定於御心中者別儀有間敷候へ共、何としたる御事候哉、無心元存事候、

一今度之御使、態上方亂入之躰被及聞召、被差上候御札候之条、上方之行、御國元之仕置、旁被入御念被仰越候へは、愚意も又在之儀候、然処一着之様子も無御座、一段大方成書面、無心元事深重ニ存候、

一秀頼様御奉公と申、御家御爲と申、拙者儀一命を捨可申事覚悟之前候、然間不顧恥辱御奉行中任御下知、濃

州垂井と申在所迄出陳仕候、當分在京之人衆へ、かこ嶋・富隈・帖佐役人存知之前候条、人衆付今度差下不申候、伏見御城攻ニ手負死人多々御座候間、弥無人共中へ可申様無之候、今申分成共御人衆被仰付、早々可被差上事、且秀頼様への御忠節、且御家之御爲、旁以御分別此時候、必拙者へ御見次と申事にてハ曾以無之候、

一御奉行中へ書狀認可申由候て、判紙二まい樋ニ上着申候、雖然此度上方就物念、御人衆可有御馳走共、又者上せ有間敷共、更ニ御書中ニ相見得不申候条、書可申様雖無御座候、餘無音ニ罷成候、又爰元成合次第と承候条、後日之首尾を不存候へ共書狀調申候、案文差下候、

一内府致御供被罷下候上方之人衆并井伊兵部・榊原式部東國之人衆引率、尾州至清洲上着之由申來候間、定近々可被及一戰候、然時者再書可進之事不存候条、不遺胸懷申達候、

一出水表之儀、定可爲不審候之条、被添御心候而可預候、將又肥後表之御人衆、此度之覚悟何程ニ御座候哉、無申迄候へ共、可被聞合事肝要候、不可有御由断候、

一此書狀長文にて候条、御六ヶ敷被思召候共、よくく被御覽届候而可預候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
慶長五年八月十九日 維新(花押)

少將殿
まいる

〔義久公御譜中〕

〔正文在加世田衆言田種右衛門清宣〕

其后無音罷過候、心外之至候、然者上方不慮之亂劇ニ付、爲祈念、今度小百味十座分指上候、當家安全之儀、於

神前可被遂懇祈事憑入存候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
慶長五年八月廿日 龍伯(花押)

〔正文、當書切テ無之〕

1159

〔御文庫四拾八番箱中〕

猶々出水之儀者、國界之儀候間、惣別在國之人衆へ彼表へ在番可申付候、其外衆中氣任無之様ニ、連々之置目稠可申付儀專一候、乍勿論貴所事者在國候而、諸式可申付事肝要ニ候、將又長宗我部殿事者、惣別人數式千人之御盛にて候へ共、秀頼様へ爲御馳走

五千人被召列、近日勢州へ着陣之由候、立花殿事ハ
 千三百人之御盛にて候へ共、是も爲御馳走四千人召
 列、今日爰元ニ上着之由候、余國如此候處、さつま
 の仕立僅千人之内にて、爰元を仕舞候事、幾度申て
 も無面目次第、難載筆紙候、兼又從隣國爲何儀を申
 來候共、疎忽成分別、努々有間敷候、然者中書事ハ、
 此方ハ佐土原へ注進候てより、人數早當陣ニ上着候、
 然處出水・帖佐兩役人として一到來無之事、更以無
 心元候、
 幸便之条申越候、仍上方念劇之由、度々申下候、定而可
 相届候、然者関東与京都之御弓箭にて候条、尾州と濃州
 之堺を隔防戰候、就其拙者事も、御奉行中任御下知、濃
 州垂井与申在所ニ着陣候、當手之人數も、伏見城攻ニ手
 負死人多々候条、弥無人ニて晴かましき出陣、手前之迷
 惑さ各推量之外候、殊近日者 内府公御供候て、東國へ
 下向候上方之人數、并井伊兵部少・榊原式部少、東國之
 人數を引卒、至尾州清須上着候由申來候、定近々可被及
 一戰候、重々申下候やうニ、帖佐ハ之續衆、分限・少分
 限を不謂、可有心人數者可罷上事此時候、能々無由断可
 申付候、於巨細者、旅庵可申候之間聞筆候、恐々謹言、

1160

八月廿日

維新(花押)

本田六右衛門尉とのへ

〔御文庫ニ番箱義弘公卷中ニ一家久公御譜中ニ在リ〕
 追而申候、

一判紙ニまい被差上候条、書狀調候而、御奉行兩人へ進
 入申候、石治少老へハ判紙不參候間認不申候、何も重
 而人衆可被成馳走も、又者馳走有間敷候者、其理急度
 被仰分候而、書狀可被上事肝要候、

一長宗我部殿人衆之事、二千之軍役にて候へ共、此度之
 御忠節ニ候と被仰、五千めしつれ被罷上候、是又爲御
 心得候、

一黒田加兵衛尉上着之砌、被仰上候誂物之事、具ニ承届
 候、次第ニ調査せ差下可申候、然者内府公ハ貴所へ御
 給之刀可被上由被仰越候、一段祝着申候、今度之御弓
 箭はれかましき儀ニ候へ共、然々之かたな所持不申候
 条、急度御上せ候而可給候、恐々謹言、

〔朱力キ〕
 慶長五年八月廿日

維新(花押)

少將殿

まいる

「在御文庫四拾八番箱中」「義弘公御譜中ニ在リ」

「御文書」

猶々今度又八郎殿の到來之書狀ニも、かミ様御側置
目等之儀、其方へ可申付由被仰上候、幸之儀候間、
いよ／＼入念られへき事專一候、以上、

就存松下向之儀、増右様へ書狀進之候、其方持參候而、
様子口狀ニて懇ニ可被申入候、爲其我等増右へ進候書狀
之写遣候、隨而當陳美濃之内垂井之宿へ、今程者在之儀
ニ候、然者敵間五六里程候之条、近日防戰有へきかと相
待候、然処當手無人之躰、無是非候、然ニ長宗我部殿ハ
惣別二千之軍役ニ候へ共、此度之爲御忠節五千被召列候、
立花殿ハ千三百之役ニて候へ共、四千程被召列候、如此
諸大名被勵手柄候之処、去春以來人衆之儀申下候へ共、
今日迄者爲續衆一人も不被差上儀、御國元之御談合無心
元候、此等之段、かミ様へも可然様ニ可被申上候、兼又
留主中置目等之儀、諸事入念無緩様ニ可被申付事肝要候、
尚追々可申越候、恐々謹言、

「朱力半」
「慶長五年」八月廿一日

維新(花押)

吉田美作守殿

任幸使用一書候、仍細嶋が今月十四日ニ出船仕、同廿
二日ニ大坂へ着津申候、

一武庫様御事も、美濃國今次と申城を御せめ爲可被成、
大坂の四日路をくへ御入之由候、我々共も明日廿四日
がおくのことく參へく候、

一京・ふしミ・大坂、何れも御無事ニ候事、

一其地方御上洛之衆ニ者、長山伴六殿・三原与左右殿・
池田治介殿・青山利兵衛殿、此人衆ハはやく打立被成
候故、我々同前ニ着津被成候、其餘之衆ハ跡船ニて候
之条、いまた無着津候、

一酒勾式部少輔殿へ、大坂へおく様之御とも被成候て御
入候、其外赤塚源太左衛門殿・宮内二郎左衛門殿・曲
田八郎右殿・野村喜右衛門殿、此衆ハ大坂へ御座候、
其外之人衆ハおくへ御とも被成候、

一長山殿へ御心得有へく候、伴六殿無何事御着ニて候、
一ひしかり御藏米之始末之事、山田讚岐殿御熟談有へく
候、

一御近所之衆へ御心得奉頼候、いづれも申度事多候へ共、
急候まゝ申後候、恐惶謹言、

同甚作

八月廿三日

重親(花押)

福崎大膳亮殿

參人々御中

玉泉寺

圖書頭

忠長判

猶々ふしみの御城事、今月一日ニ被詰崩候、彼地ニ

て(死志)之人衆、かまふ衆ニハ、福永弓左衛門殿・井

尻甚六殿ニて候、

拔水与兵衛殿手をおひ被成候へ共、いたミ不申候、

おくへ御供ニて候、以上、

1164

〔御文庫拾七番箱十五卷中〕

天爵起請文之事

一 奉對 忠恒様、守御家安全之旨、世上如何様之亂劇有之共、不与他可勵忠節候事、

一 庄内御弓箭中、毛頭別心を存不致計策、勿論源次郎へ

入魂之儀無之候事、

一 親子之間たり共、對 忠恒様於存別意者、相離順儀之

御奉公可仕候事、

一 不寄自他國、聞召候へてはの儀承付候者、則可遂披露

候事、

一 就進退、御不審之子細可有御座時者、速御糺明所仰候

事、

右条々偽於申者、

敬白天爵靈社上卷起請文事

▽謹請散供、再拜々々、夫惟年号慶長五年庚辰、月並者十

二ヶ月、日數者三百五十餘ケ日、撰吉日良辰、而致信心

1163

〔財部神社由緒〕

新知目錄

薩州川邊之内

門前

屋敷九畦

同

屋敷一反三畦

合式段二畦 式石式斗

右、爲新知被宛行者也、

慶長五年

八月廿四日

平山村

金田才右衛門先

勝目藤右衛門先

平田太郎左衛門

増宗

鎌田出雲守

政近

比志嶋紀伊守

國貞判

請白、大施主等謹奉勸請、掛忝上者梵天帝積四大天王

豹尾 黃幡 歲德 釋迦善逝 釈提桓因 奉宿却、四天

八天 十二天 廿天 三十三天 十二神將 七千夜叉

廿八部第六天魔王 聖主 天地之卅六禽 百億須弥 百

億梵天帝釋 百億鐵田山 百億閻魔法王 諸天 百億天

衆 百億天人 百億天女 百億童子 百億大力夜叉 百

億惡鬼 百億天上 百億閻浮提中所顯現之大小神祇、上

者有頂天、下者到金輪際佛神、皆悉驚白言、堅牢地神

八海所接龍王竜衆 十王十鉢俱生神 太山府君 司命司

祿 冥官冥衆 有情無情 辰星 南斗 北斗星 日耀星

破軍星 羅喉星 計都星 巨文星 明星 七夕星 八葉

星 本命星 四方四佛 五方五佛 大聖摩利支尊天 太

白神 太歲神 八諸神 十二月將神 天葬神 地葬神

阿豆知神 天神 地神 海神 木神 火神 金神 水神

風神 諸佛諸菩薩 諸善神 東方降三世明王 南方軍荼

利夜叉明王 西方大威德夜叉明王 北方金剛夜叉明王

中央不動明王 大黑尊天 毘沙門天王 大弁財天女 宇

賀神 十五童子 三宝荒神 多波羅天王 武答天神 頗

梨采女 蛇毒氣神王 八王子 八万四千六百五十余神

金剛界七百余尊 胎藏界五百余尊 金剛藏王 晃蛇帝主

大聖金剛童子 普天率土愛染明王 妙見菩薩 過去現在

未來三世諸佛 一萬八千軍神 二万八千軍神 三万八千

軍神 四万八千軍神 五萬八千軍神 六万八千軍神 七

万八千軍神 八万八千軍神 九万八千軍神 十万八千軍

神 二千八百師天童子 一万燈明佛 二万燈明佛 三万

燈明佛 藥師如來 宝生如來 無量壽佛 微妙身如來

文殊 普賢 觀音 勢至 十六善神 八万四千夜叉神、

忝日域崇廟天照皇太神宮四十末社 內宮 外宮 風宮

諸末社 八幡大菩薩 春日大明神 王城鎮守山王廿一社

根本中堂本尊 立塔諸堂諸坊之諸本尊薩埵 祇園牛頭天

王 松尾大明神 平野大明神 吉田 立田 熱田大明神

大原大明神 稻荷大明神 賀茂下上大明神 貴布祢大明

神 北野天滿天神 三輪大明神 住吉大明神 三十番神

愛宕四所大權現 熊野三所大權現 十三所權現 九十九

所權現 廣田大明神 金峯山權現 吉備宮大明神 對馬

天王 羽黒山大權現 葛城大權現 峯々藏王權現 子守

勝手大明神 梅宮大明神 法花廿八品 三藏法師 鞍馬

毘沙門天 吉祥天女 雨寶童子 閔東守護神伊豆箱根兩

所權現 三島大明神 鹿嶋大明神 富士大權現 白山妙

理權現 立山大菩薩 諏方上下大明神 出雲大社大明神

多賀大明神 御靈八所大明神、殊者氏神、摠者大日本國中六十六箇國大社 二千小社 五百九十二所大小神祇等
 地藏菩薩 陀羅尼菩薩 龍樹菩薩 虛空藏菩薩 栴檀香菩薩 大病神 八万四千鬼神 大恩神 歲破神 天蘇神
 大疫神 太歲神 夜氣夜刃神 妙鬼神 六百五十余神
 金山六十万鬼神 刀八毘沙門天王 父天狗太郎房眷屬
 九億四萬三千四百九十余神 善貳師童子 八所大明神
 善害坊 次郎坊 八萬四千眷屬 飯繩大明神 四十四萬一千眷屬 大天魔三万三千 小天狗三万三千眷屬 智羅天狗 十二天狗等、城中山々峯々嶽々所居住之大天狗
 小天狗等、各作群集而正路之旨照鑑給へ、若偽心於在之、立處受白癩黑癩之重病、八万四千毛孔、四十二之骨節、日々夜々苦病无止、深厚蒙御罰、弓箭冥加未盡、佛神三寶雖作祈願不可叶、於後世者墮八寒八熱阿鼻無間大地獄、到未來永却不可有浮期者也、仍靈社上卷起請文如件、△

慶長五年庚子八月廿五日

右馬頭入道

宗恕(花押)

進上 圖書頭殿